

第二 證人吟味ニ係ル一般ノ規則

〔第五百九十二〕 證人ノ出席スルコト及ヒ其証據ノ誠實ナルコトヲ堅
 確ニスル爲メノ特別ノ規則ヲ諭示スルノ前宜ク先ツ證人吟味ニ係
 ル一般ノ規則如何ヲ講究セントス又証人ノ出席ヲ肯ンセサル時ノ
 處置ト及ヒ證人ニ就テノ禁止及ヒ故障トハ後ニ逐次ニ之ヲ言ハン
 是レ蓋シ議論ノ明瞭ヲ得ル爲メノ最良ノ順序ナリ
 總テ證人吟味ヲ爲サント欲スル者既ニ其掛リ裁判官ニ談向シテ其
 示令書ヲ得タルニ於テハ宜ク其相手方ト及ヒ其申立ヲ爲サ令メン
 トスル證人トヲ呼出ス可シ

〔第五百九十三〕 往古ニ於テハ證人ヲシテ裁判官ノ前ニテ各別ニ其申
 立ヲ爲サシメ雙方本人ハ唯吟味ノ初ニ於テ證人一同ヨリ誓詞ヲ宣
 述スル時ニ立合フコトヲ得ル而已ニテ申立ノ席ニハ立入ラサルノ規

則タリシカ共和政治第三年「フリユクダール」月七日ノ法律ニ至テ
 始テ右ノ吟味ヲ公行シテ且本人等ヲシテ出席スルヲ得セ令ルコト
 成レリ此レハ我輩先キニ既ニ之ヲ言ヘリ意フニ此規則ハ取リモ直
 サス本人等ヲシテ證人ノ陳述スル所ヲ傍聽シ以テ自己ノ利益ヲ監
 督スルヲ得セ令ルヲ以テ誠ニ至當ナリト謂フ可シ是故ニ右ノ法律
 ハ其後廢閣シタルニ此規則ハ仍ホ存シテ竟ニ訴訟法ニ於テ之ヲ再
 定セリ左ニ其第二百六十一條ノ文ヲ揭示ス

「相手方代書師ヲ任シタル時ハ一方ノ者ヨリ相手方ノ代書師ノ住所
 ニ呼出狀ヲ送り又之ヲ任セサル時ハ相手方本人ノ住所ニ呼出狀ヲ
 送リテ其本人ニ證人吟味ノ席ニ出ツ可キコト要ム可シ但シ其呼出
 狀ハ證人ヲ吟味スル日ヨリ少クモ三日前ニ送ル可シ又其呼出狀
 ニハ一方ノ者ヨリ出サントスル證人ノ姓名、職業、住所ヲ記ス可シ若

シ此規則ニ背ク時ハ其證人ノ述ヘタル證ノ効無カル可シ
〔第五百九十四〕右ノ規則ニ依ルニ若シ呼出狀ヲ代書師ノ住所ニ送達

セサルキハ其無効ヲ致ス是他無シ本人ヲシテ必ス其代書師ノ示教
ヲ得セシムルカ爲メナリ故ニ縱令使吏其呼出狀ヲ本人又ハ其親族
若クハ其家僕等ニ渡シタルモ仍ホ之ヲ無効トセサル可カラス○仍
ホ言フ可キ有リ右ノ規則ハ誠ニ良好ナレモ畢竟其旨趣ハ本人ヲ呼
出スニ在リ然ルニ正文ニ於テハ證人ヲ呼出ス時ノ如ク其住所ノ距
離ニ隨テ日數ヲ増加ス可キ旨ヲ揭示セサルヨリシテ人往々意ヘリ
右ノ三日ノ數ハ決テ増加スルヲ得スト是ヲ以テ本人遠地ニ居ル等
ノ場合ニ在テハ動モスレハ出席スルヲ得スシテ呼出狀ノ不用ヲ致
セリ現今ニ至テハ右ノ場合ニ於テハ審ニ其日數ヲ増加スル而已ナ
ラス亦必ス之ヲ倍增スルヲ要ス
訴訟法第一千代書師ヨリ本人ニ向ケ

テ其相手方ノ証人ノ姓名ヲ送致シ又本人ヨリ代書師ニ向ケテ其肝
要トスル見込ヲ書キ遣シ又ハ自身ニ代書師ノ住所ニ來ル等ノ爲メ
ニハ是非トモ二重ノ往復ヲ爲スヲ以テナリ

〔第五百九十五〕又其證人ノ姓名職業住所ヲ指示スルハ極メテ大切

ノ事ナリ然ラサレハ縱令相手方即チ被告人ヨリ其證人ニ就テ故障
ヲ述フ可キモ之ヲ述フルヲ得可カラサルカ故ナリ此ニ由テ考レハ
右ノ第二百六十一條ノ文ニ但シ此等ノ事ハ證人ヲ吟味スル日ヨリ
少クトモ三日前ニ送ル可シト言フノ語ヲ右ノ姓名職業云々ノ語ヨ
リ前ニ置キタルハ一時編纂ノ謬誤タルヲ疑無シ何トナレハ其三日
ノ期日ハ取りモ直サズ本人ヲ呼出ス事ト並ニ証人ノ姓名職業住所
ヲ指示スル事トヲ目的トスルカ故ニ右ノ語ハ必ス其次ニ入ル可キ
者タルヲ明瞭ナリ

〔第五百九十六〕

若シ夫レ証人ヲ呼出スヲ至テハ全ク通常ノ規則ニ
遵依シテ可ナリ他無シ其訴事中ノ本人ニ非サルヲ以テナリ即チ正
文第二百六十條ノ文ヲ左ニ揭示ス

〔証人ノ呼出狀ハ其証人又ハ其住所ニ送ル可シ〕○証人吟味ヲ爲ス場
所ヨリ三「ミリヤメートル」内ニ住スル者ニハ吟味ヨリ少クトモ一日
前ニ呼出狀ヲ送り更ニ隔リタル地ニ住スル者ニ付テハ三「ミリヤメ
ートル」毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ○言渡書ノ中ニテ裁判所ヨリ証
人立ルヲ許シタル箇條ヲ記セシ部分ノ寫及ヒ掛リ裁判役ノ言渡
書ノ寫ヲ本人ヨリ証人ニ送ル可シ但シ証人ニ此等ノ書類ヲ送達セ
サル時ハ其証人ノ述ヘタル證ノ効無カル可シ

右ノ規則ハ畢竟証人ヲシテ其申立ヲ爲スニ就キ預メ工夫思考スル
ヲ得サラシムルカ爲メナリ故ニ其主意ノ前後整齊ナルヲ求ルニハ

宜ク其間糺セラル可キ箇條ヲ預メ知ラシムルノ事無カル可キナリ
是ヲ以テ裁判所ハ刑事ニ係テ現ニ實行スル所ノ如クニ唯何レノ日
ニ出席ス可キ旨ヲ言送ル而已ニテ其箇條ヲ指示スルヲ廢スルヲ
チ建議セリ意フニ是レハ誠ニ當然ニテ當ニ以テ律意ノ整齊ヲ得ル
而已ナラス亦以テ裁判費用ヲモ儉省スルヲ得可シ然ルチ參議院ニ
於テ此兩全ノ建議ヲ採用セサリシハ眞ニ惜ム可キ事ナラス乎
又掛リ裁判官ハ定式ニ徇フテ呼出ヲ受ケタル証人ノ外ハ其申立ヲ
聽クヲ得ス故ニ証人ノ呼出狀ハ必ス掛リ裁判官ニ差出スヲ要ス
訴訟法第二
百六十九條○右ノ譯合故若シ証人其定式ニ徇ハサルヲ有ルニ於テ
ハ相手方本人ヨリ其旨ヲ主張スルヲ得可キヲ固ヨリナリ然レモ此
事ハ若シ本人ヨリ承諾スルナラハ矢張其吟味ヲ爲スヲ得可シ若シ
夫レ其吟味ノ爲メニ預定シタル期限ニ係ル規則ニ徇ハサルハ縱

令本人ヨリ承諾スルモ猶ホ其無効ヲ致サ、ル可カラス是レ他ニ非
ス社會ノ順序ニ係ル規則タルカ故ナリ

〔第五百九十七〕

雙方本人ノ若キモ亦之ヲ呼出サ、ル可カラスシテ乃
チ同様其呼出狀ヲ掛リ裁判官ニ差出ス、チ必要トス 訴訟法第二
百六十九條 然
レモ雙方本人ハ必スシモ其吟味ニ出席ヲ要スルニ非ス

訴訟法第二百六十二條ニ曰ク証人ハ雙方本人ノ面前ト其在ラサル
所トチ問ハス各自ニ其証ヲ述フ可シ

雙方本人ハ自身出席スル間仍ホ其代書師若クハ其代言人ヲシテ右
ノ証人吟味ニ立合ハシムルヲ得可キ者トス 千八百八年三月三十
日ノ決定書第五百五條

〔第五百九十八〕

唯肝要トス可キハ証人ヲシテ各別ニ申立ヲ爲サシム
ルニ在リ是レ他無シ一同ニ陳述セシムルキハ或ハ其中ノ一人ノ言
フ所ニ依附シテ任ケテ一意ニ出ル等ノ事有ルヲ豫防スルカ爲メナ

〔第五百九十九〕

若シ証人其呼出狀中ニ指示シタル日ニ於テ皆悉ク陳
述スル能ハスシテ其中猶ホ殘ル者有ルトハ其吟味ヲ延長スルヲ得
而シテ其延長シタル旨ハ之ヲ調書ニ記シ別段裁判費用ヲ生スル
無シ 訴訟法第二百六十七條
及ヒ第二百六十九條

〔第六百〕

此ヨリ以下ハ証人ノ如何シテ其中立ヲ爲ス可キヲ論究セン
トス○証人吟味ヲ爲スニハ先ツ其證人ノ分限ト及ヒ其雙方本人ニ
於ケル親姻如何ヲ知ラサル可カラス他ニ非ス或ハ右ニ就キ故障ヲ
述フルヲ得可ク且常ニ其陳述スル所ニ附スルニ相當ノ勢力ヲ以テ
スルヲ得可キカ爲メナリ乃チ訴訟法第二百六十二條ノ規則ヲ左ニ
揭示ス

〔各證人ハ其証ヲ述フル前ニ其姓名、職業、年齡、居所ヲ述ヘ及ヒ本人ノ

何級ノ血屬及ヒ姻屬ノ親タルヲ又ハ本人ノ從者僕婢タルヲ述ヘ
其後誠實ヲ言フ可キノ誓ヲ爲ス可シ但シ此規則ニ背キテ證人ノ述
ヘタル證ハ其効無カル可シ

右ノ規則ノ中ニ就テ其誓詞ヲ宣述スルヲニ係テハ我輩別ニ一章ヲ
置キ之ヲ論示スルヲ以テ爰ニ之ヲ言ハス唯注意ス可キ一事有リ右
ノ正文ニ依ルニ民事ニ係テハ證人等唯誠實ヲ言フ可キノ誓詞ヲ宣
ヘテ足ルナリ然ルニ註誤裁判所ニ於テ証據ヲ述フル時ニ於テハ實
事ハ盡ク之ヲ言ヒ其外ハ一モ言ハサルノ誓詞ヲ宣フ若シ夫レ重罪
裁判所ニ於テ証據ヲ述フルニ至テハ右ノ外仍ホ憎怨スル無ク亦畏
願スル無ク之ヲ言フノ旨ヲ誓ハサル可ラス意フニ証人ノ裁判所ニ
於テ實事ヲ申立ツ可キヲハ何レノ場合ニテモ同一ナル可キニ此ク
ノ如クニ其階級ヲ別ニタルハ抑亦驚怪ス可キニ非ス乎我輩ノ意ヲ

以テスレハ凡ソ誓詞ヲ宣フルニハ皆同一ノ例言ヲ用フルヲ以テ至
當ナリト思量ス

〔第六百一〕 若シ夫レ證據ヲ申立ルノ様式ニ至テハ我輩既ニ裁判所ニ
於テ直チニ證人ノ意見ヲ聽カスシテ故サラニ掛リ裁判官ヲ用フル
ノ盡善ナラサルヲ歎惜ス是故ニ責メテハ掛リ裁判官ノ前ニ於テ證
人ヲシテ口上ヲ以テ申立ヲ爲サシムルヲ良シトス即チ正文第二百
七十一條ニ左ノ規則有リ

〔證人ハ口上ニテ其證ヲ述フ可シ書面ヲ以テ之ヲ述フ可ラス〕
若シ證人聾ニシテ且啞ナルガ又ハ外國人ニシテ其國言ヲ用フル等
ニ於テハ掛リ裁判官之ニ一通辨官ヲ與ヘサル可カラス而シテ其聾
啞人ノ如キハ亦書面ヲ用ヒテ陳述スルヲ得可シ但シ此レハ豫メ書
面ニ認メテ差出スト云フニ非スシテ唯掛リ裁判官ノ前ニ於テ其問

糾スル所ノ事ニ就テ文字ヲ用ヒテ答述スルヲ得ルト云フノ義ナリ
治罪法第三百三十二條及
第三百三十三條見合

〔第六百二〕 證人ノ申立ル所ハ掛リ裁判官ノ口占ニ隨フテ書記官之ヲ
調書ニ記シ次ニ之ヲ證人ニ讀聞カス 百七十一條
ノ口占ヲ爲スニハ必スシモ一々證人ノ口上通りヲ舉クルヲ要セス
此レ他ニ非ス或ハ曖昧ニシテ理解シ難キヲ致ス可キヲ以テナリ然
リト雖モ證人ノ口述シタル所ノ事情ハ一モ之ヲ刪去スルヲ得ス此
レハ既ニ彼ノ官令 第二十二卷 命セシ所ニシテ甚至當ノ事タリ
抑右ノ如クニシテ證人ニ向フテ其口述シタル所ヲ讀聞カスヲハ取
リモ直サス其調書ノ確實ナルヲ保證スル爲メノ一手段ニシテ尤大
切ノ事ナリ當此レ而已ナラス若シ其讀聞ノ後證人自ラ其掛リ裁判
官ノ口占ニ於テ己レノ口述セシ所ヲ充分ニ理解セサリシト思量ス

ルヲ有ルキハ再ヒ口述シテ前ニ口述シタル所ヲ改易スルヲ得可シ
但シ此改易ノ部分モ亦調書ニ記シテ次キニ之ヲ讀聞スルヲ全ク前
ト同シ 百七十二條 ○右ノ如クニシテ證人ノ申立タル所及ヒ其改易
シ若クハ附加シタル所ハ掛リ裁判官證人並ニ書記官之ニ其姓名ヲ
手署スルヲ要ス 百七十四條 若シ證人其調書ヲ以テ己レノ口述セシ
所ト未タ全ク同一ナラスト爲シテ之ヲ改易シ若クハ更ニ附加セン
ト欲シテ掛リ裁判官之ヲ拒絕スルニ於テハ其裁判官ハ自ラ其姓名
ヲ手署スルヲ差扣ユルカ又ハ其拒絕スル旨ヲ記入シテ然後ニ手
署スルヲ必要トス

第六百三 抑証人ノ申立ル所ニ附スルニ相當ノ勢力ヲ以テセントス
ルニハ或ハ本人ヲシテ親ク之レト問糺スルヲ得セシメサル可カラ
サル場合有リ然レモ右ノ如クスルキハ亦或ハ証人ト本人ト相口爭

激論スルノ患アリ故ニ此場合ニ於テハ法律ニ依テ本人自ラ問糺セ
スシテ必ス其掛リ裁判官ノ紹介ヲ經ルコトニ定メタリ他無シ掛リ裁
判官ハ既ニ其職務ヲ以テ之ヲ問糺スルノ權利有ルヲ以テナリ○然
レモ右ノ問糺ヲ爲スコハ必ス其證人ノ口述スル所ヲ中停セスシテ
全ク之ヲ了ハラシメルタル後ニ於テスルヲ要ス

證人吟味ノ取扱中ニ於テハ宜ク各人ヲシテ順序ヲ守リ行儀ヲ正フ
セシム可キ者タリ故ニ法律ニ於テ一規則ヲ設置シ妄ニ證人ヲ問糺
シ若クハ中停スルコトヲ禁止シ且ツ此規則ニ背戾スル者有ルモハ之
ヲ罰責スルコトニ定メタリ即チ訴訟法第二百七十六條ニ左ノ文有リ
「本人ハ証人ノ其証ヲ述フル間辭ヲ參スルコトヲ得ス又直チニ証人ヲ
問糺スコトヲ得ス其問糺ハ必ス掛リ裁判役ニ之ヲ爲スコトヲ願フ可
シ若シ本人此規則ニ背ク時ハ十「フ」ラソノ罰金ヲ拂ヒ再犯ノ時ハ更

ニ多キ罰金ヲ拂ヒ又ハ其訴訟ヲ止ム可キノ言渡ヲ受ク可シ但其
言渡ハ掛リ裁判役之ヲ爲スコシ○其言渡ハ控訴ヲ爲シ又ハ其故障
ヲ述フルニ管セス之ヲ執行フ可シ」

〔第六百四〕 証人ヲシテ裁判所ニ出席セシムルカ爲メニシテ其生計ノ
爲メニ必要ナル時間ヲ喪失セシメテ其損害ヲ致スコトハ甚道理ニ非
サルヲ以テ法律ニ依テ此レカ爲メ相當ノ償額ヲ給與ス可キニ定メ
タリ 裁判費用ノ法律
第百六十七條

然リト雖モ亦裁判費用ハ成ル丈ケ增多セサルコトヲ要ス故ニ民事ニ
於テモ刑事ニ於ケルト同様証人ヨリ請求スルニ非サレハ其償額ヲ
給與ス可カラズ但シ若シ証人吟味ノ調書ニ於テ其証人ニ右ノ請求
ヲ爲スコト得可キ旨ヲ告示セサリシキハ此レカ爲メ其權利ヲ失ハシ
ム可カラズ且又其調書ニ於テ此告示ト及ヒ証人ノ請求トヲ記入セ

サルヲ有ルモ決テ此レカ爲メ其証人ノ口述シタル所ノ無効ヲ致ス
 一無カル可シ此ニ由テ觀レハ正文第二百七十五條ノ文ハ餘リニ汎
 然タリシ故第二百七十一條及ヒ第二百七十四條ノ文ヲ編纂シテ其
 意義ヲ明瞭ニシテ乃チ態々右ノ証人ノ償額ニ係ル文ノ前ニ於テ無
 効ノ事ヲ記シタル者ト知ル可シ○又証人ヨリ右ノ償額ヲ請求シタ
 ルニ於テハ成ル丈ケ迅速ニ之ヲ得セシメ且成ル丈ケ此レカ爲メ費
 用ヲ增多セサルヲ其旨トス故ニ訴訟法第二百七十七條ノ規則ニ於
 テ、証人其費用價ノヲ求ムル時ハ掛リ裁判官其呼出狀ノ副本ニ此旨
 ナ附記シ其示令書ヲ以テ直ニ執行スルノ力ヲ有スル者ト爲セリ
 是ヲ以テ若シ本人其証人ニ其償額ヲ拂ハサルニ於テハ凡ソ本人ノ
 財産ニ就テ之ヲ受取ルヲ得セシム

〔第六百五〕 總テ端式ノ書類ニ係テ我法律ノ制定スル所ノ主意ハ當ニ

其諸法式ヲ徇守セシムル而已ナラス亦之ヲ徇守シタル旨ヲ調書ニ
 記セシムルニ在リ否ヲサレハ其無効ヲ致ス訴訟法第二百七十五條故ニ若シ証
 人吟味ノ調書ニ就テ右ノ法式ヲ欠クカ或ハ之ヲ行ヒタル旨ヲ調書
 ニ記入セサルキハ以テ其無効ヲ致ス若シ又其記入ニ於テ詐偽ノ跡
 有ルキハ掛リ裁判官及ヒ書記官贖造ノ訴訟ヲ免ル、ヲ得ス併テ是
 レハ甚罕レナル事ニテ容易ニ思料ス可キニ非ス○以上言フ所ニ由
 テ考フレハ証人吟味ノ調書ニ於テ其定式ニ依遵シタル旨ヲ記入ス
 ルヲノ大切タルヲ推知ス可シ
 是故ニ眞ニ法律ノ主意ニ適合セントスルニハ証人吟味ノ始ヨリ終
 リニ至ルノ間右ノ定式ヲ行フ度毎ニ一々ニ之ヲ明舉シテ記入セサ
 ル可カラス然ラスシテ若シ唯訴訟法第二百六十一條及ヒ次條ニ命
 スル所ノ定式ニ徇フテ此証人吟味ヲ行ヒタリ杯ト記入シ置ク等ノ

六九三

事ハ決テ有ル可カラス其故ハ立法者既ニ彼ノ二百六十九條ニ於テ其日時及ヒ出席シタルト否サルトヲ記入ス可キ旨ヲ掲ケタルハ取リモ直サス右ノ調書ノ手本ヲ示スカ爲メナリ故ニ其二百七十五條ニ至テ右ノ記入ノ事ヲ再掲セサルモ是レハ唯文字ノ重複ヲ避ケタル丈ケニテ決テ此ヲ以テ依據ト爲シテ粗略ニスル等ノ事有ルヲ得ス

〔第六百六〕 右ノ調書ハ雙方本人掛リ裁判官並ニ書記官之ニ其姓名ヲ手署シテ之ヲ收結ス訴訟法第二百七十五條〇然レモ爰ニ云フ姓名ノ手署ハ唯一箇ノ體裁上ノ規則タルニ過キサルヲ以テ若シ次キニ本人ヨリ一事件ニ依據シテ此證人吟味ノ無効ヲ申立レフ有ルハ決テ其既ニ姓名ヲ手署シタルカ爲メニ之ヲ受理セサル等ノ事有ルヲ得ス此ニ由テ觀レハ右ノ手署ハ本人ニ在テ異日別段損害ヲ引起ス可キ者ニ

非サルヲ以テ縱令手署スルヲ欲セサルモ必スシモ拒ハマスシテ可ナリ但シ本人苟モ之ヲ拒ハムハ強テ手署セシム可カラサルヲハ固ヨリ論ヲ待タス

第三 證人ノ出席セサル者及ヒ其不實ナル者ニ係ル罰責

〔第六百七〕 抑證人吟味ヨリシテ相當ノ効用ヲ得ントスルニハ必ス左

ノ三箇ノ要款有ルニ非サレハ能ハス

第一 其證據ヲ申立テシメントスル證人ノ本人ニ識ラレタルヲ要ス

第二 證人ハ皆裁判所ニ出席シテ其證據ヲ申立ルノ義務有ルヲ要ス

第三 其申立ル所ノ誠實ナルヲ要ス

七九三

〔第六百八〕 往古ニ於テハ右ノ第一ノ要款ニ係テ皆ニ刑事而已ナラス

亦民事ニ就テモ一種「モニトアール」ト號シタル方式ヲ用フルヲ得タ
 リ「モニトアール」ノ方式トハ教門裁判官一書ヲ作り本邑ノ説教會ニ
 於テ之ヲ公告シ其書ヲ以テ雙方相争フ事件ニ就キ若干ノ證據ヲ申
 立ルヲ得可キ人物ヲ徵召シ之ヲシテ其證人タラシムルヲ謂フ然ル
 ニ現今ニ至テハ宗教ト政治ト全ク相判レタルヨリシテ既己ニ右様
 ノ事ハ我法律ニ於テモ少モ其痕跡ヲ留メスシテ唯刑事ニ於テ較其
 遺習ヲ存スル而已故ヲ以テ證人ヲ搜索スルヲニ就テハ唯本人一箇
 ノ所任ニシテ別ニ手段有ルヲ無シ

〔第六百九〕 證人タル者既ニ適當ニ呼出テ受ケタルキハ是非トモ出席
 セサルヲ得ス此レハ取りモ直サス社會ニ對シテ行フ可キ所ノ一種
 ノ公務ノ如キ者タレハナリ○意フニ民事ニ係テ右ノ事ヲ以テ各人
 私○際○ノ○義○務○ト看做サスシテ直チニ國人奉○社○ノ○公○務○ト看做スヲニ定

メタルハ羅馬ジュスチニアン帝ヲ以テ元始ト爲サレタルヲ得ス○抑右
 ノ譯合ヨリシテ我カ千六百六十七年ノ官令卷第二十二ニ於テハ證人
 ニシテ出席スルヲ拒ム者ハ十「リ」ヴルノ罰金ヲ追徴スルヲニ定メ
 シカ訴訟法ニ至ルニ及ンテハ更ニ嚴重ノ罰目ヲ示メセリ左ニ其第
 二百六十三條ノ文ヲ掲ク

「呼出テ受ケテ出席ヲ爲サレル證人ハ掛リ裁判役ヨリ本人ニ十「フ」ラ
 ソ「ヨ」リ少カラサル損失ノ償ヲ拂フ可キ言渡ヲ受ク可シ但シ其言渡
 ハ之ニ付キ故障ヲ述ヘ又ハ之ヲ控訴スルニ管セス之ヲ執行ス可シ
 ○又其裁判役ヨリ其証人ニ前ノ言渡ト共ニ百「フ」ラソ「ヨ」リ多カラサ
 ル罰金ヲ言渡スヲ得可シ

出席ヲ爲サレル証人ハ其費用ニテ再ヒ出席ス可キノ呼出テ受ク可
 シ」

四〇〇

若シ又定式ニ徇フテ其証據ヲ申立ルコト拒ムハ右ニ云フ所ノ出席セサル場合ト同様ニ看做ス可キ者タリ故ニ此事ニ係テハ民事裁判所ニ於テモ刑事裁判所ト同様ノ規則治罪法第八十條ヲ準用シテ至當ナリト心得可シ

〔第六百十〕 又其抗傳証人再ヒ呼出テ受ケテ再ヒ拒ムハ法律ニ於テ更ニ嚴重ノ處置即チ其極多ノ罰金ヲ命シ及ヒ兵隊ヲ用テ強テ之ヲシテ出席セシムルヲ得乃チ訴訟法第二百六十四條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

〔再ヒ呼出テ受ケタル証人猶出席ヲ爲サトル時ハ百〔フラン〕ノ罰金ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ケ若シ之ヲ拂ハサル時ハ禁錮ヲ受ク可シ又掛リ裁判役ハ其証人ニ對シ引出狀ヲ出スコトヲ得可シ

〔第六百十一〕 然リト雖モ亦其証人ヲシテ其出席スルコト能ハサリシ所

ノ理由ヲ証明スルコトヲ得セ令メサル可カラズ且其証明スル所ノ理由確當ナルニ於テハ其罰金及ヒ其再ヒ受ケタル呼出狀ノ費用ヲ免ルスコトヲ必要トス訴訟法第二百六十五條

若シ又右ノ証明セントスル所ノ理由全ク詐偽ナルニ於テハ十日ヨリ二箇月ニ至ルノ間禁獄ノ刑ヲ以テ之ヲ罰ス刑法第二百三十六條

〔第六百十二〕 亦証人タル者其呼出狀ニ定メタル日ニ出席スルコト能ハサル理由有ルヨリシテ預メ其事情ヲ申出ルコト有リ此場合ニ在テハ其証人吟味ヲ延日スルニ非サレハ掛リ裁判官自ラ其証人ノ居所ニ往ク可シ而シテ若シ其事情タル老羸又ハ痿癱等總テ恒久ノ譯柄タルニ於テハ是非トモ右ニ云フ所ノ如ク自ラ其居所ニ往クノ外手段

ナキナリ訴訟法第二百六十六條

四〇一

〔第六百十三〕 總テ雙方相争フ事件ニ就テ見聞スル所有ル者ハ誰レニ

テモ皆其証據ヲ申立ルヲ必要トスト云フニハ非ス。此レ而已ナ
 ラス。現ニ刑法第三百七十八條ノ如キハ身分又ハ職業ノ故ヲ以テ人
 ヲリ密事ヲ属托セラレテ之ヲ漏泄シタル者ハ百フランヨリ五百フ
 ランニ至ルノ罰金ヲ以テ之ヲ罰スルヲ定メタリ。成程右ノ刑法ニ
 云フ所ハ唯妄意ノ評發ヲ指ス者ニテ決テ裁判所ニ向ケテ申出ル所
 ノ証據ノ申立ヲ指スニハ非ス。然レモ証人タル者呼出ヲ受ケテ右ニ
 云フ所ノ事情ノ故ヲ以テ其申立ヲ拒ハムヲ有ルニ於テハ法律ニ於
 テ聊カ根據無キニ非ス。故ニ若シ其証人ト本人ト此事ニ就テ紛議ヲ
 生スルキハ掛リ裁判官自ラ之ヲ斷セスシテ必ス之ヲ裁判所ニ回送
 シテ其判決ヲ請求セサル可カラス。
 又身分ノ故ヲ以テ人ヨリ密事ヲ属托セラル可キ者ハ彼ノ刑法第三
 百七十八條ニ明示スル所ノ内外醫師ニ限ルニ非スシテ即チ僧侶ノ

如キニ至テハ懺悔ハ勿論其他何ニテモ陰ニ聽受シタル所有ルキハ
 亦右ニ云フ所ノ属托ヲ受ケタル者ト看做ス可シ。又代言人代書師及
 ヒ公書人等モ其職務上ニテ秘密ニ干預シタルキハ亦復タ然カリ
 [第六百十四] 抑証人吟味ヲ爲スニハ唯証人ノ申立ヲ聽キタル丈ケニ
 テハ足ラス。必ス其レヲシテ實事ヲ申立テ令ムルヲ要ス。故ニ誓詞ヲ
 宣述スルノ規則ヲ置キ以テ凡百証人ヲシテ夫ノ道義ト及ヒ宗教ノ
 冥罰ヲ畏レテ敢テ偽飾スルヲ莫カラ令ム。[第六百] 〇右ノ冥罰ハ亦刑
 法ノ罰ト胸合ス。故ニ古來ノ例格ニ於テモ瀆神ノ罪即チ背誓ノ罪無
 キキハ亦偽證ノ罪無キト看做ス。〇民事ニ就キ偽證ヲ述ヘタル者ハ
 禁錮ノ刑ヲ以テ之ヲ罰ス。刑法第三百六十三條 若シ又其偽證ノ爲メ謝報ヲ受
 シルカ又ハ謝報ヲ約シタルキハ其偽證ヲ申含メタル者ト同様有期
 ノ徒刑ヲ以テ之ヲ罰ス。刑法第三百六十四條
 及ヒ第三百六十五條

四〇四 第四 證人ニ係ル所ノ禁斥及ヒ故障

四〔第六百十五〕 凡ソ證人或ハ法律ニ依テ全ク其申立ヲ禁斥ス可キ者有リ或ハ唯本人ヲシテ其故障ヲ申立ルヲ得セシム可キ者有リ

〔第六百十六〕 右ノ第一ノ場合即チ全ク其證人ヲ禁斥スルコトハ唯其證人雙方本人ノ一ニ於テ宗系ノ血屬又ハ姻屬タル時ニ限ル〇凡ソ證人本人ノ中ノ者ニ於テ宗系ノ血屬又ハ姻屬タルキハ其者ノ爲メニ證據ヲ申立ルト其者ノ相手方ノ爲メニ證據ヲ申立ルト論セス皆之ヲ禁斥ス是レ他無シ其者ノ爲メニスルキハ其或ハ情縁ノ私ニ出ルヲ慮ルカ故ナリ其者ノ相手方ノ爲メニスルキハ其或ハ憎怨ノ故ニ起ルヲ慮ル何トナレハ親族ノ間ニ於テ相憎怨スルコトハ世上動モスレハ屢之レ有ルヲ以テナリ即チ訴訟法第二百六十八條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

「本人ノ宗系ノ血屬及ヒ姻屬ノ親又ハ既ニ離婚シタル者ト雖モ其配耦者ハ證人トシテ呼出ス可カラス」

右ニ云フ親族ハ亦私生ノ故ノ親族ニモ追及ス但シ是レハ法律上ニテ認定シタル私生ノ親族ニ限ル可シ

以上云フ所ノ禁斥ノ規則モ其訴訟若シ家内ノ事ニ涉リシキハ之ヲ準用スルヲ得ス他ニ非ス家事ニ至テハ親近者ニ非レハ始ヨリ見聞スル所無キノ道理ナルヲ以テナリ是ヲ以テ現ニ民法第二百五十一條ノ規則ニ於テモ離婚ノ訴訟ニ係テハ卑屬親ノ外何レノ親族ニテモ證人ニ用フルヲ得ルコトニ定メタリ意フニ現今ニ至テハ離婚ハ之レ無シト雖モ右ノ規則ハ之ヲ離居ノ訴訟ニ用フルヲ得可シ又右ノ民法ノ規則ニ於テモ卑屬親ハ矢張之ヲ禁斥セリ此主意ハ太々明瞭ニシテ解釋スルヲ要セス〇此ニ由テ考フレハ身分ノ事ニ係ル訴訟

五〇四

ニ於テ右ノ第二百五十一條ノ規則ヲ準用セシテ仍ホ禁止ノ規則
 ナ準用スルハ殆ント理會ス可ラサル者ト謂フ可シ第八百五十
六條見合
 我輩意フニ總テ證人ヲ用フルニ就テハ餘リニ嚴重ナル規則ヲ置
 カサルヲ良シトス他無シ証人ハ本人ニ在テ容易ニ求メ得可ラサル
 カ故ナリ此ニ由レハウオルテール氏ノ論甚至當ナリ其言ニ曰ク余
 カ見テ以テスレハ証人ハ何人ヲ論セス之ヲ用フルヲ得セシムルニ
 如カス畢竟事實ヲ見聞シタル者ヲ必要トスルヲ故痴人ニテモ親族
 ニテモ家來ニテモ且又汚行ノ者ニテモ皆其見聞シタル事實ヲ申立
 テシメ次キニ裁判官タル者其申立ル所ニ就テ詳察ヲ加ヘテ其取ル
 可キヲ採リ其捨ツ可キヲ棄テハ何ノ弊害カ之レ有ラン

〔第六百十七〕

右ニ由テ考フレハ我訴訟法ニ於テ証人ニ係ル故障ノ規
 則ヲ設置シタルハ誠ニ惜ム可キノ至ナラスヤ既ニ故障ノ規則有ル

キハ相手方ハ此ニ由テ一方ノ者ノ証人ノ若干數ヲ排除シテ乃チ其
 證據ヲ棄絶スルヲ得可シ何トナレハ証人ヲ排除スルハ證據ヲ論駁
 スルヨリハ大ニ容易ナルノ理ニシテ難キヲ去テ易キニ就クハ相
 手方ニ於テ固ヨリ利益トスル所ナレハナリ意フニ往古羅馬ノ法律
 ハ此事ニ就テ我訴訟法ニ比シテ大ニ勝レル所有リキ即チガリスト
 ラマトロ家ノ名ラ氏モ其著書ニ於テ証人ノ陳述ニ就テ猜疑ヲ致ス可キ
 所ノ原因ヲ指數シタルニ其到底ノ主意ハ唯裁判官ヲシテ之ヲ詳察
 セシムルニ在リ又ジュスタニアン帝ノ時代ニ於テハ專ラ學科上ノ規
 則ヲ預定シ裁判官ヲシテ必ス之ニ依遵セシムルノ風習タリシニ帝
 ハ此風習ニ拘束セラレシテ總テ証人ハ其猜疑ス可キ者ト雖モ必
 スシモ排斥セシテ裁判官ヲシテ之ヲ詳察評議セシムルヲ欲セ
 リ〇我往古ノ法律家ノ如キハ斷然此錯蟠ヲ截去リテ乃チ裁判官ヲ

シテ凡ソ猜疑ス可キ原由有テ相手方ヨリ故障ヲ申述ヘタル証人ノ
 証據ハ裁判官ヲシテ初メヨリ之ヲ聽クヲ得サラシムルヲ定メタ
 リ意フニ此規則ハ當時ノ律意ノ上ニテ云フキハ甚整齊ナリキ其故
 ハ我輩ノ後ニ論スル所ノ如ク當時ニ於テハ法律ニ依テ預メ証人ノ
 員ヲ定メ其レヲシテ適當ニ証據ヲ述ヘシムルノ規則タリシ故其員
 中ノ者ハ皆絶テ疵瑕ノ指ス可キ無キヲ必要トセリ故ニツール
 ス裁判所ノ若キハ其証人ニ於テ猜疑ス可キ原因有ルニ遇フテハ其
 原因ノ度級ニ隨フテ右ノ証人ノ陳述スル所ニ附スルニ或ハ四分ノ
 三或ハ二分ノ一或ハ四分ノ一又ハ八分ノ一等ノ信用ヲ以テスルヲ
 常トセリ是レハ誠ニ驚怪ス可キ規則ナレトモ畢竟法律ヲ以テ証人ノ
 員ヲ定メタル以上ハ是非トモ右ノ二箇ノ一ニ歸結セサルヲ得ス然
 ラサレハ法律ノ前後整齊ナラサルヲ致ス若シ夫レ現今ニ至テハ右

ノ如クニ証人ノ員ヲ定ムルヲ無キヲ以テ法律ニ依テ預メ証人ヲ排
 斥ス可キノ道理無シ是故ニ我輩ハ謂フ我訴訟法ニ於テ証人ニ係ル
 故障ノ規則ヲ設置シタルハ現ニ今日一體ノ律意ト矛盾シテ甚前後
 ノ整齊ヲ失ヘリト

〔第六百十八〕 我輩先ツ訴訟法ニ於テ允許スル所ノ故障ノ如何ヲ論究
 シ次キニ此故障ヲ申立ル爲メノ手續ニ言及ハントス

〔第六百十九〕 法律ヲ以テ定メタル故障ノ原由ハ之ヲ三種ニ分別スル
 ヲ得即チ一ハ本人ニ於テ血屬又ハ姻屬タルヲナリ一ハ若干ノ事件
 ヨリシテ本人ニ對シ或ハ依怙ニ出ツ可キヲ思料スルヲナリ一ハ有
 罪ノ陳述ヲ受ケ又ハ刑事ノ裁判言渡ヲ受ケタルヨリシテ人ノ醜穢
 ナ蒙ムリタルヲナリ以下逐次ニ之ヲ言ハシ

九〇四
 〔第六百二十〕 往古ノ官令ニ於テハ旁系ノ血屬及ヒ姻屬ヲ以テ前ニ云

ヘル禁斥ノ原由ト爲セシカ現今ノ規則ニ至テハ然ラス右等ノ縁故ハ其第六級ニ至ル迄唯故障ノ原由ト爲ス丈ケナリ意フニ今代ノ人情ヲ察スルニ旁系ノ親姻ハ其最近ノ級ニ非サルヨリハ相親視スル無フシテ幾ント他人ノ若クナルヲ以テ今日ノ規則ニテモ仍ホ或ハ過分ト謂フ可キ程ナリ

訴訟法第二百八十三條ニ曰ク証人一方ノ者ノ再從兄弟ニ至ル迄ノ血屬又ハ姻屬ノ親ナル時ハ相手方ヨリ其故障ヲ述フルヲ得可シ又一方ノ者ノ配耦者ノ生存スル時又ハ配耦者ノ生ミタル子ノ生存スル時ハ其配耦者ノ再從兄弟ニ至ル迄ノ血屬及ヒ姻屬ノ親ニ就キ其故障ヲ述フルヲ得可シ但シ其配耦者子ヲ遺留セスシテ既ニ死去シタル時ハ其宗系ノ血屬及ヒ姻屬ノ親其兄弟義兄弟姊妹義姊妹ニ就キ其故障ヲ述フルヲ得可シ

右ニ依レハ雙方本人ノ中ノ配耦者ニ於テ姻屬タル者証人ト成ルキハ相手方ヨリ故障ヲ述フルヲ得可シ故ニ例ヘハ我カ妻ノ姉妹ノ中ヲ娶リタル者ハ我カ義兄弟ニハ非スト雖モ苟モ我レニ關係アル訴訟ニ於テハ其者並ニ其者ノ親屬ノ六級ニ至ル者迄仍ホ故障ノ陳述ヲ受ルヲ得ルナリ○今夫レ養料ノ事ニ就テ云フキハ訴訟本人ノ配耦者其夫婦同居中ニ子無クシテ死去セルキハ其姻屬タルノ効用全ク消滅ス民法第二百六條第二項而シテ獨リ証人ノ事ニ就テハ右ノ配耦者ノ最近ノ血屬及ヒ其直系ノ姻屬ニ至ル迄仍ホ故障ノ原由ト成ル是故ニ我輩ノ所見ヲ以テスレハ今日ノ規則ニテモ尙猶ホ過分ナリト謂ハサルヲ得ス

又故障ノ事ニ係テモ前ニ云ヘル禁斥ノ事ニ係ルト同様ニテ乃チ本人ノ爲メニ其證據ヲ申立ルト其相手方ノ爲メニスルトヲ問スハ皆

二一四

其故障ヲ述フルヲ得又夫婦離居ノ訴訟等ノ如ク總テ家内中ノ者ヨリ證據ヲ申立ルヲ必要トスル場合ニ於テハ亦前ニ云ヘル禁斥ノ事ニ係ルト同様ニテ乃チ故障ヲ述フルヲ許サス

〔第六百二十二〕又右ノ正文ニ於テ其證人ノ或ハ本人ニ對シテ依怙ニ出ツ可キヲ慮リテ左ノ規則ヲ揭示セリ

〔又原告及ヒ被告ノ一方ノ遺物相續ヲ爲ス可キ權有ル者及ヒ生存中ノ贈遺ヲ受クル者ニ就テモ亦其故障ヲ述フルヲ得可シ〕

右ノ規則ノ主意ハ尤モ明瞭ニテ或ハ自己ノ利益又ハ感恩ノ情念ニ出テ、事實ヲ失フヲ有ルヲ畏ル、ナリ然ト雖モ遺囑ノ贈遺ヲ以テ故障ノ原由ト爲スニハ其物件タル必ス若干ノ價格有ルヲ要ス又同條ニ曰ク證人吟味ノ言渡ノ後本人ノ費用ニテ本人ト共ニ飲食シタル者

三一四

此原由ハ人往々之ヲ論駁シテ云フ是レハ凡ソ證人タル者ニ對シテ失敬ノ極ト謂フ可シト我輩意フニ總テ故障ノ原由ハ元來法律ニ明掲セスシテ舉ケテ之ヲ裁判官ノ見計ニ屬スルニ如カスシテ即チ爰ニ云フ所ノ原由ニ至テモ亦同様ナリ然ルニ既ニ法律ニ於テ若干ノ原由ヲ指定スル以上ハ右ノ原由モ亦之ヲ採収セサルヲ得ス何トナレハ古來ノ鄙諺ニ能ク人ヲ饗應スル者ハ能ク證據ヲ出サシムト云ヘル弊習ハ今日トテモ同様ナル可キヲ以テナリ又曰ク其訴訟ニ管シタル事件ニ就キ本人ニ請合書ヲ與ヘタル者右ノ規則ノ主意ハ他ニ非ス其證人ノ或ハ其請合書ヲ請フタル本人ノ爲メニ最初ヨリ加力スルノ意有ルカ又ハ爾來其非ナルヲ知レモ強情ノ念ヨリシテ終ニ最初ノ意見ヲ主張スル等ノ事有ルヲ慮ルナリ○然リト雖モ正文云フ所ノ請合書ハ相對ノ好意ヲ以テ交附シタ

四一四

ル者ヲ指ス故ニ例ハ民生証書ノ官吏ヨリ其職務上ニテ與ヘ置キタル者ノ如キハ右ノ種類ニ非サルヲ以テ若シ其官吏異日本人ノ爲メニ其證書ニ係ル事件ニ就テ證人ト成ルキハ決テ抵觸スル所有ルヲ無シ

又曰ク「本人ノ僕婢從者」

僕婢トハ即チ雜事ノ使役ニ服スル者ヲ指テ云フ從者トハ書役等ノ如ク總テ其掌ル所較賞尙ナル者ヲ指テ云フ是レハ古來右ノ二語ニ附スル所ノ意義ニシテ孰レモ本人ト親情有ルヲ以テ其或ハ偏頗ニ出ルヲ恐ル、ナリ然レモ若シ其訴事夫婦離居ノ願ニ係ル等ノ場合ニ在テハ是非トモ家内ノ者ヨリ證據ヲ申立ルヲ要スルヲ故前ニ云ヘル所ト同様ニテ右ノ事ヲ以テ故障ノ原由ト爲スヲ得ス民法第二百五十一條

〔第六百二十二〕

以上云フ所ノ故障ノ原由ハ皆本人ヨリ申述フ可キ者ニ非スシテ唯本人ノ相手方ヨリ申述フ可キ者タリ他無シ本人ト親情有ルカ又ハ本人ト其利ヲ同フスルカ故ナリ○又一種ノ故障ノ原由有テ是レハ原告被告ヲ論セス孰レニテモ且ツ如何ノ訴事ニ就テモ之ヲ申述フルヲ勝手タリ以下之ヲ言ハシ

訴訟法同條ニ曰ク「罪犯訴訟ノ被告人ニ就テハ其故障ヲ申述フルヲ得可シ」

右ニ云フ所ハ取リモ直サス重罪取調局ヨリ重罪裁判所ニ廻送セラレタル者ヲ指テ云フ其者ノ地位甚危殆ナルヲ以テ或ハ容易ニ人ノ陷誘ニ惑フヲ有ルヲ慮ルカ故ナリ

五一四

又曰ク「施體又ハ加辱ノ刑又ハ盜罪ニ付キ懲治ノ刑ヲ言渡サレタル者ニ就テモ故障ヲ述フルヲ得可シ」

民法第二百二十一條及ヒ次二條等ニ於テハ全ク刑法揭示スル所ノ
 類別ニ依遵シテ乃チ權利ニ係ル所ノ若干ノ不適當ヲ生スルニハ罪
 犯ノ原因ヲ問ハスシテ唯其處刑ノ性質ヲ問フニ定メタリ是故ニ
 例ハハ夫タル者司法ノ權限ヲ忘却シテ行政ノ部分ヲ侵犯シタルカ
 爲メ國士權ヲ剝奪セラレタル等ノ場合ニ於テハ其婦此レカ爲メ離
 居ヲ願出ルノ權利有リ若シ夫レ其夫盜竊ノ爲メニ懲治ノ刑ニ處セ
 ラレタル時ニ至テハ反テ右ノ權利有ルヲ無シ此レ亦驚訝ス可キニ
 非ス乎然ルニ訴訟法ニ於テハ唯盜罪ニ就キ懲治ノ刑ヲ言渡サレタ
 ル者ト施體又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレタル者ト同一ニシタル丈ケナ
 ルヲ以テ較道理ニ近シト謂フ可シ然レモ是レハ民法ノ規則ニ照比
 シテ整齊ナラサル故當初立法者ノ爲メニ計ルニハ更ニ嚴重ノ規則
 ナ揭示シテ乃チ純然政治上ノ罪犯ノ爲メニ加辱ノ刑ヲ言渡サル者

ノ若キモ亦故障ノ申立ヲ受ク可キニ定メシナラハ右ノ齟齬ヲ免ル
 ヲ得タルナル應シ

又既ニ罪犯消除シテ權利ヲ再有シタル者ト雖モ其故障ノ原由ハ決
 テ此レカ爲メ消散スルヲ無シ故ニ此者ハ裁判所ニ於テ誓詞ヲ述
 シテ自ラ證據ヲ申立ルノ權利ハ自餘ノ權利ト同様再有スレモ人ノ
 爲メニ其證據ヲ申立又ハ其見聞シタル所ヲ申述フル等ニ於テハ決
 テ其權利無キ者トス他無シ是ノ如クナラサレハ本人ノ相手方ノ爲
 メニ確證スル所無キヲ以テナリ

〔第六百二十三〕 若シ夫レ幼穉ノ者 此レハ原語「インフ」ナル故幼者ト
 リニ係テハ訴訟法ニ於テ別段法律上ノ故障ヲ揭示スルヲ無シ是レ
 ハ責テ良好ノ主意ト謂フ可シ即チ正文第二百八十五條ノ文ヲ左ニ
 出ス

「満十五歳ニ至ラサル者ノ述フル所ノ證ト雖モ之ヲ聽クヲ得可シ
但シ裁判役其證人ノ述フル所ヲ相當ニ斟酌ス可シ」
右ノ幼穉者ノ知識既ニ随分開達シテ乃チ自ラ其證述スル所ノ何事
タルヲ理會シタルカヲ考察スルコトハ其掛リ裁判官ノ任ス可キ所
リ

凡ソ幼穉者ヲシテ下吟味ノ掛リ裁判官ノ前ニ於テ證據ヲ申立テシ
ムルキハ誓詞ヲ宣ヘシムルコト無キノ規則タリ治罪法第七十九條然ルニ訴訟
法ニ於テハ此事ヲ揭示セサルヨリシテ有名ナル法律家ノ中ニテモ
動モスレハ云フ十五歳ノ幼者ト雖モ必ス誓詞ヲ宣ヘシムルヲ要ス
ト其中亦云フ此時ニ於テハ掛リ裁判官其幼者ノ果シテ誓詞ヲ宣フ
ルコトノ重大タルヲ理會シ得可キカヲ考察スルヲ要スト我輩ハ意フ
此ノ如ク濫リニ誓詞ヲ宣フルコトハ取リモ直サス誓盟ヲ褻瀆スルノ

行爲タリト且既ニ誓詞ヲ宣ヘテ異日詐偽ノ跡顯ハルハハ偽證ノ
刑ヲ免ルハ得ス然ルニ十歳又ハ八歳位ノ幼童ヲシテ偽證ノ訴告
ヲ受ケシムルコトハ道理上ニ於テ決テ有ル可ラサル事タリ故ニ我輩
ノ所見ヲ以テスレハ縱令掛リ裁判官幼童ノ證述ヲ聽クコト有ルモ決
テ之ヲシテ誓詞ヲ宣ヘシムルヲ得ス

〔第六百二十四〕仰正文第二百八十三條掲クル所ノ故障ノ原由ノ數ハ
立法者之ヲ限定シタルト看做ス可キ乎將々特ニ其類ヲ示メシタル
ト看做ス可キ乎我輩意フニ往古ノ官令第二十三卷第一條ノ規則ニ於テハ凡
ソ證人ニ就テ故障ヲ述ヘントスル者ハ唯其原由ヲ明述シテ且其主
件ニ關係有ルヲ要スル丈ケナリキ是故ニロヂエー氏モ言ヘリ若シ
證人嘗テ其父母ヲ毆撃シ又ハ常ニ亂醉シ又ハ常ニ聖神ヲ罵詈スル
等ノコト有ルキハ此ヲ以テ其故障ノ原由ト爲スヲ得可シト然ルニ此

ノ如クスルキハ故障ノ原由幾ント窮極無フシテ爾來現ニ幾多ノ弊害ヲ催起セリ是ヲ以テ訴訟法ニ至テ此弊ヲ除クカ爲メニシテ彼ノ第二百八十三條ノ規則ヲ揭示セルヲ故本條ノ主意ハ正ニ故障ノ原由ヲ限定スルニ在ルヲ疑フ容レズ豈特ニ其類ヲ示スガ爲メナランヤ然リト雖モ若シ實地ニ臨ンテ其他ニ於テ猜疑ス可キ原由ノ發起セシキハ奈何ス可キヤ曰ク此場合ニ於テハ代言人タル者唯右ノ證人ノ陳述セシ所ヲ論駁シ以テ其猜疑ス可キ原由ヲ暴白スル有ル而已此原由ノ爲メニ始ヨリ其證人ニ就テ故障ヲ申述フルヲハ決テ有ル可ラス

然リト雖モ我輩又以爲ラク右ノ第二百八十三條ニ依ルニ本人ノ遺物ヲ相續ス可キ者其證人ト成ルキハ相手方其故障ヲ述フルヲ得可キ者タリ然ルニ右ノ證人ノ其本人ト利益ヲ同フスルヲハ特ニ後日

相續セントスルノ一點ニ在ル者ニシテ畢竟直接ノ譯ニ非ス此ニ由テ考フルニ若シ主件ノ訴訟ニ關シタル者自ラ其證人ト成ラントスルキハ其本人ト利益ヲ同フスルヲ更ニ直接ナルヲ以テ本條ノ揭示無シト雖モ然レモ亦相手方ヨリ其故障ヲ述フルヲ得可キヲ疑フ可キニ非ス

〔第六百二十五〕 以上論スル所ニ依ルニ證人ニ係ル故障ノ原由ハ立法者之ヲ限定シタル者タリ然ルニ法律家ノ中或ハ然ラストスル者無キニ非ス而シテ此輩ノ說ノ如クスルキハ亦裁判所ヲシテ勝手ニ其故障ノ陳述ヲ却還シ又ハ允許スルヲ得セシメサル可ラス是レ他ニ非ス若シ是非トモ允許セサルヲ得ストスルキハ相手方毎日種々ノ原由ヲ申立ツ可ケレハナリ然ルニ我輩ノ如ク立法者ノ意ヲ以テ限定ニ在リト爲ス者ハ其人更ニ多シ而シテ我輩ノ說ノ如クスルキ

ハ苟モ法律ニ適合シテ故障ヲ述フル者有ルニ於テハ裁判官是非トモ之ヲ採聽シテ乃チ其証人ヲ以テ猜疑ス可キ者ト看做サルヲ得ス我輩意フニ此規則ハ其道理ヨリシテ言フキハ甚善良ナラスシテ其裁判官ニ附スルニ臨機ノ權ヲ以テスルニ如カサルヲ固ヨリナリ然レモ正文第二百九十一條ノ規則ヲ熟考スルキハ何分右ノ權ヲ附シ難キ者有リ何トナレハ本條ノ規則ニ依レハ若シ故障ノ陳述ヲ採聽シタルキハ其証人ノ申立ヲ聽クヲ得ス既ニ申立ヲ聽カスシテ故障ヲ採聽スルヲ見レハ裁判官ハ法律上ノ定規ニ依テ故障ヲ採聽ス可キ者ニシテ決テ事實ヲ考察シタル上ニテ即チ臨機ノ見計ヲ以テ之ヲ採聽スルニ非サルヲ疑フ容レヌ

〔第六百二十六〕

証人ニ係ル故障ノ規則ハ其主意タル既ニ甚善良ナラスシテ其實行ニ係ル規則即チ其故障ヲ申立ル爲メノ規則ニ至テモ

同様善良ナラサル者有リ正文第二百七十條ノ文ヲ左ニ揭示ス
 「一方ノ者証人ニ付キ故障ヲ述ヘントスル時ハ証人ノ其證ヲ述フル前ニ之ヲ爲ス可シ但シ故障ノ申述ハ詳明ニシテ且其時ノ事柄ニ適當ス可ク疑ハシキ語ヲ用フ可カラヌ又証人ハ之ニ答ヘテ辨論スルヲ得可シ」証人ニ付テノ故障ノ申述及ヒ証人ノ答辨ハ之ヲ調書ニ附記ス可シ」

縱令証人ノ申立ノ中或ハ法律上ノ定規ニ依テ棄却ス可キ者有ルモ此撰擇ヲ爲スヲハ裁判官ノ責任ス可キ所ニシテ決テ本人ノ相手方ノ任ス可キ所ニ非ス何トナレハ元來相手方ヨリ一方ノ証人ヲ承諾シ又ハ故障ヲ述ヘテ之ヲ排斥セントスルハ大抵事實ヲ發摘スルカ爲メニ非スシテ自己ノ利益ヲ防護スルカ爲メナルヲ以テ其証人ノ申立ル所眞確ナルキハ愈其故障ヲ申述フルノ念ヲ生ス可キナリ此

ニ由テ考フレハ訴訟法ニ於テ相手方ヨリ故障ヲ申述フルニハ未ダ
 證人ノ申立有ラサルノ前ニ於テス可キニ定メタルハ責テ善良ノ改
 革ト謂フ可キ者タリ然ルニ又其第二百八十二條ヲ見レハ稍往古ノ
 習慣ニ復歸シタル部分有リ右ノ善良ノ改革ノ後ニ於テ仍ホ此習慣
 ナ存セルハ誠ニ惜ム可キ事ナリ即チ本條ノ文ヲ左ニ揭示ス
 「相手方ノ證人既ニ證ヲ述ヘ終リシ後ハ其證人ニ就キ故障ヲ述フ可
 カラス但シ證書ニ因テ其故障ヲ述フ可キノ證有ル時ハ格別ナリト
 ス」
 右ニ云ヘル若シ證書ニ因テ故障ノ憑據ヲ陳述スルキハ成程其證人
 ノ申立ヲ傍聽シタル上ニテ遽カニ思考造作シタル等ノ憑據ニ非サ
 ルコトハ疑無シ然レモ其憑據トスル所既ニ確當ナルニ於テハ縱令證
 書無キモ之ヲ陳述セシメテ可ナラン何カ故ニ仍ホ證書ヲ必要トス

ルヤ右等ノ憑據ハ或ハ其主件ノ訴訟ニ於テ大關係有ル可シ然ルチ
 其證書無キカ爲メニ容易ニ之ヲ排斥スルチ見レハ立法者ノ意ニ於
 テハ此事ヲ以テ彼ノ呼出狀ノ無効ヲ致ス場合ノ如クニ大切ニ非サ
 ル者ト看做スニ似タリ何トナレハ呼出狀ノ無効ヲ致スコトニ係テハ
 本人ノ勝手ニ之ヲ承諾スルチ得可キニ定メタレハナリ
 又正文第二百七十條云フ所ノ故障ノ申述ハ詳明ニシテ且其時ノ事
 柄ニ適當スルチ要スルコトハ前ニ云ヘル官令ノ規則ノ時ニ在テハ甚
 大切ナリキ其故ハ當時ニ於テハ未ダ故障ノ原由ヲ限定セサリシチ
 以テ若シ其申述ニ於テ逐一其憑據ヲ細舉セルキハ賴テ以テ採否ヲ
 判決ス可キ無キカ故ナリ若シ夫レ現今ニ至テハ然ラス凡ソ故障ノ
 原由ハ既ニ法律ニ依テ指定セルチ以テ故障ヲ申述スル者ハ唯法律
 ニ定メタル所ノ原由ノ一タルコト明言シテ足ル例ヘハ其證人ノ相

手方ヲ血屬又ハ姻屬タル旨ヲ申述フルニハ唯其度級如何ヲ指示スル丈ケニテ充分ナリ

〔第六百二十七〕掛リ裁判官ハ証人ニ係ル故障ノ申述ニ就テ判決スルノ權無シ然レモ亦毎事件ノ爲メニ一々裁判所ニ啓報スルヲ得ス餘リニ手續ノ錯雜ヲ致シテ乃チ証人吟味ニ係ル所ノ法律ノ主意ニ背戻ス可キカ故ナリ是故ニ掛リ裁判官ハ故障ノ申述ニ管セス其証人吟味ニ著手ス而シテ故障ノ申述ニ就テハ裁判所次キニ之ヲ判決ス即チ正文第二百八十四條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

「故障ヲ受ケタル證人ト雖モ其述フル所ノ証ハ之ヲ聽ク可シ」然ルニ爰ニ論ス可キヲ有リ抑右ノ証人ノ申立ヲ聽キタル裁判官即チ掛リ裁判官ハ其訴事ヲ判決スル爲メノ評議ニ於テハ大抵同席スルヲ常トス然ルニ其故障既ニ允許セラレタルキハ掛リ裁判官其証

人ノ述ヘタル証ヲ記シタル調書ヲ讀上ルニ及ハサルヲ故、訴訟法第一條一自餘ノ裁判官ハ始ヨリ其證ヲ知ラスト雖モ掛リ裁判官ノ若キハ固ヨリ既ニ之ヲ知ルヲ故自然自己ノ胸中ニ留在シテ其訴事ノ判決ニ於テハ幾分カ其効用ヲ發起スルハ免レサル所タリ人或ハ云ハン此不都合ヲ避ントスルニハ掛リ裁判官ヲシテ右ノ判決ニ干預セシメスシテ足ルト然レモ是レハ第一人員ノ少キ裁判所ニ於テハ行レサル事ニテ又縱令人員多キ裁判所ニ於ケル場合ニモセヨ專ラ其訴事ヲ取扱ヒタル裁判官ヲシテ其判決ニ干預セシメサルキハ事理ノ當然ヲ求ムル爲メニ大ニ闕欠スル所有ラン是故ニ我輩ハ固ヨリ謂フ證人ニ係ル故障ノ申述ニ就テノ我訴訟法ノ規則ハ甚善良ノ者ニ非スト

〔第六百二十八〕以上論スル所ニ由レハ證人ニ係ル故障ノ申述ノ當否

ヲ判決スルコトハ既ニ其證人ノ申立ヲ採収シテ且之ヲ裁判所ニ迴送シタルノ後ニ於テス可キ者タリ然レモ若シ裁判所故障ヲ受ケサル證人ノ申立丈ケニテ充分其訴事ヲ判決スルニ足ルト思量スルモ其故障ヲ受ケタル證據ニ管セス直チニ訴訟ノ本案ニ著手スルヲ得可キコト殆ント論ヲ待タズ是ヲ以テ彼ノ千六百六十七年ノ官令ニ於テハ此主意ヲ揭示シタル條有リタレモ訴訟法ニ於テハ不用ナリトシテ之ヲ排棄セリ若シ夫レ本案己テニ判決ス可キ形況ニ至リタルモハ右ノ故障ノ當否ト本案ノ判決トニ就テ唯一箇ノ言渡ヲ爲シテ足ルナリ

訴訟法第二百八十七條
及ヒ第二百八十八條

〔第六百二十九〕右ノ第二百八十七條ニ證人ニ係ル故障ハ至急吟味ノ法式ヲ用テ之ヲ裁判ス可シト云ヘルハ取リモ直サス大書ニ記シタル類ヲ送達セサルコトヲ謂フナリ○若シ證書ニ由テ其故障ヲ申述ヘ

タル場合ニ於テハ掛リ裁判官ヨリ之ヲ採聽シタル後吟味ノ席ニ於テ之ヲ辨論シテ足ル若又唯證人ヲ用テ其故障ヲ申述フヘキモ本

人ヲシテ其證據ヲ呈出セシムルコトヲ要ス

訴訟法第二百八十九條ニ曰ク證人ノ證ヲ述フル前ニ其證人ニ付キ故障ヲ述ヘタル特別ニ其故障ヲ述フルニ付テノ證書ヲ出サレルニ於テハ其事ニ付キ更ニ證人ヲ以テ證ヲ立ツ可キコトヲ述ヘ其證人ヲ指示ス可シ然ラサレハ證人ニ付キ故障ヲ述フルコトヲ許サス但シ故障ヲ受ケシ證人ニ損失ノ償ヲ拂フ可キ道理有ル時ハ之ヲ拂フ可シ人多ク云フ右ノ證據ヲ差出スコトハ未ダ彼ノ證人ヨリ其申立ヲ爲サザルノ前ニ掛リ裁判官ノ前ニ於テス可シト而シテ控訴院ノ中ニテモ比ノ如クニ決定セシ者往々之レ有り是レハ他ニ非ス其故障ヲ述ヘントスル者ヲシテ掛リ裁判官ノ前ニ於テ直チニ自己ノ證人ヲ指名

セシムルキハ無根ノ故障ヲ申述ルヲ能ハサル可ケレハナリ然レモ
 參議院ニ於テハ別段正文ノ規則ヲ改革セス且裁判費用ノ法律第七
 條ニ於テハ故障ヲ述ントスル者ノ代書師ヨリ書面ヲ用ヒテ其證據
 ナ差出シ又其故障ヲ受ケタル證人モ同様ノ手續ヲ用ヒテ之ニ返答
 スルヲニ定メタルヲ見レハ右ノ證據ハ裁判所ニ向ケテ差出ス者ニ
 テ決テ掛リ裁判官ニ向ケテ差出ス者ニ非サルヲ明瞭ナリ○爰ニ云
 フ所ノ證據即チ証人ニ係ル故障ヲ申述ル爲メノ證據ニ就テ更ニ証
 人ナ差出スヲニ至テハ訴訟法第二百九十條ニ左ノ規則有リ格別ノ
 道理有ル時ハ裁判所ヨリ証人ニ付キ故障ヲ述フルニ付キ更ニ證人
 ナ立テシムルヲ言渡ス可シ又故障ヲ受ケシ証人ハ之ニ反シタル
 証ヲ立ル爲メ更ニ己レノ証人ヲ出スヲ得可シ此等ノ事ハ証人ノ
 急速吟味ノ法式ニ循テ之ヲ爲ス可シ○証人ニ付キ故障ヲ述フル爲

メ更ニ出シタル証人ニ付キ故障ヲ述フルニハ必ス證書ヲ出ス可シ
 又其故障ヲ受ケシ証人其故障無キ旨ヲ証スル爲メ更ニ出シタル證
 人ニ付キ故障ヲ述フルモ亦同様ナリトス
 既ニ正文ニ於テ急速吟味ノ法式ヲ用フルト有ル故右ノ事ハ必ス裁
 判所ニ於テス可シ掛リ裁判官ノ前ニ於テスルヲ得ス○既ニ証人ニ
 就キ故障ヲ申述フルヲ許シタルキハ其勢此故障ノ爲メノ證人ニ就
 キ又故障ヲ述フルヲ許サ、ルヲ得ス然ラサレハ人將サニ云ハン
 トス主件ノ事實ヲ證明スルキハ容易ニ之ヲ聽入レヌシテ故障ノ申
 述ハ容易ニ之ヲ聽入ル、ト是レ決テ道理ノ正ニ非ス然レモ若シ右
 ノ如クニシテ第一ノ證人ニ就キ故障ヲ申述ヘテ又其故障ノ証人ニ
 就キ第二ノ故障ヲ申述ヘテ續々第三第四ニ至ルキハ將サニ奈何セ
 ノトス其レ然カリ故ニ右ノ正文ニ於テ更ニ出シタル証人ニ就キ故

障ヲ述フルニハ必ス証書ヲ出ス可キニ定メタルハ取リモ直サス續々故障ヲ述ヘ來ルノ困難ヲ截斷スルカ爲メナリ

〔第六百三十〕

故障ヲ受ケタル證人ノ申立ハ我輩ノ前ニ云ヘル如ク直

チニ之ヲ排斥ス可キ者ニテ辨論ス可キ者ニ非ス故ニ正文第二百九

十二條譯者按スルニ九十一條ノ謬ナリニ左ノ規則有リ

〔掛リ裁判役証人ニ付テノ故障申述ヲ允許シタル時ハ其證人ノ述ヘ

タル證ヲ記シタル調書ヲ讀上ルニ及ハス〕

人往々言フ右ニ云フ所ノ證ト雖モ掛リ裁判官ヲシテ裁判所ニ於テ

讀上ケシメ其中取ル可キ者有ルキハ之ヲ取ルニ如カスト此論ハ誠

ニ至當ナリ然レモ是レハ何分我訴訟法一體ノ主意ニ背戻スルヲ以

テ是迄行レサリキ

第三節 證人吟味ノ後ノ手續

〔第六百三十一〕

証人吟味既ニ終了スルカ又ハ未ダ全ク終ハラサルモ

其法律上ノ期限若クハ允許シタル期限過去リタルキハ雙方本人夫

レヨリ吟味ノ席ニ出ルヲ要ス○然ルニ証人吟味ニ係テハ急速ニ

著手ス可キ原由按スルニ前ニ云ヘル如ク本人交其相有リタル吟

味ノ席ニ出ルヲニ就テハ此種ノ原由無キヲ以テ法律ニ於テ別段期

限ヲ置クヲ無クシテ唯雙方本人ノ催促ニ任ス

訴訟法第二百八十六條ニ曰ク〔証人吟味ノ期限終リタル時ハ一方ノ

者ヨリ調書ノ副本ヲ相手方ノ代書師ニ送達シ相手方裁判ノ席ヘ出

ツ可キヲ招書ヲ以テ要ム可シ〕

彼ノ千六百六十七年ノ官令第二十二卷第二條及ヒ次條ニ於テハ吟味ノ席ニ出ル

手續ヲ原告人ヨリ始ムルキハ其證人吟味ニ係ル書類ヲ送達シ被告

人ヨリ始ムルキハ其反對ノ證人吟味ニ係ル書類ヲ送達セリ而シテ

現今ニ至テモ實際ニ於テ多クハ此規則ニ徇フ意ヲコ既ニ正文ニ於テ證人吟味ニ係ル調書ノ副本ヲ送達ス可シト有ルニ仍ホ右ノ如ク兩分スルヲ要スルハ何ノ意ツヤ況ンヤトリビニテ一院ノ意見書ニモ證人吟味ニ係ル調書ハ原告人ノ證據ト被告人ノ反對ノ證據ト合シテ一トスト云フノ語有ルヲ見レハ我レヨリ吟味ノ席ニ出ルヲチ要求スルカ爲メニ我カ證人ノ調書ト我相手方ノ證人ノ調書トチ一纏ニシテ送達スルモ決テ此レカ爲メ異日相手方ノ證人ノ調書ニ就テ我ヨリ取消ヲ求ルノ權利ヲ失フヲ有ル可ラス然レモ今日實際ニ於テ行ハル、所ハ我輩ノ意見ト異ニシテ且其同意者多キヲ故右ノ送達ヲ爲スニハ務テ用心シ以テ自己ノ權利ヲ保守スルヲ良シトス

〔第六百三十二〕 又裁判所ハ時ニ由リ其證人ニ係ル故障ヲ判決スル言渡ノ外仍ホ左ノ二件ニ就テ處置セサル可ラス

第一 若シ其證人吟味ノ適當タルコトニ就テ異論有ルキハ之ヲ判決ス

第二 證人ノ申立ノ當否ヲ考察ス

此ヨリ以下ハ逐次ニ此二項ヲ論究セントス

第一 證人吟味ニ係ル無効

〔第六百三十三〕 若シ其證人吟味ノ調書ニ於テ掛リ裁判官及ヒ書記官ノ姓名ノ手署無キ等總テノ全體ニ關係ス可キ不當ノ筋合有ルキハ全ク其無効ヲ致ス所謂全部ノ無効是レナリ若シ又其中ノ若干事件ニ於テ不當ノ筋合有ルキハ唯此等ノ事件ノ無効ヲ致ス所謂部分ノ無効是ナリ 訴訟法第二 百九十四條

其無効ヲ致ス可キ筋合唯體裁上ニ在ル丈ケナルキハ雙方本人承諾スルニ於テハ其効ヲ保存スルヲ得是故ニ例ヘハ其一方ノ者適當ニ

呼出ヲ受ケタルト無キモ既ニ出席シテ其儘右ノ証人吟味ニ取掛リタルキハ其呼出ノ不當ナルカ爲メニ此証人吟味ノ取消ヲ請求スルヲ得ス○是故ニ若シ適當ニ呼出ヲ受ケスシテ其取消ヲ請求スルノ權利ヲ保守セント欲セハ必ス此レカ爲メ相當ノ手續ヲ爲サ、ル可ラスシテ單ニ文義上ノ手段即チ其代書師ハ本人ノ爲メニ他日異議ヲ申立ルノ意ヲ留ム等ノ事ヲ書シタルモ裁判所ハ格別之ヲ採聽スルヲ要セス○若シ又其証人吟味ノ開始又ハ収結ノ爲メノ期限ヲ拘守セサル等總テ社會ノ順序ニ係ル規則ニ背戾シタルヨリシテ其証人吟味ノ不適當ヲ至シタルキハ縱令相手方承諾シタルモ一方ノ者此ヲ以テ口ニ藉クヲ得可ラサルヲ以テ相手方ニ於テ右ニ云フ所ノ取消ノ權利ヲ保守スル爲メノ手續ヲ爲スハ全ク不用ニ属ス他無シ右ノ手續ヲ爲シタルト否サルトヲ論セス取消ヲ請求スルヲ得可ク

レハナリ

〔第六百三十四〕

既ニ其証人吟味ヲ以テ無効ト爲シテ之ヲ取消シタルキハ訴訟法ニ於テ三種ノ區別ヲ置ケリ一ニ曰ク其不當ノ筋合掛リ裁判官ノ所爲ヨリ起ル場合ニ曰ク其代書師ノ所爲ヨリ起ルカ又ハ其本人ノ所爲ヨリ起ル場合以下之ヲ論セン

〔第六百三十五〕

右ノ第一ノ場合ニ於テハ本人ニ於テモ少モ過失無キヲ以テ再ヒ其証人吟味ヲ開始スルヲ得而シテ其掛リ裁判官ハ次ノ証人吟味ニ係ル費用ヲ擔當セサル可ラス○此規則ハ大出格ノ者ト必得可シ通常ノ規則ニ於テハ凡ソ裁判官ハ其譎詐ノ行爲ニ係ル外ハ一切其責ニ任スルノ事無キヲ以テナリ

訴訟法第二百九十二條ニ曰ク掛リ裁判役ノ過失ニ因リ証人吟味ノ取消トナリ又ハ其述フル所ノ取消トナリタル時ハ其裁判役ノ費用

ナ以テ更ニ之ヲ爲ス可ク再次ノ証人吟味ノ期日ハ其再吟味ノ言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ之ヲ數フ可シ但シ再吟味ノ時ハ本人ヨリ以前ノ証人ヲ出スヲ得可シ若シ其以前ノ証人ヲ出スヲ能ハサルキハ裁判役以前吟味ノ時其証人ノ述ヘタル所ニ注意ス可シ

〔第六百三十六〕 抑右ノ再度ノ証人吟味ニ於テ以前ノ証人ト異ナル者ヲ差出スヲ得可キ手若シ以前ノ証人ト異ナル者ヲ差出スニ於テハ其呼出ノ費用ハ最早掛リ裁判官ノ擔當ス可キ所ニ非ス然ラサレハ餘リニ其責罰ヲ重大ニスルカ故ナリ故ニ議論ノ點ハ茲ニ在ラスシテ唯縱令本人ヨリ其費用ヲ擔負スルモ元來以前ト異ナル証人ヲ差出スヲ得可キカ否サルカト云フノ點ニ在リ論者云フ再度ノ吟味ヲ命スルコトハ本人ヲシテ以前ノ吟味ノ取消ノ爲メニ損害ヲ蒙ルコト莫ク亦此レカ爲メニ利益ヲ得ルコト莫クシテ唯其儘ニ吟味ヲ仕直ス

ノ主意ナリ然ルニ若シ以前ノ証人ト異ナル者ヲモ差出スヲ得可シトスルキハ取リモ直サス却テ取消ノ爲メニ利益ヲ得ルト謂ハサルヲ得サルニ立至ラン况ンヤ既ニ正文ニ於テ更ニ之ヲ爲ス可シト有ルヲ見レハ以前ノ形况ニ復歸スルノ譯ナルヲ以テ唯適當ノ定式ニ徇フテ同様ノ證據ノ申立ヲ爲サシムル丈ケナル應シ我輩意フニ此論ハ誠ニ其理無キニ非ス然レモ正文云フ所ノ以前ノ証人ヲ出スヲ得可シノ語ハ彼ノ千六百六十七年ノ官令ヲ採襲セル者ニテ此官令ヲ編纂セル時既ニ以前ノ証人ヲ差出サシムルヲ得可キヤ否ヤノ議論有リシカ竟ニ之ヲ差出サシムルヲ得可キニ決定セリ而シテ此議論ヲ考察スレハ當時ノ論者ハ皆以前ト異ナル者ヲ差出スヲ許ルストニ就テハ同意ナリシヲ知ル可シ然ラサレハ其中以前ノ証人ヲ差出スヲ以テ不可ト爲セシ者ノ意ニ於テハ元來何レノ証人ヲ以テ

四四

再度証人吟味ヲ爲スノ了箇アリシカチ解ス可ラサレハナリ
〔第六百三十七〕 若シ其不當ノ筋合紹介吏即チ代書師又ハ使吏ノ所爲

ヨリ起リタル場合ニ於テハ前ニ云フ所ト違ヒ再度ノ証人吟味ヲ命
スルコトヲ得ス即チ正文第二百九十三條ノ規則ヲ左ニ揭示ス
代書師又ハ使吏ノ過失ニ因リ証人吟味ノ取消トナリタル時ハ再ヒ
其吟味ヲ爲ス可カラス然レモ本人ハ其代書師又ハ使吏ニ對シ費用
ノ償ヲ要メ又其代書師又ハ使吏ノ解怠明白ナル時ハ損失ノ償ヲモ
要ムルコトヲ得可シ但シ此等ノ事ハ掛リ裁判役ノ判斷ニ任ス可シ
右ノ再度ノ証人吟味ヲ禁スルコトニ就テハ二箇ノ主意有リ一ニ曰ク
本人ハ總テ其事ヲ委托シタル者ノ過失ニ係テ自ラ其責ニ任セサル
ヲ得ス意フニ此主意ハ較取ル可キ所有リ二ニ曰ク其不當ノ筋合タ
ル或ハ右ノ者ト本人ト謀合シテ之ヲ行ヒ次キニ再度ノ吟味ヲ得テ

四四

本人チシテ法律ニ預防スル所ノ手段即チ相手方ノ証人ノ陷誘スル
ノ手段ヲ得セシメント計ルコト有ラン意フニ此主意ハ「トリビエナー」院
ノ議員特ニ之ヲ主張シタルモ我輩ハ甚之ヲ取ラス何トナレハ縱令
本人右ノ計ニ出テタレモ元來自ラ其証人吟味ノ取消ヲ請求スルチ
得可キ者ニ非ス故ニ右ノ計ノ適中スルコトハ唯其相手方モ亦右ノ証
人吟味ノ取消ヲ求メテ其間ニ一方ノ証人ヲ陷誘セント欲シタル場
合ニ限ル事ニテ畢竟甚罕ナル事柄ナリト知ル可シ
抑右ノ二箇ノ主意ニ依テ遂ニ其再吟味ヲ禁止スルコトハ甚至當ニ非
サルチ以テ實際ニ於テハ大抵右ノ場合ニハ裁判官ノ職務ヲ以テ更
ニ証人吟味ヲ命スルチ常トス他ニ非ス裁判官ハ元來其訴訟ノ事理
ヲ發端スルカ爲メニ証人吟味ヲ以テ必要ト爲ス時ハ本人ノ請求ヲ
待タスシテ之ヲ命スルノ權有ルカ故ナリ
訴訟法第二〇又何レノ原
百五十四條

再ヲ問ハス是非トモ再ヒ其證人吟味ヲ爲サ、ルヲ得サル場合有リ
即チ夫婦離居ノ訴訟等ノ若ク總テ社會ノ順序ニ關係スル時是レナ
リ此場合ニ在テハ裁判官之ヲ拒ムヲ得ス證人ヲ用ヒテ事實ヲ証明
セシムルノ外手段無キカ故ナリ

第二 證人ノ申立當否ヲ考察スル事

〔第六百三十八〕 我輩向キニ證人ニ係ル故障ノ規則ノ原起ヲ論スルニ
當テ既ニ略言セシ如ク往古ニ於テハ證人ノ申立ヲ考察スルコトニ就
テ學科上ノ要款ノ數若干ヲ設置セリ故ニ縱令裁判官其申立ル所ヲ
以テ至當ナリト爲スモ其中右ノ要款ヲ具備セサルキハ之ヲ信用ス
ルヲ得ス又更ニ甚シキハ縱令裁判官ノ衷情ニ於テ至當ナリト思量
セサルモ法律ニ定メタル若干ノ場合ニ於テハ必ス信用セサルヲ得
サルノ規則タリキ其第一種ノ規則ハ羅馬皇帝コンスタンテンノ時

代ヨリ發起セル者ニテ証人一名ノ申立ハ必ス信用セサルコト是レナ
リ故ニボナエー氏ノ言ニモ其證人ノ申立ル所如何ニ適當ニ見ユル
モ其證人ノ地位如何ニ貴顯ナルモ一人ナレハ之ヲ信用スルヲ得ス
其第二種ノ規則ハ即チ故障ノ原由無キ者二名ノ申立ル所全ク相同
キキハ所謂法律上ノ信用ヲ因起スル者ニテ裁判官タル者決テ之ヲ
採用セサルヲ得サルコト是レナリ

然ルニ訴訟法ニ於テハ右等臆造ノ規則ヲ再興セス故チ以テ唯一人
ノ申立ニテモ或ハ裁判所ノ信用ヲ得可ク又縱令二箇又ハ三箇ノ明
白ニシテ且ツ相符合シタル申立ニテモ裁判官ノ意ニ於テ全ク安ソ
セサル所有ルキハ之ヲ排棄スルヲ得可シ此ニ由テ考フレハ現今ニ
於テハ凡ソ證人ノ申立ヲ考察スルニハ何レノ管轄ヲ問ハス治罪法
第三條ニ依テ陪審ニ命スル所ノ注意ニ曰ク凡ソ法律ハ陪審ノ確

的、ト、爲、ス、憑、據、ノ、如、何、ヲ、論、ス、ル、ト、無、ク、又、徵、証、ノ、完、備、シ、テ、且、信、據、ス、可、
キ、ヤ、否、ヲ、試、識、ル、可、キ、規、則、ヲ、定、ル、ト、無、ク、シ、テ、唯、其、罪、犯、ノ、證、及、ヒ、被、告、
人、ノ、答、辨、ニ、就、キ、其、曲、直、如、何、ヲ、自、己、ノ、本、心、ニ、諮、詢、シ、テ、之、ヲ、決、斷、ス、可、
シ、
○、法、律、ハ、陪、審、ニ、對、シ、必、ス、證、人、幾、許、ノ、述、フ、ル、所、ヲ、以、テ、正、實、ト、爲、ス、
可、キ、ヲ、命、ス、ル、ト、無、ク、又、云、々、ノ、調、書、云、々、ノ、証、書、云、々、ノ、証、人、ノ、憑、據、ハ、
必、ス、拵、棄、ス、可、キ、等、ノ、事、ヲ、定、ム、ル、ト、無、シ、故、ニ、宜、ク、唯、其、衷、情、ノ、安、シ、ス、
ル、所、ニ、從、テ、以、テ、其、職、務、ヲ、行、フ、可、キ、而、己、

〔第六百三十九〕抑證人ノ申立ル所原告人ノ趣意ト異ナラサルキハ必

ス原告人ノ趣意通りノ言渡ヲ爲シテ乃チ其レヲシテ克訴訟トナラ
シムルヲ要スル乎曰ク是レ然ラス古昔ヨリ實際ニ於テ裁判官ハ自
己ノ見ル所ヲ以テ判決スルヲ常トス故ニ一原則ノ語ニ豫審ノ言渡
ハ裁判官ノ意ヲ拘束スルコト無シト云フコト有リ○然ルニ此原則ノ主

意ハ人或ハ之ヲ誤解スル有リ辯セサル可ラス總テ本人證人吟味ヲ
願出ル場合ニ於テ裁判所法律ニ依準シテ既ニ之ヲ允許スルカ又ハ
棄却スルノ言渡ヲ爲シタルキハ決シテ次キニ其言渡變易スルヲ得
ス故ニ若シ證人吟味ヲ允許シタル時被告人ニ於テ不服ノ筋合有ル
キハ直チニ其允許ニ就テ控訴スルヲ得訴訟法第四是故ニ右ノ原則
ニ豫審ノ言渡ハ裁判官ノ意ヲ拘束スルコト無シト云ヘハ決テ自由ニ
其言渡ヲ變易スルヲ得可シトノ義ニ非ス蓋シ往古法律家ノ所解ト
並ニ今日實行スル所トニ依ルニ右ノ原則ノ主意ハ正ニ茲ニ在リ曰
ク裁判所法律ニ依準シテ其證人吟味ヲ允許シタルモ即チ豫審ノ言
ヲ確定ノ言渡ヲ爲スニ就テハ決テ其證人吟味ヨリ得ル所ノ事情ヲ
以テ根據ト爲スヲ要セス故ニ豫審ノ言渡ハ裁判官ノ意ヲ拘束スル
無シト云ヘルハ唯裁判官ヲシテ其衷情ノ安ニスル所ニ從フテ判決

六四四

セシムルニ在リト知ル可シ何トナレハ既ニメルラン氏ノ言ニモ若
シ一事件有テ裁判官ノ意ニ於テ此事件明白ナルヲ得ハ以テ其訴訟
ノ曲直ヲ知ルニ足ルト思量スルヨリシテ證人吟味ヲ命シ其上ニテ
始テ其事件ノ左程ニ肝要ナラサリシヲ看認ル等ノ場合ニ於テハ縱
令其事件ハ少モ證人ノ申立ト異ナラサルモ確定ノ言渡ヲ以テ却テ
本人ヲシテ負訴訟トナラ令ルコトハ何レノ年代ニ於テモ亦何レノ邦
國ニ於テモ當然有ル可キ事ナリト又雙方本人ノ趣意書ニ依テ察シ
テ甚大切ノ様ニ見ユル事項モ證人ヲシテ證明セシムルノ後ニ於テ
其事ハ現在スレト前ニ思惟セシ如クニ緊要ナラサルコト亦屢之リ有
リ况ンヤ裁判官ハ縱令證人吟味ヲ允許シタルモ決テ舉テ之ニ其訴
事ノ曲直ヲ附托スルニ非スシテ凡ソ其訴事ニ關スル書類ハ矢張之
ヲ點檢スルノ權ヲ保守スルヲヤ

然リト雖モ右ニ云フ所ノ豫審ノ言渡ヲ以テ裁判官ノ意ヲ拘束セザ
ルコトハ唯證人吟味ノ場合ニ限ルニ非スシテ凡ソ確定ノ言渡ノ前ニ
命スル所ノ下調ベノ手段ニハ皆之ヲ準用ス可キ者ナリ

第四章 裁判官自ラ其地ニ至テ檢査スル事

〔第六百四十〕 以上云フ所ノ事即チ證書ヲ用ヒテ證明スル事ト及ヒ證
人ヲ用ヒテ證明スル事ハ皆他人ニ附スル所ノ信用ヲ以テ根基ト爲
スノ手段ニシテ乃チ證據ト云フ語ノ最廣ノ意義ニ依ル者ナリ然ル
ニ家屋府庫等ノ如ク總テ實物ノ現在スル時ト及ヒ其形狀性質ニ係
ル時ニ至テハ裁判官自ラ其地ニ至テ之ヲ檢視スルノ堅確ナルニ若
ク者無シ

七四四

〔第六百四十二〕 凡ソ下調ノ手段ノ中ニ就テ裁判官ノ檢査ヨリ確實ナ
ルハ莫シ然レトモ往古ニ於テハ亦餘リ容易ニ此手段ヲ行フノ弊害往

々之レ有リキ是レ他無シ裁判官此レカ爲メ若干ノ謝報ヲ得ルヲ常
トセルカ是ナリ是ヲ以テ彼ノ千六百六十七年ノ官令ニ於テハ此手
段ヲ命スルヲニ就テ若干ノ制限ヲ置ケリ即チ訴訟法第二百九十五
條ノ規則ハ之ヲ再興セルニ過キス左ニ其文ヲ揭示ス
「裁判所ニテ必要ト思量スル時ハ裁判役中ノ一人訴訟ノ生シタル地
ニ至リ検査スル言渡ヲ爲スヲ得可シ然レモ鑑定人ノ申立ノミニ
テ十分ナル可キ時ハ原告又ハ被告ノ一方ヨリ別段願出シタル場合
ノ外裁判所ヨリ裁判役ヲシテ其検査ヲ爲サシムルヲ言渡ス可カ
ラス」

現今ニ至テハ裁判官其地ニ至テ檢視スルモ本人ハ唯其費用ヲ拂フ
而已ニテ別ニ謝報ヲ要スルヲ無フシテ往古ノ如ク餘リ屢此事ヲ命
スルノ弊無シ是故ニ彼ノ官令第二十一條中ニハ無効ノ罰ヲ以テト云

フノ語有リタルモ訴訟法ニハ之ヲ消除セルヲ以テ縱令本人ヨリ願
出テスシテ且鑑定人ノ申立而已ニテ充分ナル可キ場合ニ於テ右ノ
檢視ヲ言渡シタルモ此レカ爲メ其言渡ノ無効ヲ致スヲ無シ且又訴
訟法ヲ閱スルニ鑑定人ノ申立ヲ聽ク可キ場合ト裁判官ノ自ラ往テ
檢視ス可キ場合トノ分界ヲ示メシタル規則ハ絶テ之レ無シ此ニ由
テ觀レハ縱令上等裁判所ニ於テ其下等裁判所ノ命シタル檢視ヲ以
テ不相當ト思量スルヲ有ルモ唯其費用ヲ以テ其檢視ヲ行ヒタル裁
判官ノ擔當ニ歸スルニ止マリ決シテ其檢視ヲ取消スヲ有ル可ラス
〔第六百四十二〕又訴訟法ニ於テ右ノ檢視ハ必ス其言渡ニ立會タル裁
判官ノ一人ニ命スルヲニ定メタルハ裁判費用ヲ增多セサルカ爲メ
ト及ヒ証據ニ就テノ附帶ノ手續ニ係ル一般ノ規則ニ適合スルカ爲
メナリ百九十六條○總テ既ニ本件ヲ取扱ヒタル裁判官ニ右ノ檢視

テ托スルキハ自餘ノ者ヨリモ能ク其場所ノ形况理由ヲ了解ス可キ
 一固ヨリナリ然レモ其場所其裁判所ノ管轄外ニ在ルニ於テハ亦此
 規則ニ依準シ難キ者有リ故ニ此場合ニ於テハ是非トモ其管轄ノ裁
 判所ノ一員ニ請托シテ右ノ檢視ヲ行ハサルヲ得ス然ルニ或ル法律
 家等云フ此場合ニハ最早之ヲ指テ場所ノ檢視ト謂フ可ラスシテ却
 テ鑑定人吟味ニ類似スル者ナリ故ニ檢視ノ事ハ掛リノ請托ヲ以テ
 行フ可キ者ニ非スト是レ大ニ然ラス何トナレハ訴訟法第千三十五
 條ハ取りモ直サス爰ニ云フ所ノ手續ニ係ル規則ヲ趣意トシテ揭示
 セル者ナルニ其文中「其他總テ裁判所ノ言渡ニ因リ或事ヲ爲ス可キ
 時」ト有ルヲ見テ知ル可シ且既ニ裁判官ヲシテ本地ヲ檢視セシムル
 一ニ必要ナリトスル以上ハ縱令他ノ裁判所ノ員ニモ有レ之ヲ附托
 シテ有益ノ取調ヲ得ルニ於テハ其儘ニテ己ムニ勝サルヲ萬々ナラ

ズヤ

又右ノ如クニシテ他ノ裁判所ノ一員ヲシテ本地ノ檢視ヲ爲サシム
 ルキハ其言渡書ニ於テ必ス其檢視ス可キ事件ヲ別段ニ記入スルヲ
 要ス他無シ始メヨリ其訴事ノ目的トスル所ヲ承知セサルカ故ナリ
 ○若シ夫レ其主件ノ訴訟ヲ取扱フ裁判所ニ於テ其一員ニ命シテ其
 檢視ヲ行ハシムル場合ニ在テハ法律家往々云フ既ニ法律ニ於テ別
 段記入ノ事ヲ命セサルヲ以テ矢張記入セサルヲ良シトス然ラサレ
 ハ其事件或ハ外洩スルヨリシテ本人等其檢視ニ先ツテ豫メ其事件
 ノ形况ヲ改易スルヲ有ラント意フニ此論ヲシテ前後整齊ナラシメ
 シトスルニハ元來檢視ノ言渡ヲ公行スルヲチモ禁セサルヲ得ス且
 又實際ニ於テ豫メ右ノ事ヲ記入スルキハ以テ其掛リ裁判官ノ職務
 トス可キ所ヲ判知セシムルノ利益有ルヲ屢ナリ是故ニ記入ノ事ハ

法律ニ於テ之ヲ命セス亦之ヲ禁セスシテ全ク裁判所ノ臨機ニ附スル者ト心得可シ

〔第六百四十三〕 又法律ニ於テハ唯掛リ裁判官一員ニ右ノ檢視ヲ命スル時ノ規則而已ヲ揭示シタルモ其實必要ナルニ於テハ亦裁判所ノ全員自ラ其地ニ至テ檢視スルヲ得可シ但シ此場合ニハ決テ雙方本人ヲシテ其費用ヲ擔當セシム可ラス○右ハ全ク其裁判官ノ勉勵心ヨリ發起スルコトニテ實際ニ於テ是レ迄屢之レ有リ故ニ嘗テ右ノ種類ノ檢視ノ後ニ於テ爲シタル言渡ヲ覆審院ニ於テ破毀シタルコト有レハ是ハ皆唯其檢視ヲ雙方本人ノ對立シタル前ニ於テ行ハサリシ爲メニテ決テ裁判所ノ全員ヲ以テ檢視シタルカ爲メナラス○右ノ場合ニ於テ預メ檢視ヲ行フ可キ期日ヲ指示スルコトハ甚大切ナリ雙方本人ヲシテ相當ノ申立ヲ爲スヲ得セシムルカ爲メナリ然ラサレ

ハ裁判官折角ノ存慮モ却テ其立會ハサル一方ノ爲メニハ迷惑ノ筋合ト成ル可シ何トナレハ其者ハ自己ノ申立ヲ爲スヲ得サルヲ以テ或ハ其檢視シタル物件ニ係ル所ノ相當ノ理由ノ發見セサルコト有ル可ケレハナリ故ニ以テ訴訟法第二百九十七條ニ揭示スル所ノ規則ハ尋常ノ檢視ニテ掛リ裁判官一名ノ場合ノ爲メニ設ケタル者ナレハ矢張右ニ云フ所ノ場合ニモ準用ス可シ左ニ其文ヲ出ス
「先ニ手續ヲ爲ス一方ノ願ニ因リ掛リ裁判役其検査ヲ爲ス可キ地ト日刻トナ記シタル言渡書ヲ渡ス可シ但シ其言渡書ノ副本ヲ一方ノ代書師ヨリ他ノ一方ノ代書師ニ渡シタルヲ以テ他ノ一方ノ者ヲ検査ノ地ニ呼出シタルト看做ス可シ」

〔第六百四十四〕 總テ爰ニ云フ所ノ検査ハ全ク實物ニ係ルコト故檢事タル者其訴訟ノ一方タラサルヨリハ別段之ニ立入ルコトヲ要セズ即チ

四五四

訴訟法第三百條ノ規則ヲ左ニ揭示ス
「檢察官ハ自ラ訴訟ノ原告又ハ被告タル時ノ外検査ノ地ニ至ルコト及
ハス」

〔第六百四十五〕 右ノ檢視ヲ請求シタル本人又ハ裁判所ノ職務ヲ以テ
其檢視ヲ命ジタル場合ニ於テハ其掛リ裁判官ノ示令書ヲ請求シタ
ル本人ヨリ其費用ノ先拂トシテ之ヲ書記局ニ附托セサル可ラス
法第三
百一
條 是ノ他ニ非ス裁判官タル者ヲシテ其紹介吏ノ如クニ其拂ヒ
置キタル費金ノ償還ヲ得ル爲メニ他日本人ヲ出訴スルコトニ立入ラ
シムルハ甚相當ニ非サルカ故ナリ
掛リ裁判官及ヒ書記官ニ拂フ可キ費用ノ額ハ即チ訴訟法第二百九
十八條云フ所ノ如ク検査ノ地ニ至リ其地ニ滞在シテ裁判所ニ返
ル迄ノ日數ヲ記シタル調書ニ依テ算定ス

右ノ調書ハ必ス其地ニ於テ之ヲ作ルコトヲ要ス
訴訟法第三
百十七
條 而シテ其
中ニハ亦掛リ裁判官ノ行ヒタル事件雙方本人ノ出會シタルト否サ
ルト及ヒ其申立タル事柄並ニ其姓名ノ手署又ハ其手署ヲ命ジタル
事ト及ヒ其檢視シタル日附ヲ記シ次ニ掛リ裁判官及ヒ書記官之ニ
其姓名ヲ手署スルヲ要ス

〔第六百四十六〕 其檢視了ハリタル時ハ原告被告ノ孰レニテモ其調書
ヲ相手方ニ送達シ三日ヲ經テ自己ノ代書師ヲシテ相手方ノ代書師
ニ招書ヲ送ラシメ以テ吟味ノ席ニ出ルコトヲ催促ス
訴訟法第二
百九十
條 裁判所ハ掛リ裁判官ノ申立ニ因テ評議ヲ爲ス然レモ必スシモ其申
立ヲ採用スルヲ要セス是レハ鑒定人ノ申立ヲ聽ク時モ同様ニテ我
輩仍ホ之ヲ次章ニ細論セントス

五五四

第五章 鑒定人ノ申立
以下時々鑒定人ノ啓報
ト譯ス全ク同事ナリ

六五四

〔第六百四十七〕

裁判官雙方相争フ物件ヲ検査スルニ於テ常ニ自テ充
分ノ所見ヲ有スル能ハスシテ時ニ由リ特ニ其事ニ熟練シタル人即
チ鑒定人ノ意見ヲ諮詢セサルヲ得ス是レ即チ土地ノ検査ノ式ノ外
仍ホ鑒定啓報ノ式アル所以ナリ○又時ニ由リ右ノ二式ヲ兼用スル
コト有リ即チ勸解裁判官本地ヲ檢視スルニ當リ其職業ノ者ヲ以テ自
ラ從フコト是レナリ 訴訟法第
四十二條

〔第六百四十八〕

我法律ハ鑒定人ノ啓報ニ係ル規則ニ於テハ前ニ云ヘ
ル證人吟味ニ係ル規則ニ比シテ更ニ良好ニシテ其間往古ノ法律ヲ
改革セシ所ノ者鮮少ナラスシテ大率其當ヲ得タリ以下論スル所ヲ
見テ知ル可シ○我輩此章ノ論点ヲ三箇ニ分別シ第一ニ鑒定ノ式ヲ
命スル言渡ト及ヒ其鑒定人ヲ指命スル事トヲ論シ第二ニ鑒定ノ式
ニ著手スルコトヲ論シ第三ニ裁判官其啓報ニ係テ必要トスル所ノ考

察ヲ論セントス

第一 鑒定ノ式ヲ命スル言渡及ヒ其鑒定人ノ指命

〔第六百四十九〕

雙方相争フ物件ヲ検査スル爲メ法律ニ於テ鑒定人ノ
意見ヲ聽クコトヲ以テ至當ノ式ト爲シテ必ス之ヲ命スル場合有リ例
ヘハ賣主ノ爲メ損失有ル原由ヲ以テ賣買ノ契約ヲ取消ス時ノ如キ
是レナリ○抑此取消ノ事ノ爲メニ鑒定人ノ意見ヲ聽クコトニ就テハ
民法ニ於テ良好ノ改革ヲ行ヒケルカ途ニ訴訟法ニ至テ一切鑒定人
ノ意見ヲ聽クコトニ於テ此民法ノ改革ヲ推擴セリ○法律ノ明文ニ於
テ別段鑒定人ノ意見ヲ聽クコトヲ命スル場合ノ外仍ホ裁判所ノ職務
ヲ以テ鑒定人ヲ用フルヲ得可キ場合之レ有リテ此ノ場合ニ在テハ
全ク裁判官ノ見計ニ屬ス可キコトハ是迄異論スル者有ルコト無シ故ニ
必スシモ論究スルヲ要セス若シ夫レ右ニ云フ所ノ如ク法律ノ明文

七五四

ナ以テ鑒定人ヲ用フルヲ命スル場合ニ於テ裁判官或ハ之ヲ用ヒ
 スシテ唯自己ノ思察ヲ以テ判決スルヲ得ルト否サルトニ至テハ我
 輩爰ニ之ヲ論辨セサルヲ得ス○此事ヲ理會スルニハ先二箇ノ場合
 ナ分別スルヲ要ス例ヘハ均ク賣主ヨリ其損失ノ爲メニ賣買ノ契約
 ナ取消サントスル時ニテモ其損失タル或ハ極メテ些少ニシテ鑒定
 ノ式ヲ命スルニ於テ徒ニ費用ヲ生シ時日ヲ瀰テ大ニ裁判所ノ體面
 ニ害スル等ノ場合有リ故ニ是時ニハ縱令法律ノ明文有ルモ裁判官
 ハ其見計ヲ以テ之ヲ取捨スルヲ得ヘキヲ疑ヲ容レヌ又時トシテハ
 鑒定ノ式ヲ以テ取りモ直サス其訴訟ノ固有ノ手續ト爲ス可キ場合
 有リ例ヘハ共和政治第七年「フリメール」月二十二日ノ法律第八條ヲ
 以テ命スル所ノ如ク總テ記録税ニ係テ行政官ヨリ其割合税ヲ課ス
 可キ不動産ノ價格ヲ証定スルヲ求ル時ノ如ク故ニ此時ニハ裁判官

タル者是非トモ鑒定ノ式ヲ用ヒサルヲ得ス○若シ夫レ法律ニ於テ
 別段明文無キ場合ニ至テハ全ク裁判官ノ自由ニ任ス是レ乃チ近時
 一體ノ主意ニ適合スル者ナリ故チ以テ彼ノ千八百四十一年六月二
 日ノ法律ノ編纂者ノ意モ全ク茲ニ在テ乃チ裁判所ノ命ヲ以テ賣却
 ス可キ幼者ノ財産ノ價格ヲ前以テ見積ルトニ就テ其以前ハ必ス鑒
 定人ヲ用フルノ規則タリシモ遂ニ裁判官ノ臨機ニ委スルト成レ
 リ

「第六百五十」鑒定ノ式ヲ命スル言渡書ニハ必ス其鑒定ヲ爲ス可キ事
 項ヲ明指スルヲ要ス鑒定人ハ前ニ云ヘル所ノ檢視ノ掛リ裁判官ト
 違ヒ始メヨリ相争フ物件ノ如何タルヲ知ラサルカ故ナリ即チ訴訟
 法第三百二條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

「鑒定人ヲシテ鑒定ヲ爲サシム可キ事有ル時ハ裁判所ノ言渡書ヲ以

○六四

テ之ヲ言渡ス可シ但シ其言渡書ニハ鑒定ヲ爲ス可キ諸件ヲ註明ニ記ス可シ

〔第六百五十一〕 鑒定人ヲ指命スルコトニ係テハ訴訟法ヲ以テ大ニ往古ノ例格ヲ改正シテ其惡弊ヲ洗除セリ爰ニ之ヲ言ハシテ○往古ニ於テハ雙方本人各自ラ其鑒定人ヲ撰命セルヨリシテ二箇ノ大弊害ヲ引起セリ第一ハ鑒定人各其撰命ヲ受ケタル本人ニ對シ自然代言人ノ如キ情意ヲ生シテ竟ニ實事掩蔽ヲスルコトニ注意セスシテ其本人ノ權利ヲ護擁スルコトヲ專一トスルニ至ルコト是レナリ第二ハ鑒定人ノ意見大抵兩分シテ乃チ對立スルヨリシテ其時ニハ是非トモ今一名ノ鑒定人ヲ指命セサルヲ得スシテ此レカ爲メ時日ヲ曠過シ費用ヲ增加スルコト是レナリ現今ニ至テハ然ラズ凡ソ鑒定人ハ皆雙方本人ノ同意ヲ以テ之ヲ撰命ス否ヲサレハ裁判官ノ職務ヲ以テ之ヲ指命

ス故チ以テ右ノ第一ノ弊害ヲ生スルコト莫シ又其員ハ必ス奇數ヲ用フル故右ノ第二ノ弊ヲ生スルコト莫シ即チ正文第三百三條ノ規則チ左ニ揭示ス

〔鑒定人ハ三員ヲ以テ定數トス但シ雙方本人鑒定人一員ノミニテ十分ナルコトヲ承諾シタル時ハ格別ナリトス〕
然リト雖モ雙方本人右ノ事ヲ相承諾スルニハ必ス自身ニ權利ヲ使用スルヲ得可キ者タルヲ要ス○又法律ニ於テ裁判官ヲシテ唯一員ノ鑒定人ヲ用フルコトヲ得セシムル場合有リ是レハ手續ノ簡單ナルト費用ノ節約ナルトヲ求ムルカ爲メナリ即チ裁判所ノ命ヲ以テ幼者ノ財産ヲ賣拂フノ前ニ於テ其評價ヲ爲サシムル時ノ若キ是レナ

一六四

〔第六百五十一〕 價造ノ訴訟 訴訟法第九百五十五條
〔第六百五十二〕 價造ノ訴訟 訴訟法第二百三十二條ニ係ル時ノ外何レノ場合ニ於

テモ鑒定人ヲ撰命スルコトハ雙方本人ノ權ニ在リ○又其撰命ハ其鑒定ノ式ヲ命スル言渡ヲ受クルノ時ニ於テスルヲ得但シ何レノ場合ニ於テモ本人自ラ之ヲ撰命スルニハ必ス其全員ヲ撰命スルヲ要ス故ニ例ヘハ雙方ノ者相承諾シテ己テニ二員ヲ命シ今一員ニ就テ異議有ルモ裁判所ニ於テ其一員ヲ命スルヲ得ス但シ關係アル者ヨリ請求有ルキハ格別ナリ此ニ由レハ雙方ノ者其全員ヲ撰命スルニ非サレハ裁判所ノ職務ヲ以テ其全員ヲ指命スルヲ常トス

又鑒定ノ式ヲ命スル言渡書ニハ必ス裁判所ノ職務ヲ以テ豫メ鑒定人ヲ指命スルヲ常トス故ニ若シ此言渡書ヲ送達シタルヨリ三日内ニ雙方ノ者其鑒定人ノ撰命ニ就キ協和セサルコト有ルキハ其言渡中ニ在ル所ノ鑒定人ヲ其儘用フルヲ得訴訟法第 三百五條是レハ再度ノ言渡ノ費用ト時日ヲ儉省スルカ爲メニテ誠ニ良法ト謂フ可シ○双方ノ者

協和シテ鑒定人ヲ撰命スルコトハ取リモ直サス本人ノ爲ス可キコトニテ其代書師ノ任ス可キ所ニ非ザル故右ニ云フ所ノ言渡書即チ鑒定ノ式ヲ命スル言渡書ハ唯相手方ノ代書師ニ送達スル而已ナラス必ス相手方本人ニ送達スルヲ要ス第三百四十九見合而シテ雙方ノ者既ニ協和シテ之ヲ撰命シタルニ於テハ其旨ヲ書記局ニ申出ツ可シ訴訟法第 三百六條

〔第六百五十三〕 右ニ云フ所ノ三日ノ期限了ハリテ雙方ノ者猶ホ未ダ協和セサルキハ原告被告ノ孰レニテモ其言渡書ニ於テ裁判所ヨリ指命シ置キタル所ノ鑒定人ニ向テ招書ヲ送り以テ其言渡書ヲ執行シテ乃チ掛リ裁判官ノ前ニ出テ、其誓詞ヲ宣ルコトヲ要求スルヲ得可シ訴訟法第 三百七條○然レモ若シ雙方ノ者協和シ得タルニ於テハ縱令己テニ右ノ期限了ハリタルモ仍ホ雙方ノ者ノ撰命シタル鑒定人ヲ用フ可シ裁判所ノ指命シタル者ヲ用フルヲ得ス人或ハ云ハン然レハ

四六四

則チ雙方ノ者ノ有スル撰命ノ權利ハ實際ニ於テ何レノ日ニ喪失ス可キト爲サンカ曰ク裁判所ノ指命シタル鑒定人己テニ其誓詞ヲ宣述シテ乃チ公然鑒定人ノ事ヲ視ル可キニ至リタル時始テ之ヲ喪失ス可キ者タリ

〔第六百五十四〕以上論スル所ノ外仍ホ鑒定ノ式ニ係テ極メテ重大ノ事件ノ在ル有リ而シテ正文之ニ言及ハス即チ鑒定人ハ如何ノ人物ヲ用フルヲ得可キト云フ一是レナリ以下之ヲ論セン○抑鑒定人ノ任務ハ決テ尋常證人ノ任務ニ比ス可キニ非ス其製スル所ノ調書ハ贗造ノ出訴有ル迄ハ確實ノ信ヲ生ス可キ者ナル故其任務ハ幾ント裁判官ノ代理ニ均シキ者ニシテ一時ノ問之ヲ官吏ト看做ス可シ故ニ外國人ノ如キハ其之ニ任ス可カラサルヲ疑テ容レヌシテ未ダ曾テ異論スル者有ラス○然ルニ右ノ鑒定ノ事ニ任スル者ハ必ス國士

五六四

權有ルヲ要スルト否サルトニ至テハ其論一ナラスシテ有名ナル法律家ノ中云フ有リ既ニ法律ノ明文無キ以上ハ此職ノ爲メニ必ス國士權有ルヲ要ス可キノ理無シ況ンヤ此任ハ特別ノ一科ニ熟達シタル者ノ行フヘキ所ナルヲ以テ縱令婦女子ト雖モ其相争フ事件ニ就キ熟達シタル者ナルニ於テハ亦之ヲ用ヒサル可カラスト我輩ノ論ヲ以テスレハ立法者ノ意ハ決テ是ノ如クナラス何トナレハ共和政治第十一年「ワント」ス月二十五日ノ法律第九條ニ依ルニ鑒定人ノ任ヲ以テ端式ノ調書ヲ認ムルニ非スシテ唯證人ノ譯ヲ以テ右ノ調書ヲ保證スル者ニ係テモ猶ホ國士權有ルヲ要ス故ニ鑒定人モ亦之レト同様ニ看做サントルヲ得スシテ即チ刑法第三十四條及ヒ第四十二條ノ規則ニ依ルニ鑒定人ト右ノ種類ノ証人トハ既ニ全ク同一ニ看做セリ

六六四

〔第六百五十五〕

鑑定人ニ係テモ證人ニ係ルト同様雙方本人其故障ヲ申述フルヲ得但シ若シ其故障ノ原由ヲ知リナガラ協和シテ之ヲ撰命シタル時ハ否ラス即チ訴訟法第三百八條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

〔裁判所ヨリ任シタル鑑定人ニ非レハ本人ヨリ故障ヲ述フルヲ得ス但シ本人協議シテ撰ミタル鑑定人ト雖モ之ヲ撰ミタル後其未ダ誓ヲ爲サ、ル前ニ本人ヨリ故障ヲ述フ可キ原由ノ生シタル時ハ格別ナリトス〕

右ノ規則ノ主意ハ他ニ非ス既己ニ誓詞ヲ宣ヘタル以上ハ縱令次キニ鑑定人ノ爲メニ其本人ノ一ト利益ヲ同フシ又ハ親情ヲ起ス可キ原由生シタリトモ其心中ニ神明ヲ畏敬スルヨリシテ必ス此等ノ私念ヲ抑制スルト看做スカ故ナリ

又縱令雙方ノ者既ニ協和シテ其鑑定人ヲ撰命シタルモ其時ニ於テ

其故障ノ原由ヲ知ラサリシキハ實際ニ於テ矢張其申述ヲ採聽スルヲ常トス然レモ我輩ノ意ヲ以テスレハ右ノ申述ヲ許スニハ其原由ヲ知ラサリシノ一ト必ス確實ナルヲ要ス例ヘハ其鑑定人本人ノ一ト血属又ハ姻属タルヲ隱匿セシ場合ノ若キ是レナリ

〔第六百五十六〕

往古ニ於テハ鑑定人ニ係ル故障ノ原由ト裁判官ニ係ル故障ノ原由ト同一ナリシカ現今ニ至テハ然ラス即チ訴訟法第三百十條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

〔證人ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可キ原由有ル時ハ亦鑑定人ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ〕

右ノ如クニシテ證人ニ係ル故障ノ原由ト鑑定人ニ係ル故障ノ原由ト同一ニシタルヨリシ本人ト平時相憎怨シ又ハ本人ノ債主若クハ負債者タル等ノ原由ハ最早鑑定人ニ對シテ之ヲ申述フルヲ得

ス他無シ此等ノ原由ハ裁判官ニ在テハ甚重大ナレハ鑑定人ニ在テハ左程ノ重大ナルニ非サルカ故ナリ而シテ盜業ノ爲メニ懲治ノ刑ヲ受ケタルヲ又ハ本人ノ一ニ對シテ絶ヘス役從セルヲ等ノ若キ原由ハ證人ニ對シテ之ヲ申述フ可キ者ニシテ亦之ヲ鑑定人ニ申述フ可シ他ナシ此等ノ原由ハ裁判官ニ對シテハ元來有ル可キ筈ナラサルカ故ナリ

〔第六百五十七〕

又其故障ハ之ヲ申述フル本人ノ爲メニ或ハ損害ヲ生

ス可キヲ以テ訴訟法第三百十四條 其代書師ヨリ之ヲ申述フルニハ必ス本人

ノ特別ノ委任狀有ルヲ要ス又正文第三百九條ニ於テ故障ヲ申述フルニハ必ス鑑定人ノ任ヲ受ケタルヨリ三日内ニ於テス可キニ定メタリ然ルニ雙方ノ者ノ協和シテ其鑑定人ヲ撰命ス可キ期日ハ鑑定ノ式ヲ命スル言渡書ヲ送達シタルヨリ三日ノ間ナルヲ以テ訴訟法第三百

五 條爰ニ云フ故障ノ爲メノ期日モ同様右ノ鑑定人ヲ指命シタル旨ヲ

送知シタルヨリ算始ス可キ者ト心得可シ

〔第六百五十八〕

鑑定人ニ係ル故障ヲ申述フルニハ尋常ノ書面ヲ以テ

ス而シテ此書面中ニハ故障ノ原由ト及ヒ證書ヲ以テ此原由ヲ證明スルカ又ハ證人ヲ用テ之ヲ證明スルノ意タルヲ記ス訴訟法第三百九條○

右ノ故障ニ就キ鑑定人之ヲ承諾セサルハ檢事ノ意見ヲ聽キタル

上ニテ裁判所ニ於テ急速吟味ノ式ヲ以テ之ヲ判決ス若シ又証人ヲ

用テ其故障ノ原由ヲ証明セシム可キ旨ヲ命シタルハ証人ノ事ニ

係ル急速吟味ノ時ト同様ノ規則ニ依テ之ヲ行フ訴訟法第三百十一條

〔第六百五十九〕

鑑定人ニ係ル故障ノ裁判言渡ハ若シ其主件ノ訴訟ニ

就テ控訴スルヲ得可キハ同様之ヲ控訴スルヲ得可シ然レモ其言

渡ハ法律ニ於テ控訴ニ管セス執行ス可キ者トス是レ餘リキ時日ヲ

曠過セサルカ爲メナリ 百十二條 是故ニ若シ其故障ノ申述棄却セラル、ニ於テハ直チニ鑒定ノ事ニ著手シ許允セラル、ニ於テハ直チニ其鑒定人ノ代員ヲ命ス而シテ此代員ヲ命スル、ハ必ス裁判所ノ職務ヲ以テシテ本人ノ協和ニ委セス此レ亦餘リニ時日ヲ曠過セサルカ爲メナリ 百十三條

〔第六百六十〕

右ノ故障棄却セラレテ其訴事ノ故ヨリシテ時日ヲ延引シタルカ爲メニ相手方ノ損害ヲ生シタルニ於テハ其故障ノ原由如何ヲ論セス相手方ヨリ損失ノ償ヲ要求スルヲ得ヘシ若シ夫レ其故障ヲ受ケタル鑒定人ノ如キハ其中立タル原由自己ノ榮譽ニ害シタルニ非サレハ損失ノ償ヲ要求スルヲ得ス但シ其鑒定人眞ニ榮譽ノ傷害ヲ受ケタルヨリシテ其償ヲ得タルモ亦右ノ傷害現在セサルヨリシテ其償ヲ得サルモ一タヒ之ヲ要求シタル上ハ其鑒定ノ任務ヲ

去ラサルヲ得ス 百十四條 第三 是レ他ニ非ス其任務タル元來双方本人

ニ對シ公平不偏ナルヲ要ス可キニ一タヒ其一人ヲ相手トルキハ或ハ偏頗ニ陷ルノ恐レ有ル可ケレハナリ

〔第六百六十一〕

爰ニ一言ス可キ、アリ我輩乃チ此ヲ以テ鑒定人ノ指命ニ係ル論項ヲ収結セントス曰ク鑒定ノ任務ハ之ヲ承諾シ又ハ謝拒スルヲ勝手タリトス 百十六條 然レモ一タヒ之ヲ承諾シテ其誓詞ヲ述ヘタル以上ハ其者ト双方本人トノ間ニ於テ一種裁判所上ノ契約ヲ要結シタルカ若キヲ以テ之ヲ毀破スルヲ得ス即チ正文第三百十六條ノ文ヲ左ニ揭示ス

「誓ヲ爲シタル後其職務ヲ行ハサル鑒定人ハ本人ノ爲シタル無益ノ費用ヲ償ヒ又格別ノ道理有ル時ハ本人ノ損失ノ償ヲ爲ス可キヲ裁判所ヨリ言渡サル可シ」

然リト雖モ若シ其時其任務ヲ辭謝ス可キ重大ノ原由ノ生セシ場合ニ在テハ縱令既己ニ誓詞ヲ述ヘタル後ニテモ仍ホ其代員ヲ求ム可キヲハ固ヨリ疑ヲ容レヌ

第二 鑒定ノ式ニ著手スル事

〔第六百六十二〕 抑誓詞ヲ宣フルヲハ誠ニロアグー氏ノ言ヘル如ク官吏タル者ニ其職務ノ重キヲ附托スルノ行爲ナル故鑒定人ニ在テモ同様之ヲ行フ可キ者タリ前ニ云ヘル如ク一時ノ間裁判官ヲ代理スルカ若クナルヲ以テナリ是ヲ以テ總テ鑒定ノ式ヲ命シ且雙方本人ヲシテ其鑒定人ヲ撰命スルヲ命スル言渡ニ於テハ必ス一掛リ裁判官ヲ任シ之ヲシテ其鑒定人ノ誓詞ヲ受ケシムルヲ常トス即チ正文第三百五條ニ左ノ規則有リ

「鑒定人ヲシテ鑒定ヲ爲サシム可キ言渡書ニハ掛リ裁判役ノ姓名ヲ

記ス可シ但シ本人ノ協議シタル鑒定人又ハ裁判所ヨリ任シタル鑒定人ハ掛リ裁判役ノ面前ニテ誓詞ヲ述フ可シ

又裁判所ヨリ鑒定人ニ其鑒定ヲ爲ス地ノ治安裁判役ノ面前ニテ誓詞ヲ爲ス可キ言渡ヲ爲スヲ得可シ」

掛リ裁判官ノ任ハ畢竟鑒定人ノ誓詞ヲ受クルヲ止ル可キ者タリ故ニ若シ鑒定人其鑒定ヲ爲ス可キ地ニ赴クニ於テ一二ノ差支ヲ慮ルヨリシテ掛リ裁判官ノ其地ニ出張スルヲ請求スルヲ有ルハハ裁判所此レカ爲メ必ス別段ニ之ニ命スルヲ要ス

〔第六百六十三〕 誓詞ヲ宣述ス可キ日限ハ掛リ裁判官ノ定ル所タリ而シテ之ヲ定ルヲハ双方ノ者協和シテ其鑒定人ヲ撰命ス可キ爲メノ期日了ハリタル時其中ノ一ヨリ申出ル所ノ請求ニ因ル
三三七條此
場合ニ於テ双方本人ハ必スシモ出席スルヲ要セサルコト
同原告被

告ノ孰レニテモ右ノ請求ヲ爲ス者ハ必スシモ其相手方ニ向テ招書ヲ送ルヲ要セスシテ唯之ヲ其鑒定人ニ送ル丈クニテ足ルト雖モ成ル可クハ矢張相手方ニモ之ヲ送ルヲ良シトス其故ハ若シ雙方本人其席ニ出テタルニ於テハ一切其次ノ送達ノ手續ヲ省クヲ得テ隨テ裁判費用ヲ儉約スルヲ得可クレハナリ但シ實際ニ於テハ右ノ場合ニハ大抵双方ノ代書師其本人ニ代テ出席スルヲ常トス故ニ裁判費用ノ法律第九十ニ於テ鑒定人ノ誓詞ニ出席スル代書師ノ爲メニ別段其謝金ノ額ヲ定メリ

〔第六百六十四〕右ノ外仍ホ双方本人出席スルヲ良シトス可キ理由有リ是レ他ニ非ス若シ其鑒定人ノ員不足スルニ於テハ其代員ヲ命ス可キカ故ナリ是ヲ以テ正文第三百十六條ニ左ノ文有リ

「若シ鑒定人其任ヲ受クルヲ承諾セス又ハ之ヲ承諾シタル後誓ヲ

爲スタメ又ハ定マリシ日刻ニ鑒定ヲ爲スタメ出席セサル時ハ双方本人協議シテ其者ニ代ヘ直チニ他ノ鑒定人ヲ擇ム可シ然ラサレハ裁判所ヨリ之ヲ任ス可シ」

〔第六百六十五〕其鑒定人既ニ定式ニ徇フテ誓詞ヲ宣ヘタルキハ必ス之レカ調書ヲ記シ且其鑒定ノ事ニ著手ス可キ日限ヲ指示ス是レハ甚大切ノ事タリ故ニ正文第三百十五條ニ左ノ規則有リ

「鑒定人ノ誓ヲ述ヘタルヲ記シタル調書ニハ鑒定人ノ其職務ヲ行フニ付キ定メタル場所ト日刻トヲ附記ス可シ」

〔双方ノ本人又ハ代書師ノ面前ニテ鑒定人誓ヲ述ヘ其調書ニ前ニ記シタル所ヲ附記シタルニ於テハ後ニ鑒定人其職務ヲ行フ特別段本人ニ呼出狀ヲ送ルニ及ハス若シ一方本人又ハ代書師ノ出席セサル時之ヲ爲シタルニ於テハ鑒定人ノ定メタル日刻ニ本人其場所ニ出ツ

六七四

可キヲ他ノ一方ノ代書師ヨリ招書ヲ以テ要ム可シ
此招書ヲ以テ要求スルノ規則ハ若シ徇ハサルニ於テハ其鑒定ノ啓
報ノ全部ヲシテ無効ト成ラシム但シ縱令本人其要求ヲ受ケサルモ
己テニ其好意ヲ以テ出席シタルハ右ノ如ク無効ヲ致ス可ラサル
ヲ勿論ナリ

既ニ右ノ要求ヲ爲シタル以上ハ縱令其鑒定人ノ申立如何程時日ヲ
經過スルモ其間一切要求ヲ爲スヲ得ス而シテ此規則ハ立法者訴
訟法中此等ノ總規則ニ係ル條ニ於テ之ヲ揭示セリ即チ第一千三十四
條ノ文ヲ左ニ出ス

「評價人ノ評價ヲ爲ス時ニ立會フ可キノ招書又ハ二箇ノ訴訟ヲ混同
シテ一箇ト爲スニ付テノ呼出狀第七百十
九條見合ニハ其初度ノ評價ヲ爲ス
場所ト日刻又ハ初度ノ吟味ヲ爲ス場所ト日刻トヲ記ス可ク第二次

ノ評價ヲ爲シ又ハ第二次ノ吟味ヲ爲スニ付テハ更ニ再ヒ招書又ハ
呼出狀ヲ送達スルニ及ハス」

然レモ鑒定人ハ毎次ノ鑒定ノ終ニ於テ其次ノ鑒定ヲ何レノ日ニ行
ヒ且何レノ場所ニ行フト云フヲ指示ス故ニ若シ本人出席セサル
ヨリシテ其鑒定ノ形況ヲ識知スルヲ能ハサルモ是レハ自身ノ越度
ナル故決テ他ニ怨懣スル所有ルヲ得ス

〔第六百六十六〕 既ニ適當ニ双方本人ニ告知シタル上ハ直チニ其鑒定
ノ事ニ著手ス可シ○鑒定ノ式ヨリ得ル所ノ事ハ一々之ヲ調書ニ記
ス而シテ其事ニ就テ分明ナル二部ノ別有リ即チ第一ハ鑒定人ノ鑒
定シタル事件ナリ第二ハ鑒定人ノ意見ナリ

七七四

〔第六百六十七〕 右ノ調書ノ第一ノ部分ハ双方本人ノ面前ニテ之ヲ記
ス即チ正文第三百十七條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

「鑒定人ヲシテ鑒定ヲ爲サシム可キ言渡書及ヒ必要ノ書類ハ之ヲ鑒定人ニ渡シ本人ハ其相當ト思量スル所ヲ鑒定人ニ述フルヲ得可シ但シ本人ノ述ヘタル所ハ鑒定人ノ申立書中ニ附記ス可シ」

又鑒定人ノ啓報即チ其中立書ニハ鑒定人ノ其地ニ至リタルヲ及ヒ双方本人ノ至リタルヲ並ニ通常ノ通り其地ニ於テ必要ナル書類ヲ渡シタルヲ記入スルヲ要ス而シテ凡ソ鑒定人ノ其附托セラレタル事件ニ係テ相當ト思量シタル種々ノ檢査ハ皆双方本人又ハ其代書師ノ面前ニ於テ之ヲ行フ可シ○又其地ノ習慣等ニ係テハ動モスレハ其土人ノ陳述ヲ聽テ利益有ル可キヲ以テ豫メ言渡書ニ於テ鑒定人ニ許シテ此種ノ陳述ヲ聽クヲ得セシムルヲ得但シ土人此陳述ヲ爲スニハ別段誓詞ヲ宣フルヲ無シ

第六百五十四見合 ○又双方本人ハ其有益ト思量スル手術例ヘハ家屋又ハ牆屏ノ傾側毀敗等ニ係リ果シテ

其土地ノ不良ナルニ起リタルカ若クハ其建築ノ醜惡ナルニ因レルカヲ察スル爲メ其周傍ヲ發掘スル等ノ事ヲ請求スルヲ得可シ但シ此等ノ請求ハ必ス常ニ之ヲ允許スルヲ要セス然レモ既ニ其請求有リシキハ必ス其旨ヲ調書ニ記入セサル可カラス○以上云フ所ハ即チ鑒定ノ調書ノ中ニテ其第一ノ部分タリ而シテ訴訟法ニ於テ唯其鑒定人ヲシテ之ニ其姓名ヲ手署セシムル而已ニシテ他人ノ手署ヲ命スルヲ無シ

〔第六百六十八〕 右ノ第一ノ部分了ハリタルキハ双方本人其場所ヲ立去ルヲ要ス鑒定人ヲシテ其第二ノ部分即チ其意見ヲ記ス可キ部分ヲ作ラシムルニハ陰密ヲ要スルカ故ナリ○此事ニ係テモ我訴訟法ニ於テ甚能ク往古ノ法律ヲ改正セリ○往古ニ於テハ我輩ノ既ニ言ヘル如ク双方本人各其鑒定人ヲ撰命セシヨリシテ各鑒定人皆別ニ

其調書ヲ記シテ其意見大率兩分シ竟ニ今一人ノ鑒定人ヲ命シ之ヲシテ其意見ヲ記セシメサルヲ得カリシヲ屢ナリ現今ニ至テハ鑒定人ノ員ハ必ス奇數ヲ用フルヲニ定メタルヲ以テ右ノ弊害無フシテ大ニ其手續ノ簡單ヲ致セリ
訴訟法第三百十八條ニ曰ク「鑒定人ノ申立ハ數員ニテ一通ヲ記ス可シ但シ其鑒定人ノ中一員ノ說他ノ二員ト異ナル時ハ二員ノ說ニ從フ可シ」

「然レモ其說ノ各相異ナル時ハ其各說ノ趣意ヲ記ス可シ然レモ甲ノ說ハ云々乙ノ說ハ云々タルヲ記ス可ラス」

人或ハ右ノ第二ノ規則ヲ論駁シテ云フ是レハ往古訴訟手續ヲ陰密ニスルノ餘習ナリト我輩以爲フニ然ラス何トナレハ唯一通り事實ヲ陳述スル所ノ證人ト自己ノ意見ヲ述ハテ重大ノ責任ニ富ル所ノ

鑒定人トノ間ニハ自テ別ヲ置カサルヲ得ス故ヲ以テ現ニ裁判官及ヒ陪審ノ若キハ公然ニ其意見ヲ述フルヲ無ケレハ則チ法律ニ於テ鑒定人ヲ以テ同様ノ規則ニ入レタルモ決テ不整齊ト謂フ可カラス他無シ鑒定人ノ任務ハ裁判官ノ決議ヲ豫具スルニ在レハナリ〇若シ夫レ一個有名ノ鑒定人有テ裁判所特ニ其者ノ意見ヲ聽クヲ欲スル等ノ場合ニ在テハ固ヨリ其レヲシテ吟味ノ席ニ於テ公然陳述セシムルヲ得可シ是レハ往古巴勒裁判所ニ於テ令許シタル事ニテ現今ニ及ンテモ既ニ屢之ヲ行ヘリ此ニ由テ觀レハ右ノ如クニ公然辨論陳述セシムル事ト尋常ノ規則即チ調書ヲ記シテ自己ノ意見ヲ簡明ニ述ヘシムルヲトハ各其利益有テ決テ相悖ル者ニ非ス

〔第六百六十九〕

此ヨリ以下ハ鑒定人ノ申立ニ係ル外部ノ規則ヲ論セントス但シ此規則ハ此申立ヲ構成スル所ノ兩部分ニ相通シテ用フ

可キ者タリ即チ訴訟法第三百十七條ノ文ヲ左ニ揭示ス

「其申立書ハ争ノ生シタル場所又ハ鑑定人ノ定メタル場所ト日刻トニ於テ之ヲ記ス可シ」

「其申立書ハ鑑定人中ノ一員之ヲ記シ皆其姓名ヲ手署ス可シ若シ鑑定人皆書記スルヲ知ラサル時ハ鑑定ヲ爲ス地ノ治安裁判所ノ書記官其申立書ヲ記シテ之ニ姓名ヲ手署ス可シ」

其鑑定人皆能ク書スルニ於テハ各皆其一員ノ記スル所ヲ監視スルヲ以テ少モ面倒ヲ生スルヲ無シ若シ夫レ其中一人書スル能ハサル者有ルキハ自餘ノ能ク書スル者ヲシテ其申立書ヲ記セシムルヲ得ス他無シ大抵自ラ書スル能ハサル者ハ亦人ノ書ヲ讀ム能ハサルカ故ナリ是ヲ以テ此場合ニ於テハ其鑑定人一官吏即チ勸解裁判所ノ書記官ニ口占シ之ヲシテ申立書ヲ記セシムルヲ要ス○此書記官ハ

其鑑定人ノ申立書ヲ記セントスル場所ヨリ取ルヲ要ス必スシモ其争ノ生シタル地ヨリ取ルヲ要セス既ニ勸解裁判所ノ書記官ナルキハ何レノ地ニテモ同様ナルヲ以テ是非トモ鑑定人ヲシテ其地ニ赴カシムルノ理無ケレハナリ○又右ノ書記官鑑定人ノ口占ニ隨テ記スルニハ宜ク公書人ノ遺囑者ニ於ケルカ如クヌ可シ故ニ其口占スル所ノ事ハ固ヨリ一々之ヲ記ス可シト雖モ必スシモ其言語ヲ眞寫スルヲ要セス無學ノ職人等ニ在テハ殆ント章句ヲ成サ、ルヲ有ルヲ以テナリ

〔第六百七十〕 又鑑定人ノ申立書ニ係テ大ニ心得置ク可キヲ有リ曰ク

此事ニ就テハ彼ノ證人吟味ノ調書ニ於ケル如ク無効ノ罰ヲ以テ別段ノ定式ヲ命スル等ノ事無キヲ以テ其遺忘シタル定式ノ果シテ大切ニシテ乃チ其無効ヲ致ス可キト否サルトチ辨別スルマハ全ク學

科上ノ理論ニ依ル故ニ若シ其鑒定人其申立書ヲ記スルニ共同ヲ以テセサリシカ或ハ此レカ爲メ適當ニ双方本人ヲ呼出サレリシキハ其申立書ヲ取消スヲ得可シ若シ夫レ其争ノ生シタル地又ハ預定シタル地ニ於テ記スルノ規則ハ誠ニ有益ナレトモ徇ハサルニ於テ必スシモ其申立ノ全體ヲ害スルノ事無キヲ以テ左程ニ嚴重ニセスシテ可ナリ○又總テ爰ニ云フ申立ノ無効ヲ致スルハ縱令其中ノ重大ナル者ニテモ決テ社會ノ順序ニ關涉スルト云フニ非サルヲ以テ双方本人明々相承諾スルカ又ハ暗許スルキハ宜ク以テ其効ヲ保全ス可キヲ疑フ容レヌ

〔第六百七十一〕 鑒定人既ニ其申立書ヲ記シタル上ハ直チニ之ヲ裁判所ノ書記局ニ呈托スルヲ要ス即チ訴訟法第三百十九條ニ左ノ規則有リ

〔鑒定人ノ申立書ノ正本ハ鑒定ヲ言渡シタル裁判所ノ書記局ニ之ヲ納メ鑒定人ハ再ヒ誓ヲ爲スニ及ハス○其鑒定人ノ謝金ノ高ハ裁判所ノ上席人申立書ノ正本ノ末ニ之ヲ附記シ鑒定ヲ求メタル一方ノ者又裁判所ノ職務ヲ以テ鑒定ヲ爲ス可キヲ言渡シタル時ハ其鑒定ヲ爲サシムル手續ヲ爲シタル一方ノ者ヲシテ其謝金ヲ出サシム可キ書面ヲ鑒定人ニ渡ス可シ〕

鑒定人ヨリ其申立書ヲ書記局ニ差出スルハ或ハ其中ノ一員自ラ之ニ任シ或ハ他人ヲ以テ其名代ト爲ス而シテ書記官ハ之ヲ請取リタル旨ヲ調書ニ記スルヲ要ス

〔第六百七十二〕 若シ鑒定人訴訟ノ了ハラサル前假リニ其謝金ヲ請取ラントスルキハ必ス其鑒定ヲ請求シタル本人ニ催促スルヲ要ス若又裁判所ノ職務ヲ以テ其鑒定ヲ言渡シタル場合ニ於テハ其言渡ヲ

執行スル爲メノ手續ヲ爲シタル本人ニ催促スルヲ要ス而シテ仍ホ其謝金得ル能ハサルニ於テハ其訴訟ノ収結ノ後其負訴訟ト成リタル者ニ催促ス但シ此者ハ固ヨリ其裁判費用ヲ擔當ス可キヲ故其最初鑒定ノ式ノ事ニ係テ同意ナリシト否サルトテ論スルヲ無シ○又最初双方本人同意ヲ以テ鑒定ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其同意ノ明許ヨリシト暗許ヨリシトテ論セス鑒定人ハ名代人ノ名義ニ依テ各本人ニ對シ連帶ノ訴訟ヲ爲スヲ得可シ民法第二千二條以上云フ所ハ皆明瞭ニシテ少モ疑ヲ容レヌ○然ルニ爰ニ一議論有リ曰ク若シ双方ノ一人公然鑒定ノ式ヲ行フコトニ不同意タリシ場合ニ於テ其者克訴訟ト成テ其相手方義務ヲ拂フヲ能ハサルノ形況タルニ於テハ果シテ其克訴訟者ヲシテ右ノ鑒定ノ式ニ係ル費用ヲ拂ハシム可キ乎誠ニ想ヘ一證人有テ原告被告ノ一ノ者ニ反對シテ一事ヲ證實シ其

者勝訴訟ト成リタル時其證人ヨリ此勝訴訟者ニ向フテ謝報ヲ要求セハ之ヲ何トカ謂ハシ蓋シ實驗ニ依ルニ一方ノ者鑒定ノ式ヲ請求シ以テ自己ノ趣意ヲ證明セント欲シテ其相手方右ノ鑒定人ノ申立ニ管セズ勝訴訟ト成ルヲ往々之レ有リ然ルニ此場合ニ於テ勝訴訟者ヲシテ負訴訟者ニ代テ其鑒定人ノ爲メニ謝金ヲ拂ハシムルト云フハ取リモ直サス右ニ云フ所ノ證人ニ係ル事件ト同様ニテ一大不正ノ譯ニ非スヤ然レモ又一方ノ点ヨリ云フキハ鑒定人ニシテ其謝金ヲ求ルヲハ亦至當ノ事ニテ決テ之ヲシテ損失ヲ蒙ラ令ルヲ有ル可カラズ故ヲ以テ今日ノ實際ニ於テハ何レノ場合ヲ論セス本人ハ必ズ相連帶シテ義務ヲ拂ハシム可キニ判決シテ彼ノ民法第一千二百二條ニ義務ヲ連帶セシムルヲハ法律ノ明條ヲ要スルノ注意ヲ遵守セズ我輩意フニ此場合ニ於テ勝訴訟者ノ權利ト鑒定人ノ權利トナ

シテ並行ハレテ相悖ラサラシメントスルニハ唯一策有ル而已即チ
鑒定ノ式ヲ請求スル本人ヲシテ其費用ノ爲メ兼テ裁判所ニ預金ヲ
差出サシムル事是レナリ此事ハ既ニ往古ニ於テボチエー氏ノ願欲
セシ所ニテ我立法者之ヲ明指スルヲ遺忘セリ故ニ裁判所ノ實際
ニ於テハ必ス之ヲ命スルヲ良シトス

〔第六百七十三〕 又鑒定人其中立書ヲ差出スヲ遲延シタルキハ訴訟
法ニ於テ必ス之ヲ差出サシムル爲メノ處置ヲ命セリ即チ其第三百
二十條云フ所ノ「鑒定人其中立書ヲ裁判所ニ納ムルヲ遲延シ又ハ
之ヲ肯ンセサル時ハ勸解ノ法式無ク之ヲ三日内ニ裁判所ニ呼出シ
テ其申立書ヲ直チニ納ム可キヲ言渡シ仍ホ從ハサル時ハ之ヲ禁
錮ス可キヲ言渡ス但シ此言渡ハ急速吟味ノ法式ヲ以テ之ヲ爲ス
可シ」ト有ルヲ是レナリ○此規則ハ往古官令ノ無キ所ニシテ我訴訟

法ニ至テ始テ之ヲ設置セリ

第三 鑒定人ノ申立ヲ考察スル事

〔第六百七十四〕 鑒定人ノ申立書ハ原告被告ノ孰レニテモ之ヲ寫取リ
相手方ノ代書師ニ送達シ且招書ヲ以テ其吟味ノ席ニ出ルヲ要求
ス訴訟法第三
百二十條是レハ總テ附帶ノ訴訟ニ係ル普通ノ手續ナリ○此手
續已テ了ハリテ裁判官其中立ノ當否ヲ檢査考察ス

鑒定人ノ中立ノ勢力ニ就テハ議論一ナラス我輩爰ニ之ヲ論究セン
トス○此申立書ニ就テハ取敢ヘス區別スル所有ルヲ要ス即チ其申
立書ノ第一ノ部分即チ何レノ日何レノ場所ニ會シ雙方本人ノ面前
又ハ其代書師ノ面前ニ於テ其鑒定ヲ爲シタル等ノ事ヲ記シタル部
分ハ他日贗造ノ訴訟有ル迄ハ眞確ノ者ト看做ス他無シ向キニ我輩
ノ云ヘル如ク此時ニ於テハ幾ント官吏ノ代理ト看做ス可キカ故ナ

リ若シ夫レ其第二ノ部分ニ至テハ然ラス此部分ニ於テハ鑒定人雙方ノ相争フ事件ニ係テ其意見ヲ述フルヲ故其誠心ハ如何ナルモ裁判官ハ仍ホ其申立ノ果シニ事實ニ適合シタルヤチ危疑スルヲ有ル可シ他無シ畢竟思料臆度ニ過キサレバナリ〇往古巴勒裁判所ノ習慣ニ於テハ鑒定人ヲ號シテ民事ノ陪審ト爲セルヨリシテ裁判官ハ必ス其意見ヲ聞届ケサルヲ得サリキ其後ニ及ンテハ訴訟ノ事柄ヲ判決スルヲモ其事柄ニ法律ヲ當用スルヲモ一切裁判官ノ責任スル所ニシテ必ス其衷情ノ安ソスル所ニ從フニ定マリ竟ニ右ノ巴勒裁判所ニ於テモ其習慣ヲ廢シテ更ニ一規則ヲ揭示セリ曰ク鑒定人ノ申立書ハ之ヲ裁判所ニ呈出シ裁判所ハ其相當ト思量スル考察ヲ加ヘ以テ其判決ヲ爲ス可シ即チ訴訟法第三百二十三條ハ此規則ヲ沿シテ之ヲ固定セル者ナリ左ニ其文ヲ出ス

「裁判役鑒定人ノ說ヲ非ナリトスル時ハ其說ヲ用フルニ及ハス」

〔第六百七十五〕

往古我諸裁判所ノ中一種ノ惡習有リシカ訴訟法ヲ制

スルニ及ンテ始テ之ヲ洗除セリ即チ双方本人ニ與フルニ更ニ再ヒ鑒定ノ式ヲ請求スルノ權利ヲ以テシテ隨テ大ニ裁判費用ヲ增多セシト是レナリ意フニ此權利ハ裁判官ヲシテ必ス鑒定人ノ申立ヲ聞届ク可キニ定メタル時代ニ在テハ甚大切ナレトモ現今ノ如ク總テ證據ノ事件ニ係テ裁判官ニ附スルニ不羈獨立ノ權ヲ以テセシ以上ハ然ラス故ニ訴訟法ニ至テ始テ之ヲ廢シテ更ニ其第三百二十二條ノ規則ヲ揭示セリ左ニ其文ヲ出ス

「裁判所ニテ鑒定人ノ申立書ヲ以テ訴訟ノ本案ノ摸樣ヲ分明ニ知ル

ヲ得サル時ハ裁判所ノ職務ヲ以テ任シタル鑒定人一員又ハ數員ヲシテ再ヒ鑒定ヲ爲サシムル言渡ヲ爲スヲ得可シ但シ其新タナル

鑒定人ハ其相當ト思量スル所ヲ以前ノ鑒定人ニ問合スヲ得ヘシ
 右ニ依レハ雙方ノ者ハ再ヒ鑒定ノ式ヲ請求スルヲ得スシテ裁判所
 ハ却テ其見計ヲ以テ再ヒ之ヲ命スルヲ得可ク管此レ而已ナラス裁
 判所再ヒ之ヲ命スルキハ縱令本人等欲セサルモ仍ホ之ヲ行ハサル
 ヲ得ス○然ルニ若シ双方本人ノ中或ハ其趣意ヲ申述ヘ此ニ由テ其
 裁判官ヲシテ再ヒ鑒定ノ式ヲ命スルノ了簡ニ至ラシメントスル有
 ランニ仍ホ之ヲモ禁ス可シト云フ者アリ是レハ我輩ノ取ラサル所
 ナリ何トナレハ裁判所果シテ再ヒ鑒定ノ式ヲ命スルヲ良シトスル
 手則チ之ヲ命スルヲ勿論ナリ果シテ本件ヲ判決スル爲メニ既ニ充
 分ナリトスル手則チ其趣意ノ當然ナルト否サルトヲ問ハス均ク不
 用ニ屬スルヲ亦勿論ナリ然レハ則チ右ノ禁制ハ幾ント目的無フシ
 テ全ク意義ヲ成サス

第六百七十六

仍ホ一言ス可キ事有リ之ヲ論シテ此第二ヲ收結セン

トス○抑共和政治第七年「フリメール」月二十二日ノ法律ニ依レハ凡
 シ記録税ニ係ル事件ニ就テハ裁判官必ス鑒定人ノ申立ヲ聞届ケサ
 ルヲ得スシテ若シ其申立ヲ以テ相當ト思量セサルキハ必ス再ヒ鑒
 定ノ式ヲ命セサルヲ得ス其主意ニ曰ク此等ノ事件ニ係テハ甚錯雜
 セル算計有テ動モスレハ租税局ニ對シテ狡詐ヲ行フヲ有ル故何分
 裁判所ノ見計ニ屬シ難シト然ルニ我輩ノ甚惜ム可キトスル所ハ他
 ニ非ス我訴訟法ハ右ノ法律ヨリ後ニ編纂シタル者ナルニ彼ノ特設
 ノ法律ニ抵觸セサルノ主意ヨリシテ此記録税ノ事ニ就テハ往古ノ
 鑒定式ノ規則ヲ其儘ニ存シテ乃チ租税局ト其相手方本人トヲシテ
 各自ラ鑒定人ヲ撰命セシムルヲ是レナリ是ヲ以テ鑒定人ノ意見動
 モスレハ兩分シテ竟ニ今一名ヲ命スルヲ要スルヲ致ス意フニ此事

コ就テモ矢張奇數ヲ用フルコニ定メシナラハ此面倒ハ容易ニ之ヲ避クルヲ得タルナル應シ

第六章 本人ノ自認ヲ得ル爲メノ手續

本人ヲ問糺スル事及ヒ本人自ラ出席スル事

〔第六百七十七〕 以上論シ來ル所ノ證據ノ類若シ全ク無キカ又ハ有リト雖モ未タ以テ事實ヲ悉スニ足ラストスル時ハ仍ホ一手段有リ即チ本人ノ誠心ニ憑依シテ之ヲシテ自ラ事實ヲ陳述セシム所謂本人ノ自認是レナリ○自認ノ事タル凡百證據ノ中ニ就テ最良ナルニ論無シ然レモ奈何セン人ノ情タル務テ自ラ防拒スルニ在ルヲ以テ此種ノ證據ハ容易ニ之ヲ得可ラス

本人ノ自認ヲ得ル手段二種有リ即チ第一ハ陰密ニ問糺スル者コト訴訟法云フ所ノ訴訟ノ本案ニ就テ本人ヲ問糺スル事是レナリ第二ハ公然ニ問糺スル者コト訴訟法云フ所ノ本人自ラ出席スル事是レナリ○右ノ第二種ノ名稱ハ通常ノ出席即チ代書師ヲシテ出席セシムル事ニ反シテ必ス本人ヲシテ自ラ出席セシムルヨリシテ來レル者タリ○右第二種ノ問糺或ハ第一種ニ比シテ更ニ簡單ナレモ之ハ實際ニ使用スルコトハ近代ノ事ナリ是故ニ訴訟法ニ於テ第一種ノ式ニ係テハ別ニ一編ヲ置キタレモ第二種ノ式ハ折々之ヲ揭示スル而已他無シ訴訟法ノ編纂者ハ專ラ往古習慣ノ遺習ヲ襲用スルヲ主ト爲セシカ故ナリ○然レモ本人ヲシテ自ラ出席セシメテ公然之ヲ問糺スルコトハ陰密ニ問糺スルニ比シテ更ニ利益有ルヲ以テ今日ニ至テハ裁判所數ノ之ヲ用フ

〔第六百七十八〕

我輩此章ニ於テ右ノ二種ノ問糺式ヲ論釋セントス○然ルニ爰ニ一事ノ二式ニ通用ス可キ者有ルヲ以テ先ツ之ヲ言ハン

曰ク雙方本人ハ其訴事ノ如何ヲ論セス亦何レノ時限ヲ論セス其相
争フ事件ニ係テ相手方ノ自認ヲ請求スルノ權利有リ是故ニ訴訟法
第三百二十四條ノ規則ハ特ニ本人問糺ノ式ノ爲メニ揭示シタルニ
亦之ヲ本人出席ノ式ニ準用ス可キヲ疑フ可キニ非ス左ニ本條ノ文
ヲ出ス

「双方本人ハ訴訟ヲ爲ス時間何事ニ限ラス訴訟ノ本案ニ直切ニ管シ
タル箇條ニ就キ相手方本人ヲ問糺ス可キヲ裁判断所ニ願フヲ得可
シ但シ此問糺ノ爲メニ訴訟ノ手續又ハ裁判官渡ヲ遅延スルヲ無カ
ル可シ」

右ニ依レハ一方ノ者其相手方ヲ問糺ス可キ旨ヲ願出ルヲハ必ス其
本人ニ止マル可シ故ニ若シ此式ヲ用テ他人ヲ問糺セントスルハ
彼ノ證人ノ申立ヲ受理シ及ヒ之ヲ取扱フ爲メノ定規ニ背戾スルヲニ

立至ルハ固ヨリ論ヲ待タス然ルニ若シ一人有テ其訴訟ニ於テ現ニ
相手方ニハ非サレトモ到底其訴事ニ關係有ルハ之ヲ問糺スルヲ待
ツ可キ乎例ヘハ夫タル者其嫁資分括民法第一千五百四十九條ノ契約ニテ娶リタ
ル婦ノ動産又ハ不動産ニ係テ訴訟スル場合又ハ財産共通ノ契約ニ
テ娶リタル婦ニ係ル事件ニ就テ共通ノ名義ヲ以テ訴訟シタル場合
等ニ於テハ裁判所相手方ノ請求ニ由リ其婦ヲ問糺スルヲ得可キ乎
意フニ此第一ノ場合ニ在テハ一方ノ者右ノ婦ヲ以テ眞ノ相手方ト
看做シテ其夫ハ特ニ其法律上ノ代理タルニ過キサル故其婦ヲ問糺
スルヲ得可キヲ殆ント論ヲ待タス若シ夫ノ共通ノ事件ニ係ル場
合ニ至テハ人或ハ云ハン其夫獨リ其共通ノ名代人ニシテ婦ノ如キ
ハ特ニ不定ノ關係有ル而已ナル故其婦ハ決シテ問糺スヘキニ非ス
ト然レモ既ニ其財産ヲ以テ共通ト爲シタル以上ハ其問或ハ其婦ノ

直切ニ關係シタル事件之レ有ル可クシテ此時ニ於テハ之ヲ問糺シ
テ大ニ事實ヲ鈎獲スルノ利益有ル可キナリ且此時ニ於テハ右ノ婦
既ニ其訴訟ニ關係有ルヲ以テ證人ノ名義ヲ以テ之ヲ呼出シテ事實
ヲ聽クコトハ決テ有ル間敷キコト故全ク之ヲ度外ニ置クカ又ハ之ヲ問
糺スルノ外手段無キ者タリ故ヲ以テ是レ迄法律家ノ中往々我輩ト
其說ヲ同フシテ乃チ亦問糺スルヲ得ヘシト思量スル者有リ而シテ
裁判所ノ實際ニ於テモ往々現ニ之ヲ問糺セリ

又凡ソ問糺ヲ爲スニハ其者必ス適當者タルヲ要ス自認ノ事タル殆
ント其者ヲシテ一權利ヲ拋棄セシムルノ効ヲ生スルカ故ナリ是ヲ
以テ後見人ノ權内ニ在ル幼者ノ若キハ決テ之ヲ問糺スルヲ得ス但
シ其者故意ヲ以テ人ニ損害ヲ加ヘ又ハ故意ニ非サルモ人ニ損害ヲ
加ヘタルキハ格別ナリトス 民法第一千三百十條

〔第六百七十九〕 既ニ右ノ第三百二十四條ニ何事ニ限ラス相手方本人
ノ自認ヲ請求スルヲ待ツ可シト云ヘル以上ハ通常證人ヲ以テ證據
ヲ申立ルヲ得サル場合例ヘハ百五十一「フラン」ニ踰ユル價格ノ契約ニ
係ル等ノ場合ニ於テモ此種ノ請求ハ矢張之ヲ爲スヲ得可シ是レ他
無シ本人ヲシテ其訴事ニ就テ自ラ情實ヲ陳述セシムルニ於テハ彼
ノ證人ニ係ル時ノ如クニ猜疑ス可キ道理無キヲ以テナリ○啻此レ
而已ナラス正文ニ何事ニ限ラスト有ルヲ見レハ亦夫婦離居ノ出訴
等ノ如ク總テ本人ノ自認丈ケニテハ猶未タ充分ニ證定スルニ足ラ
ストスル場合ニ於テモ矢張本人ヲ問糺スルヲ得可シ是レ他無シ本
人ヲ問糺スルキハ此ヲ以テ自餘ノ證據ニ對照シ又ハ之ヲ完補スル
爲メニ至要ナル事件ヲ採収スルヲ得可キカ故ナリ○然リト雖モ亂
倫又ハ姦通ヨリ生シタル親子ノ縁因等ノ如ク總テ法律ニ於テ全ク

搜索ヲ禁止スル事件ニ就テモ仍ホ本人ヲ問糺スルヲ得ル杯ト思量スルハ大謬ナリ又私生ノ父子ノ縁因ノ若キハ固ヨリ其父之ヲ承認スルヲ得ルト雖モ是レハ畢竟其好意ヲ以テ行フ可キ事ニテ決テ訴訟ヲ以テ行フ可キ事ニ非サル故同様本人ヲ問糺スルヲ有ル可カラズ○又私生ノ母子ノ縁因ニ至テハ法律ニ於テ其搜索ヲ許容セリ然レモ此等ノ搜索ハ必ス別段ニ書面ヲ以テ其證據ノ端緒ヲ示スヲ得ルヲ要ス民法第三百四十一條故ニ若シ此等ノ證據無キモ亦其母タル者ヲ問糺スルヲ得ス此種ノ訟争ハ大ニ人ノ醜辱ヲ發起ス可キカ故ニ立法者ノ趣意ハ方サニ之ヲ豫防スルニ在ルヲ以テナリ○又縦令法律ニ於テ證明スルヲ禁止セサル事件ニ就テモ本人問糺ノ式ヲ行フニハ必ス豫メ其原告人ヲシテ即チ問糺ノ式ヲ請求スル者ヲ謂フ此レカ爲メ必要トスル條件ヲ呈出セシメサル可カラズ○人或ハ云フ若シ一箇ノ端

式ノ證書ニ係テ其贋造タル旨ヲ申述ヘントスル等ノ場合ニ於テハ其書面既ニ其端式ノ體裁ヲ有スルヨリシテ贋造ノ訴有ル迄ハ眞確ト看做ス可キヲ以テ必ス定式ニ徇フテ贋造ノ訴ヲ爲ス可キカ故ニ先ツ本人ヲ問糺シテ贋造タルノ白狀ヲ得ントスルヲハ有ル可カラズト是レハ大謬ナリ但シ此場合ニ於テ其贋造ノ被告人ヲ問糺スルニハ必ス前以テ其原告人ヲシテ其贋造ノ訴ノ爲メニ必要トスル諸手續ヲ行ハシメサル可カラズ

若シ夫レ其被告人自ラ其書面ヲ贋造シタル者ニテ他ヨリ入手シタル者ニ非スト原告人ヨリ申立ル場合ニ至テハ右ノ問糺ヲ行フニ就テ議論ノ在ル有リ曰ク此場合ニ於テ本人ヲ問糺スルモ取モ直サス自身ノ耻辱ヲ白狀スルヲ命スルノ理ナリ然ルヲ敢テ之ヲ問糺シ其レヲシテ事實ヲ具陳スルカ又ハ之ヲ隱匿シテ或ハ他日重大

ノ罪科ニ陷ルカノ二途ニ立タシムルハ何分許容シ難キ者有リ
 故ニ控訴院ノ多分ノ意見ニ本人ヲ問糺セントスルニハ必ス其事
 件ヲ白狀セシムルニ於テ別段本人ノ耻辱ト成ル可キヲ無キ旨ヲ明
 指スルヲ良シトセリト然ルニ我輩ノ考ヲ以テスレハ此等ノ規則ハ
 既ニ訴訟法中ニ見ヘス且又往古ニ在テハ問糺ヲ受ケル本人ヲシテ
 必ス誓詞ヲ宜ヘシメシ故成程本人ヲシテ或ハ事實ヲ白狀スルカ或
 ハ瀆誓ノ罪ニ陷ルカノ境界ニ落在セシメタレモ今日ニ至テハ然
 ラス問糺ノ事ニ係テハ既ニ此宣誓ノ規則ヲ廢シタルヲ以テ若シ其
 事實ノ大ニ自身ノ損害ト成ル可キハ本人ハ勝手ニ自ラ防拒スル
 ヲ得可キヲ故論者云フ所ノ場合ニ於テモ矢張問糺ノ式ヲ用ヒテ別
 段差支無カル應シ

又右ノ正文ニ依ルニ本人ヲ問糺セントスル事件ハ必ス訴訟ノ本案

ニ直切ナルヲ要ス意フニ彼ノ證人吟味ニ係テハ法律ニ於テ其事件
 必ス事理ノ順序有ルヲ要セリ訴訟法第二百五十四條故ニ爰ニ云フ場合ニ於
 テモ當ニ其事件ノ直切ナルヲ要スル而已ナラス亦其事理ノ順序有
 ルヲ要スルト心得テ可ナリ

〔第六百八十〕 又右ノ第三百二十四條ニ依ルニ本人問糺ノ式即チ陰密
 ニ問糺スルヲ及ヒ本人出席ノ式即チ公然ニ問糺スル事ハ何レノ時
 ニ於テモ之ヲ請求スルヲ得可シト有ル故苟モ其訴訟未ダ了ハラサ
 ルノ前ナラハ縱令控訴シタル事件ニ係テモ之ヲ爲スヲ得可キ者タ
 リ但シ裁判所ハ此事ニ就テモ總テ其他ノ證據ノ事ニ係ルト同様臨
 機ノ權ヲ有スルヲ以テ若シ徒ニ其訴事ノ収結ヲ遲延スルカ爲メニ
 此等ノ附帶ノ手續ヲ爲サント欲スルノ惡意タルヲ考察スルキハ固
 ムリ之ヲ拒絕スルヲ得是レ乃チ立法者本條ノ末ニ於テ但シ此問糺

○五四

ノ○爲○メ○ニ○訴○訟○ノ○手○續○又○ハ○裁○判○言○渡○チ○遅○延○ス○ル○ヲ○無○カ○ル○可○シ○ノ○語○チ
加○入○シ○タ○ル○所○以○ナ○リ○以○下○問○糾○ニ○係○ル○二○箇○ノ○式○チ○各○別○ニ○論○究○セ○ン○ト
ス

第一 本人問糾ノ式

〔第六百八十一〕 此訴訟手續ニ於テハ我往古ノ法律中ニテ其極テ古キ
者ノ遺習ヲ保存セリ爰ニ之ヲ論セシ○千八百九十九年ノ官令ニ云
フ所ニ據レハ雙方ノ者ハ各其相手方ノ書面ヲ以テ返答シ且誓詞ヲ
宣ヘテ此返答ヲ保確スルヲ要セシカ爾後千五百三十九年及ヒ千五
百六十三年ノ官令ニ至テ立法者右ノ書面ノ返答ノ唯嚴格ナル丈ケ
ニテ格別ノ効益無キヲ知テ竟ニ之ヲ廢シテ問糾ノ式ヲ設ケ雙方ノ
者ノ勝手ニ任ス可キニ定メタリ然レモ問糾スル以上ハ本人必
ズ口述ヲ以テ之ニ答ヘ且ツ代書師ノ紹介ニ頼ルヲ得サリキ即チ我

な

五〇五

訴訟ニ於テ本人問糾ノ式ニ就テハ必ズ其問糾スヘキ箇條ヲ明定ス
ルヲト成リタルハ右ノ規則ヲ沿襲シタル者ニテ誠ニ惜ム可キノ至
ナリ然レモ其中亦一事ノ改正有リ問糾ニ係テ誓詞ヲ宣ルノ規則ヲ
廢シタルヲ是レナリ○抑此規則ヲ廢スルヲハ彼ノ千六百六十七年
ノ官令ヲ編纂スルニ當リ上席人ヲモアノン氏既ニ之ヲ唱ヘタレモ
竟ニ行ハレサリシカ我訴訟法ニ至テ竟ニ之ヲ廢セリ○右ノ改正ヲ
除ク外我現時ノ問糾式ハ仍ホ多ク往古ノ遺習ヲ存シテ乃チ陰密ヲ
以テ之ヲ行フヨリシテ事實ヲ擡發スルニ於テ竟ニ格別ノ利益無キ
ヲ致セリ此レハ我輩ノ後ニ論スル所ヲ觀テ明白ナル可シ

〔第六百八十二〕 本人問糾ノ事ハ前ニ云ヘル證人吟味トハ違ヒ豫メ其
事件ヲ受理ス可キト否サルトニ就キ雙方ノ者ヲシテ辨論セシメテ
然後ニ之ヲ命スル等ノヲハ決テ有ル可カラズ然ラズノハ訴訟法第

三百二十九條ノ規則ニ一方ノ者ニ問糺ス可キ箇條ハ其問糺ヲ爲ス時ノ二十四時間ヨリ前ニハ之ヲシテ知ラシムルヲ得サルノ主意ニ公然背戻ス可キヲ以テナリ故チ以テ往古ニ於テハ總テ問糺ノ式ヲ命スルニハ唯原告人即チ問糺式ヲ願フ者ヲ謂フヨリ願書ヲ差出シタル而已ニテ相手方ニ送達スルヲ無ク且裁判所ノ上席人ヨリ一示令書ヲ與フルヲ以テ足レリト爲セリ○現今ニ至テハ此レト違ヒ必ス裁判所ノ言渡書ヲ以テ適當ナリトス然レモ原告人ヨリ請求スルニハ矢張唯願書ヲ以テスル丈ケニテ此願書ハ相手方ニ送達スルヲ無ク且其言渡書ヲ發スルノ前ニ相手方ヲ呼出ス等ノヲ無クシテ畢竟雙方ヲシテ辨論セシムルヲ無シ○又此問糺式ヲ命スルニ就キ訴訟法第三百二ハ裁判所ノ上席人又ハ問糺ヲ爲ス可キ掛リ裁判官ノ示令書ヲ以テスト有レモ其實ハ言渡書ヲ以テスル者タリ而シテ此言渡ニ就テハ

故障ヲ申述ヘ又ハ控訴スルヲ得ス但シ其被告人其問糺ヲ受ク可キ箇條ヲ以テ元來受理ス可カラスト思量スルニ於テハ其問糺ニ答フルヲ無クシテ其旨ヲ裁判所ニ申立ルヲハ決テ禁スル所ニ非ス
 [第六百八十三] 裁判所ノ上席人ハ其問糺ノ事ノ爲メニ一掛リ裁判官ヲ指命ス若シ又其地遠隔セル場合ニ於テハ本地ノ裁判所ノ上席人若クハ勸解裁判官ヲ以テ其掛リト爲スヲ得可シ
 訴訟法第三百二〇又其掛リ裁判官ヲ命スルヲハ直チニ其問糺ノ式ヲ命スル所ノ言渡書ノ本文中ニ於テス可シ別段ニ言渡ヲ發スルモハ此レカ爲メ裁判費用ヲ增多スルカ故ナリ

[第六百八十四] 既ニ掛リ裁判官ヲ命シタル上ハ此掛リ裁判官其問糺ノ任ヲ受ケタル示令書ノ末尾ニ於テ其問糺ヲ行フ可キ時刻ヲ記入ス
 訴訟法第三百二十七條 此レ亦同様裁判費用ヲ儉省スルカ爲ナリ

五〔第六百八十五〕若シ本人一時ノ差支有ルヨリシテ其問糺ヲ延日ス可
八〇 キキハ更ニ他日ヲ定ム可シ 訴訟法第三 若シ亦其差支經久ノ事情タ
ルニ於テハ裁判官自ラ本人ノ住所ニ往キ以テ之ヲ問糺スルヲ要ス

訴訟法第三
百二十八條

〔第六百八十六〕抑本人問糺ノ式ノ中ニテ最不良ノ規則トス可キハ其
問糺ス可キ箇條ヲ豫メ通知スルノ一点是レナリ正文第三百二十九
條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

「相手方ノ問糺ヲ爲スヨリ少クトモ二十四時前ニ一方本人ノ願書ト
裁判所ノ上席人又ハ問糺ヲ爲ス可キ掛リ裁判役ノ言渡書及ヒ別段
任シタル使吏ノ持參ス可キ呼出狀トナ同時ニ相手方本人ニ送達シ
又ハ其住所ニ送達ス可シ」
右ノ如クニシテ豫メ本人ニ向ケテ其問糺ヲ受ク可キ箇條ヲ通知ス

九〇五

ルノ規則ハ彼ノ千六百六十七年ノ官令ヲ以テ固定シタル者タリ〇
此官令ヲ編纂スルニ當リ上席人ラモアノン氏以爲フニ斯クノ如ク
ニシテ豫メ通知スルキハ其者自ラ思考工夫スルノ暇有ルヲ以テ實
地ニ臨ミ如何様ニモ返答スルヲ得可シト乃チ其言ニ曰ク若シ吾輩
ノ意ニ從ヒ豫メ通知スルコト無ク突然問糺スルキハ本人苟モ事實ヲ
陳述セサレハ必ス前後齟齬スルヲ致ス可キカ故ニ己ムヲ得ス自狀
ス可シト此言誠ニ理有リ然レモ何分當時ノ習慣ト相異ナルヨリシ
テ遂ニ行ハレサリキ然レモ同氏右ノ外仍ホ一箇ノ意見ヲ申立テ、
此分ハ竟ニ其官令中ニ入レテ其一規則ト成レリ即チ裁判官ヲシテ
其職務ヲ以テ時トシテハ其通知セサル事件ニ就テ問糺ヲ行フコト
得セシムルノ規則ニテ此レハ訴訟法 第三百三 於テ之ヲ襲用セリ
〇抑此第二ノ規則有ルヨリシテ問糺ノ式ヲ請求スル者容易ニ其豫

メ通知スルノ規則ヲ廻避スルヲ得其仔細ハ問糺式ノ願書中ニハ格別大切ナラサル箇條若干ヲ記入シテ乃チ之ヲ相手方ニ通知シ其大切トスル箇條ハ明細ナル釋義ヲ附シテ之ヲ掛リ裁判官ニ托シ置クキハ其問糺ノ時ニ至リ其職務ヲ以テ不意ニ此箇條ヲ以テ問糺スルヲ得ルナリ○又問糺式ノ願書及ヒ掛リ裁判官ノ示令書ヲ送達スルノ規則ハ訴訟法ノ主意ニ於テ甚大切トスル所ナル故若シ徇ハサルキハ相手方其問糺ニ返答セサルノ權利有リ而シテ其原告人ハ定式ニ徇フテ再ヒ相手方ヲ呼出スノ外一切異論スルノ權利無シトス但シ此場合ト雖モ相手方若シ其好意ヲ以テ出席シタルキハ以テ其呼出ノ効ヲ保存スルヲ得可キト亦疑ヲ容レズ

〔第六百八十七〕 此ヨリ以下ハ適當ニ呼出ヲ受ケタル被告人若シ出席セサルカ又ハ出席シテ其問糺ニ返答セサルキハ如何ニ處置ス可キ

カチ論セン○官令 第十卷 第四章ノ規則ニ依レハ右ノ場合ニハ其被告人原告人ヨリ申立ル事件ヲ其儘白狀承引シタルト看做セリ我訴訟法ニ於テハ此規則ヲ以テ過嚴ナリト爲シテ之ヲ廢セリ成程既ニ適當ノ呼出ヲ受テ仍ホ出席セサルヲ見レハ其者ノ承認シタルヲ察スルニ於テ重大ノ思料有リト雖モ亦時ニ由リ已ムヲ得サル至當ノ原由無シトセス是故ニ現今ニ於テハ承認シタルト看做スヲ必要トセスシテ承認シタルト看做スヲ得可キニ定メタリ 訴訟法第三〇右ノ承認シタルト看做ス旨ヲ言渡ストハ必ス裁判所ノ任ス可キ所ナル故掛リ裁判官ハ唯其出席セサル旨又ハ出席シテ返答セサル旨ヲ調書ニ記スル丈ケナリ 同條 ○又其被告人出席スト雖モ其事件本ト相當ナラサルカ或ハ自身一箇ニ管シタル者ニ非サル旨ヲ申立テ、或ハ其問糺ニ返答セサルト有ル可シ是レ他無シ問糺ノ事ニ就テモ民法第

千三百五十九條云フ所ノ宣誓ヲ求ムル事ト同様ナルヲ以テナリ故
ニ此等ノ場合ニ於テ其判決ヲ爲スコトハ亦裁判所ノ任ス可キ所ニシ
テ掛リ裁判官ノ任ス可キ所ニ非ス

〔第六百八十八〕

既ニ被告人ヲシテ豫メ其返答ヲ思考工夫セシムル爲

メニ唯二十四時間ノ期限ヲ與フルコト故此期限ハ必ス嚴重ニスルニ
非サレハ法律ノ不整齊ヲ致ス可キ者ナリ故ニ被告人至當ノ差支有
テ出席スルヲ得サル時ハ固ヨリ正文第三百三十二條云フ所ノ如ク
其問糺ヲ延日スルニ論無シト雖モ苟モ至當ノ原由無フシテ其期限
内ニ出席セサルハ決テ之ヲシテ其問糺ニ返答スルノ權利ヲ保守
スルヲ得セシメサル可シ然ルニ訴訟法ノ主意ハ是クノ如クナラス
誠ニ怪ム可キニ非ス乎左ニ正文第三百三十一條ノ規則ヲ揭示ス
「相手方本人呼出ヲ受ケタル時出席ヲ爲サスシテ裁判官渡ノ前ニ出

席シタル時ハ其時間糺ヲ受ク可シ但シ此場合ニ於テハ嘗テ掛リ裁
判役ノ記セシ調書ノ費用及ヒ書類送達ノ費用ヲ一方本人ニ償ヒ後
ニ克訴訟ト成ルト雖モ之ヲ取戻スコトヲ得ス」

右ノ譯合ニ由テ其被告人ハ縱令其期限内ニ出席セサルモ僅ニ若干
ノ費用ヲ自ラ擔當スルハ仍ホ其問糺ニ答フルヲ得ルコト故或ハ故
サラニ遲延シテ自ラ思考構造スル爲メニ充分ノ時間ヲ櫻取スルヲ
得可シ

〔第六百八十九〕

若シ夫レ問糺ノ體裁ニ至テハ訴訟法第三百三十三條

ニ左ノ文有リ

「問糺ヲ受クル者ハ答書ノ下案ヲ讀ムコト無ク且代言人ノ助ケ無ク一
方ノ者ノ願書ニ記シタル箇條又ハ裁判役ヨリ其職務ヲ以テ問糺シ
タル箇條ヲ自カラ答ヘ其答ハ詳明ニシテ其各箇條ニ適當スヘク議

毀罵詈ノ辭ヲ用フヘカラス但シ問糺ヲ願フタル一方ノ者ハ問糺ノ席ニ出ツルヲ得ス

此所ニ至テハ我訴訟ノ規則ハ彼ノ官令ノ規則ニ比シテ更ニ古代ノ風習ニ溯レル者ト謂フ可シ○證人吟味ノ場合ニ於テハ我訴訟法ハ往古ノ法律ニ反シテ双方本人ノ出席スルヲ許セシニ問糺ノ式ニ係テハ古昔巴勒裁判所ノ最惡ノ例格ヲ襲用シテ相手方ヲシテ問糺ノ席ニ列スルヲ得サラシム意フニ此例格ハ既ニデコムトラン氏ノ痛ク論駁セシ所ナルニ我訴訟法ヲ以テ之ヲ固定シタルハ殆ント何ノ意タルヲ解セス○成程時ニ由リ相手方ノ列席ヲ許スルハ本人ヲシテ事實ヲ白狀セシムルニ於テ却テ障害ヲ爲スヲ有リ例ヘハ一方ノ者暗ニ之ヲ恐嚇スル等ノ如シ故ヲ以テ重罪裁判所ニ於テハ上席人ノ權ヲ用テ證人ノ申立ヲ爲ス時間犯人ヲシテ席ヲ退カシムルヲ

得治罪法第三條然レ此等ハ皆出格ノ事件ナレハ此ヲ以テ定規ト爲

スノ理無フシテ唯裁判所ノ見計ニ委シテ足ルシテ一國ノ法律ノ若キ即チ是レナリ若シ夫レ右ノ正文ニ於テ代書師ノ補助ヲ禁シタルカ如キハ誠ニ至當ノ事タリ他無シ爰ニ云フ場合ニ於テハ唯若干ノ箇條ニ就テ裁判官ノ問ニ答フル丈ケニシテ相争フ事件ニ係テ辨論スルヲ至テハ吟味ノ席ニ非サレハ固ヨリ行フ可カラサレハナ

第六百九十 又問糺ノ體裁ニ係ル規則即チ本人ニ對シ其返答シタル

箇條ヲ讀聞シ及ヒ其レヲシテ遺忘シタル事項ヲ加入セシムル事ノ如キハ全ク前ニ云ヘル證人吟味ノ式ニ係ル時ト同一ナリ

五二五 第六百九十一 爰ニ本人問糺ノ式ニ限ル所ノ規則有リ即チ正文云フ所其返答ハ詳明ニシテ且問糺スル所ニ適當スルヲ要スルヲ是レナ

リ然ルニ此事ハ一概ニ文意ニ泥ム可カラズ何トナレハ本人答フル所或ハ時トシテ瑣屑無味ナルモ始ヨリ之ヲシテ然ラサシムルノ手段有ルニ非ス且又其問糺スル所ニ於テ本人既ニ忘却シテ全ク記憶セスト申述フルヲ有ルモ必スシモ此ニ因テ果シテ其詐偽ナルカ亦果シテ其誠實ナルカナ判ス可キニ非ス但シ其返答スル所少モ其問糺スル所ニ干涉セスシテ全ク別事ヲ述フル等ノ場合ニ於テハ裁判官宜ク此ヲ以テ故サラニ返答ヲ拒否スルト看做シテ乃チ其問フ所ノ事ニ就テ暗ニ承服シタルト看做シテ可ナリ

千五百三十九年ノ官令ニ於テハ若シ其本人偽テ陳述スルキハ每事項ノ爲メニ二十「リ」^リ「ヅル」ノ罰金ヲ言渡スノ規則ナリシカ其後千六百六十七年ノ官令ニ至テ始テ之ヲ廢セリ其陳述ノ實ナルト偽ナルトニ就テ更ニ訴訟ヲ生シテ動モスレハ窮極無キニ至レルヲ以テナ

第六百九十二 問糺スル事件ハ唯本人一人ニ管スル者ニ限ル可キヲ

以テ公局ノ管事有テ其一身ニ管スルニ非スシテ其公務ニ任スル一局ニ管スル事柄ノ爲メニ他ヨリ問糺ヲ請求スルモ決テ之ヲ問糺ス

リ我訴訟法ノ如キハ即チ千六百六十七年ノ官令ニ依傍シテ乃チ正文云フ所ノ如ク唯讒毀罵詈ノ辭ヲ禁シタル丈ケナリ○實際ニ於テハ本人或ハ讒毀等ノ辭ヲ用フルヲ有ルモ掛リ裁判官之ヲ調書中ニ記入セスシテ次キニ唯本人ヲ叱責スルヲ屢之レ有リ然レモ其讒毀スル所ノ事件餘リニ重大ナルカ又ハ其本人強ヒテ其記入ヲ要求スルキハ掛リ裁判官之ヲ記入セサルヲ得ス而シテ其事件若シ相手方ニ蒙ムラスニ一箇指定シタル冤罪ヲ以テスルキハ懲治ノ刑ヲ以テ本人ヲ罰ス若シ單ニ罵辱ニ涉ルキハ違註罪ノ刑ヲ以テ之ヲ罰ス八百十九年五月十七日ノ法律第十八條及ヒ第二十條

ルヲ有ル可カラス何ツヤ管事ハ畢竟其事務ニ任スル公局ノ委員タルニ過キサルニ此一人ヲ問糺スルキハ或ハ其疎忽又ハ惡事ヨリシテ不實ノ白狀ヲ爲シ以テ本局ノ利益ヲ傷害スルヲ有ル可キカ爲メナリ是故ニ總テ公局ハ唯其官吏相共ニ評議シ且書面ニ記シタル返答ニ非サルヨリハ一切承認スルヲ無シ即チ訴訟法第三百三十六條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

「公舎ノ管事局ニ於テハ其問糺ヲ受クル箇條ヲ答フル爲メ管事者一人ヲ任シテ委任狀ヲ與ヘ其書中ニ其者ノ述フル所ハ真正ナルヲ記ス可シ但シ別ニ其事ヲ記スルヲ無キ時ハ其者ノ述ヘタル所ハ管事局ニテ之ヲ認メタルモノト看做ス可シ
又管事者其一身ノ事ニ付キ問糺ヲ受クルヲ有ル時ハ裁判所ニテ別ニ其問糺ヲ爲シ其述フル所ニ相當ノ注意ヲ爲ス可シ」

然ルニ斯ノ如クニシテ書面ニ認メタル返答ハ畢竟純粹ノ問糺式ヨリ得ル所ノ効益ヲ生スルヲ無キ者タリ他無シ眞ニ事實ヲ鈎發スルヲハ大抵口述ノ問答ト及ヒ對顔ノ上ニテ時機ヲ觀テ爲ス所ノ問答トニ在リ然ルニ豫メ書面ニ認ムルキハ一切此等ノ手段ヲ施スヲ得ス是故ニ我輩ノ意見ヲ以テスレハ右ノ公局ノ返答ハ必スシモ其管事ヲシテ持出サシムルヲ要セスシテ誰レニテモ之ヲ代理スルヲ得ルヲニ定ルニ如カス他ニ非ス既ニ委細ハ書面ニ認メタルヲ以テ其任ハ唯之ヲ差出ス丈クナレハナリ
若シ夫レ右ノ管事一人ノ與知スル事件ニ就テ問糺セントスル時ハ此レニ異ナリ此場合ニハ是非トモ其管事ヲシテ其訴訟ニ關シタル公局ノ代理ヲシメサル可カラス意フニ此時ニ於テモ若シ其事件ニ就テ此管事一人ノ返答ヨリシテ或ハ一局ノ利益ヲ傷害ス可キ

ハ前ニ云ヘル時ト同様ナル可シ是ヲ以テ此場合ニハ立法者右ノ正文ニ於テ裁判所ニ命スルニ相當ノ注意ヲ爲スヲ以テセリ故ニ此管事ノ返答如何ニ判然ナルモ裁判所ハ決テ此ヲ以テ裁判所上ノ自認ト同視シテ乃チ確證ト看做ス民法第一千三百一十有ルヲ得スシテ唯一簡ノ證據ノ申立ト同視シテ乃チ其實否ヲ考察點檢スルヲ要ス

〔第六百九十三〕 既ニ問糺ヲ了ハリタルキハ最早吟味ノ席ニ於テ之ヲ議論スル丈クナリ

訴訟法第三百三十五條ニ曰ク「相手方ノ問糺書ヲ己レノ利益トシテ用ヒント欲スル一方ノ者ハ其問糺書ヲ相手方ニ送達ス可シ然レモ双方共ニ其問糺書ニ記シタル諸件ヲ別段書類ニ記ス可カラス」右ノ規則ノ主意ハ徒ラニ裁判費用ヲ增多セシメサルニ在リ〇彼ノ官令第十卷ノ規則ニ於テハ凡ソ問糺ノ式ニ係ル費用ハ皆最初此式

ヲ請求シタル者ノ擔當ニ屬ス可キニ定メタルモ訴訟法ニハ此規則ヲ再掲セス蓋シ通常法律ノ主意ハ縱令問糺ノ式ヲ請求シタル者到底其訴訟ニ勝タルモ其問糺ノ式丈クヲ察シタルニ於テ徒ラニ其相手方ノ損失ヲ生セントスルノ意タルヲ知ル可キキハ裁判官固ヨリ其勝訴訟者ヲシテ負訴訟者ニ向テ其問糺ノ式ニ係ル費用ノ償ヲ求ムルヲ得サラシムルノ權有リ然レモ往古ノ法律ノ如クニ必ス最初請求シタル者ヲシテ其費用ヲ擔當セシムルハ甚不正ト謂ハサルヲ得ス他無シ是クノ如クスルキハ若シ一方ノ者果シテ其請求シタル問糺ノ式ノ故ヲ以テ勝利ヲ獲タルモ矢張之ヲシテ其費用ヲ拂ハシムルコトニ立至ル可ケレハナリ

五〔第六百九十四〕 問糺ノ効用ヨリシテ或ハ充分ノ證據ヲ生スルコト有リ或ハ唯證據ノ端緒ヲ生シテ乃チ此ニ由テ証人ヲ用テ證據ヲ申立ル

「得セ令ルノ効ヲ生スル」有り
民法第一千三百四十七條
但シ何レノ場合ヲ論
セス一方ノ者ハ其相手方ノ問糺既ニ了ハリタル後ニ於テモ其證書
類ヲ差出シ又ハ法律上ニ定メタル思料ノ事件ヲ申立テ以テ其相手
方ノ返答ヨリシテ生ス可キ所ノ思料ヲ論駁スルヲ得可シ

〔第六百九十五〕

抑問糺ヲ受ケタル者ノ返答シタル事項ノ中ニ就テ裁

判所其若干部ヲ採用シテ其餘ヲ棄却スル「有ルヲ得可キ乎」將々必
ズ其全部ヲ採用スルヲ要スル乎意フニ民法ノ規則ニ於テハ總テ裁
判所ニテ自認シタル事項ハ區別ス可ラサルノ主意タリ
民法第一千三百五十六條
然レモ若シ此主意ヲ誤解シテ問糺ノ返答中ニテ眞實ノ事項ト詐僞
ノ事項トヲモ區別ス可カラス杯ト思量スルキハ竟ニ以テ此手續ニ
係ル所ノ法律ノ主意ヲ沒了スルニ至ラント論ヲ待タスシテ明ナリ
此ニ由レハ民法云フ所ノ區別ス可カラサルノ主意ハ唯同一ノ事項

ニ於テ強テ區別スル所アルヲ許サ、ルニ在リト心得可シ故ニ例ヘ
ハ一方ノ者其相手方ヨリ百五十「フラン」ニ踰ユル價格ノ附托ヲ受ケ
タリト出訴セラレ相手方ニ於テ書面ノ證據無キヨリシテ一方ノ者
問糺ヲ受ル「アラ」ニハ此附托ノ事ニ就テモ金高ノ事ニ就テモ其
返還ノ事ニ就テモ一切其返答ヲ以テ信實ト看做サ、ルヲ得ス是レ
即チ民法云フ所ノ主意ナリ若シ夫レ一負債者有テ其金高ヲ借リタ
ル旨ヲ自認シ次キニ其消殺ノ事ト且自身ヨリモ貸高有ル旨ヲ返答
スルキハ此兩事ハ全ク其自認ノ事項ト別種ナルヲ以テ唯其自認ノ
事項ヲ採用シテ次キノ兩事ヲ棄却スルモ決テ彼ノ區別ス可ラサル
ノ主意ニ背戾シタルト看做ス「莫シ」啻此レ而已ナラス若シ本人ノ
返答ニ於テ詐僞ノ跡有ルキハ右ノ主意ハ全ク之ヲ用ヒサルヲ要ス
他無シ此主意ハ元來本人ノ返答ヲ以テ誠實ト思料スルヨリ起ル者

タレハナリ故ニ此場合ニ於テハ裁判官ハ刑事ニ於ケル時ト同様ニ
心得テ乃チ同一ノ事項中ニ於テモ唯其誠實ト見ユル部分丈ケヲ採
用シテ其餘ヲ棄却スルコト固ヨリ自由ナリ

第二 双方本人自ラ出席スル事

〔第六百九十六〕 以上論スル所ノ問糺ノ式ハ專ラ往古ノ遺習ヲ帶タル
者ニテ近代ニ於テ甚タ適當ナラス若シ夫レ爰ニ論セントスル式即
チ双方本人ノ出席ノ式ニ至テハ此レト違ヒ法律ニ於テ其公行ヲ禁
セサルコト猶ホ證人吟味ノ時ニ於ケルカ如シ○本人自ラ出席スルノ
式ハ裁判所ノ見計ヲ以テ之ヲ命スルヲ得可シ○此式ハ本人ヲシテ
唯口上ヲ以テ返答セシムルコト故甚簡單ニシテ且此ニ由テ若干ノ混
雜ヲ豫防シ費用ヲ儉約スルノ利益有リ○此式ハ外國派出ノ領事始
テ之ヲ用ヒ大ニ其功ヲ奏セシヨリ尋常裁判所ニ於テモ漸次ニ之ヲ

用フルコト成リ遂ニ訴訟法ニ由テ之ヲ固定セリ即チ其第百十九條
ニ左ノ文有リ
「裁判所ヨリ原告及ヒ被告ニ其代書師ヲ出サス自ラ出席スヘキコト
言渡ス時ハ其出席ス可キ日ヲ言渡書ニ記ス可シ」
〔第六百九十七〕 此式ヲ用フルヲ得可キ事件ノ如何タルコトハ我輩向キ
ニ既ニ論定セルヲ以テ爰ニ之ヲ言ハス○此式ハ裁判所ノ職務ヲ以
テ之ヲ命スルヲ得而シテ凡ソ一掛裁判官ノ前ニ出テハ其問ニ答フ
可キ者ハ皆此式ヲ用テ之ヲ問糺スルヲ得但シ此式ハ其名稱ニ云フ
所ノ如ク双方ノ者ヲシテ出席セシム可キコト故順次ヲ以テ原告被告
ヲ問糺シ其レヲシテ各其相手方ノ答フル所ヲ傍聽考檢スルヲ得セ
シム

〔第六百九十八〕 双方出席ノ式ヲ命スル言渡書ニハ唯双方ノ姓名其代

六二五

書師ノ姓名及ヒ其出席ス可キ日刻ヲ記スル而已ニシテ其間糺ヲ受
シ可キ事項ハ一モ之ヲ記セス此レ乃チ此式ノ前ニ云ヘル式ニ比シ
テ勝レル所以ナリ○又出席ノ期日ヲ延引スルハ前ニ云ヘル間糺
ノ式ニ於テハ甚危害有リ本人此間ニ乘シ其返答スヘキ所ヲ構思熟
慮スルヲ得可キヲ以テナリ爰ニ云フ所ノ者ニ在テハ然ラス既ニ其
事項ヲ預定セサルヲ以テ延日スルモ前以テ思慮スルヲ得サレハナ
リ

〔第六百九十九〕

若シ問糺セントスル双方ノ出席中ニ於テ此式ヲ言渡
スルハ別段寫取テ之ヲ送達スルヲ無フシテ唯他日確定ノ裁判言渡
書ヲ記スル時ニ於テ其身元書ノ部分ニ於テ此事ヲ記入スル而已ニ
テ足ル若シ夫レ双方本人吟味ノ席ニ在ラサル時ニ此式ヲ言渡スル
ハ是非トモ本人並ニ其代書師ニ此言渡書ヲ送達セサルヲ得ス而シ

テ必ス本人ニ送達スル譯ハ他ニ非ス問糺ヲ受ルヲハ特ニ本人ニ在
ルヲ以テナリ○然レモ實際ニ於テハ抗傳ヲ以テ言渡シタルニ非サ
ルヨリハ大抵其言渡書ヲ寫取ルヲ無フシテ唯双方ノ代書師ヨリ書
面ヲ以テ其本人ニ通知スル而已此レ特ニ裁判費用ヲ省儉スルカ爲
メナリ意フニ此手續ハ相手方本人ノ誠實ナルヲ確知スルニ非サレ
ハ甚危殆ナリ呼出狀ヲ以テ報知ヲ受ケヌシテ唯書面ヲ以テ報知ヲ
受ケタルニ於テハ相手方ニ於テ全ク報知ヲ受ケサル旨ヲ申立ルノ
權利有ルカ故ナリ○此ニ由テ觀レハ縱令其言渡書ヲ寫取ラサルモ
責テハ其言渡書ニ由テ一箇ノ招書ヲ送達スルヲ良シトス然ラサレ
ハ相手方其日ニ出席セサルモ此ヲ以テ適當ニ抗傳ノ言渡ヲ爲スル
ヲ得ス

七二五

〔第七百〕

双方ノ者ヲ問糺スルヲハ裁判所上席人之ニ任ス而シテ此レ

ハ或ハ一方ノ面前ニテ其相手ヲ問糺シ又相手方ノ面前ニテ其一方
ヲ問糺シ亦或ハ時宜ニ由リ各別ニ之ヲ問糺ス〔第六百八十九〕而シテ双方
ノ返答ニ記スルコトニ係テハ法律一モ其規則ヲ揭示セス故ニ縱令別
段ニ此レカ爲メ一調書ヲ作ルモ以テ裁判費用中ニ入ル、ヲ得ス但
シ他日言渡書ヲ記スル場合ニハ其中ニ於テ必ス双方ノ返答ヲ記入
スルヲ要ス

〔第七百一〕 此式ニ由テ得可キ所ノ効用ハ前ニ云フ所ノ式即チ掛リ裁
判官ノ前ニ於テ問糺シタル返答ニ由テ得可キ所ノ者ト同様ナリト
ス而シテ彼ノ自認シタル事項ヲ區別ス可カラサルノ主意ニ依準ス
ルコトモ前ニ云ヘル場合ト同様一概ニ拘泥セスシテ必ス取捨スル所
有ルヲ要ス

〔第七百二〕 若シ一方ノ者其問糺ヲ受ク可キ日ニ出席セサルハ此ヲ

以テ其相手方ヨリ申立ル所ノ事件ヲ自認シタルト看做ス可キ乎曰
ク爰ニ云フ場合ニ於テ出席セサルコト前ニ云ヘル問糺ノ式ニ出席
セサルコトハ大ニ輕重ノ在ル有リ爰ニ云フ場合ニ於テハ其問糺ヲ
受ク可キ事項ノ如何タルコトハ本人始ヨリ之ヲ知ラサルヲ以テ縱令
出席セサルモ前ノ如ク判然其自認ヲ思料ス可カラス但シ其者適當
ニ報知ヲ受ケ且事故有ルニ非スシテ出席セサルキハ亦或ハ其自認
ヲ思料ス可キヲ以テ時機ニ由リ其出席シタル者ヲシテ勝訴訟ヲラ
シムルヲ得可シ他無シ其出席シタル者ハ其中立ノ至當ナルニ就テ
更ニ自信ノ意有ルヲ見ル可キカ故ナリ

第七章 裁判所ノ宣誓

九三五 〔第七百三〕 問糺ノ式ヲ用テ本人ノ自認ヲ催求スルノ外仍ホ一箇ノ更
ニ峻切ニシテ更ニ嚴重ナル手段ノ在ル有リ即チ相争フ事件ニ就キ

本人ヲ要求シテ誓詞ヲ宣ヘシメ以テ其誠心ニ依托スルコト是レナリ
 ○宣誓ノ事タル神明ノ照鑒ヲ以テ自己ノ陳述ヲ證確スル者ニテ其
 類ニ有リ一ハ己往ノ事件ニ係テ其實事ヲ具陳スルヲ主トス其名ヲ
 首實ノ宣誓ト曰フ一ハ將來ノ事件ニ係テ其約定ヲ擔保スルヲ主ト
 ス其名ヲ要約ノ宣誓ト曰フ裁判所ニ於テ用フル所ノ宣誓ハ右ノ首
 實ノ宣誓ノ類ナリ

〔第七百四〕 首實ノ宣誓ハ或ハ一方本人ヨリ其相手方ニ對シテ之ヲ要
 求スルコト有リ或ハ裁判官双方ノ者ノ中ニ就キ其衷情ノ最モ頼ム可
 シト爲ス所ノ者ニ之ヲ命スルコト有リ第一ノ場合ニ於テハ之ヲ判決
 ノ爲メノ宣誓ト名ツク他無シ此宣誓丈ケニテ其訴訟ヲ判決スルヲ
 得可キカ故ナリ第二ノ場合ニ於テハ之ヲ充補ノ爲メノ宣誓ト名ツ
 ク裁判官此ヲ以テ其既ニ得タル所ノ證據ヲ充補スルカ故ナリ○判

決ノ爲メノ宣誓ハ總テ双方本人ノ私談ニ因テ成ル者タリ故ニ我カ
 相手方我レニ向ケテ宣誓ヲ要求シ我レ己テニ之ヲ行フキハ以テ其
 訴訟ノ勝利ヲ獲可シ若シ又我レ自ラ誓ヲ宣ヘス亦之ヲ我カ相手方
 ニ要求セサルキハ我レニ於テ暗ニ自認ノ跡有ルヲ以テ我カ相手方
 果シテ其誓ヲ宣ヘタルキハ我カ訴事ハ此レカ爲メ失敗ス可キナリ
 ○充補ノ爲メノ宣誓ハ畢竟裁判官用フル所ノ證據ノ一種タルニ過
 キサルヲ以テ裁判官縱令之ヲ命スルモ確定ノ言渡ヲ爲ス時ハ必ス
 シモ一々此レニ依テサルノ權ヲ有ス○判決ノ爲メノ宣誓ハ何レノ
 事件ヲ問ハス皆之ヲ用フルヲ得可シ但シ法律ニ於テ總テ證明スル
 ヲ禁シタル場合ハ固ヨリ格別ナリトス若シ夫レ充補ノ爲メノ宣誓
 ニ至テハ然ラズ是レハ凡ソ證人ヲ用テ證ヲ立テシムルヲ得可キ事
 件ノ外ハ一切用フルコト有ルヲ得ス○以上云フ所ノ區別ハ法律ノ注

意ヨリシテ言フモ宣誓ニ係ル所ノ手續ヨリシテ言フモ甚大切ノ事

ニテ我輩仍ホ次キニ之ヲ細論セントス

〔第七百五〕 訴訟法ニ於テハ裁判官渡ノ章ニ於テ宣誓ノ規則ヲ揭示セ

リ是レ他無シ宣誓ヲ命スルニハ一箇ノ言渡ヲ要スルカ故ナリ左ニ

正文第百二十條ノ文ヲ出ス

「誓ヲ爲ス可キノ言渡書ニハ其誓ヲ爲ス可キ事柄ヲ記ス可シ」

充補ノ爲メノ宣誓ノ如キハ唯裁判官而已之ヲ命シ且ツ其訴事タル

充分ノ證據ヲ有セス亦全ク證據無キニ非サル場合民法第千三百六十七條ニ命

ス可キ者ナル故法律云フ所ノ如ク必ス一箇ノ言渡ヲ爲ス可キヲ固

ヨリナリ若シ夫レ判決ノ爲メノ宣誓ノ如キハ雙方各々之ヲ其相手方

ニ要求スルヲ得可ク且何レノ事件ニ係テモ亦未タ證據ノ端緒有ラ

サル者ニ就テモ之ヲ用フルヲ得可キ故民法第千三百五十八條及ヒ第千三百六十條

味ノ席ニ於テ直チニ之ヲ許諾シテ執行フヲ得可シ但シ雙方本人

居合ハサルカ又ハ其間差支有ルキハ格別ナリ○是故ニ雙方ノ者吟

味ノ席ニ居合ヒテ其一方ノ者直チニ之ヲ執行フキハ裁判官ハ唯其

宣誓シタル由ヲ證スル爲メノ一書ヲ記シ次キニ確定ノ言渡ニ係テ

其相當ノ効用ヲ採収スル丈ケナリ○此ニ由レハ裁判所ニ於テ判決

ノ爲メノ宣誓ヲ允許ス可キト否サルトニ就テ豫メ一箇ノ言渡ヲ爲

スハ唯双方ノ一人ノ不適當ナル等ノ旨ヲ述ヘテ差支ノ生シタル

場合ニ限ル者ト心得可シ

右ノ若クニシテ其宣誓ヲ允許スルト否サルトニ係テ其言渡ヲ爲ス

場合ニ於テハ前ニ云ヘル本人出席ノ式ニ係ル時ト違ヒ必ス其誓詞

ヲ以テ其自ス可キ事項ヲ豫定セサル可ラス宣誓ノ事タル極メテ嚴

格ニシテ極テ重大ナルヲ以テ本人ニ在テハ充分思考シテ自ラ決斷

スル所有ルヲ要スルガ故ナリ又宣誓ノ事ハ專ラ本人ヲ爲ス可キ所
ナルヲ以テ之ヲ命スル言渡ハ當ニ其代書師而已ナラズ必ズ本人ニ
モ送達スルヲ要ス即チ訴訟法第四百十七條云フ所是レナリ

〔第七百六〕 誓詞ヲ宣フルハ必ズ本人自ラ之ヲ爲ス可シ往古或ル裁

判所ニテ實際ニ行ハレタル如ク代書師ノ紹介ヲ以テ之ヲ爲ス可ラ
ス即チ訴訟法第二百一十一條ノ規則ヲ左ニ揭示ス

「誓ハ本人自カラ吟味ノ席ニテ之ヲ爲ス可シ○相當ニシテ且確證ア
ル故障アリテ本人出席スルヲ能ハサル時ハ裁判所ヨリ特ニ任シタ
ル裁判役書記官ト共ニ其家ニ至リ己レノ面前ニテ誓ヲ爲サシム可
シ

誓ヲ爲ス可キ者隔遠ノ地ニ居ル時ハ其訴訟ヲ管スル裁判所ヨリ其
居所ノ裁判所ニ於テ誓ヲ爲ス可キヲ言渡ス可シ

何レノ場合ニ於テモ誓ハ相手方ノ面前ニテ之ヲ爲シ又ハ己レノ代
書師ヲシテ相手方ノ代書師ニ其招書ヲ送ラシメ相手方ヲ呼出シタル
上ニテ之ヲ爲シ又相手方代書師ヲ任シタルヲ無キ時ハ誓ヲ爲ス可
キ日ヲ記シタル呼出書ヲ送り相手方ヲ呼出シタル上ニテ之ヲ爲ス
可シ

右ノ正文ニ於テ相手方代書師ヲ任シタルヲ無キ時ト有ルハ前ニ云
ヘル判決ノ爲メノ宣誓ノ場合ニ非ス此種ノ宣誓ハ相手方必ズ其代
書師ヲシテ之ヲ要求セシム可キヲ以テナリ故ニ右ニ云ヘルハ充補
ノ爲メノ宣誓ヲ指ス者ナリ此種ノ宣誓ハ被告人抗傳シタル場合ニ
於テ原告人自ラ請フテ之ヲ爲スヲ得可キヲ以テナリ

又相手方ノ面前ニ於テ其誓ヲ宣ヘシムルノ主意ハ他ニ非ス現ニ其
訴事ノ理由ヲ知りタル者ノ前ニ於テスルキハ敢テ虚偽ヲ吐キ以テ

其誓ヲ讀スヲ自忌ス可キカ爲メナリ○我輩意フニ此事ニ就テハ
 シテ一ツ國用フル所ノ手續ニ倣フテ乃チ宣誓者ヲシテ自ラ其誓ヲ
 爲スノ重大タルヲ顧慮スルノ暇ヲ得セシメテ然ル後宣誓セシムル
 ナリ夫大ニ勝レリトスシテ一ツ國ノ法律第三百七十三條ニ依レハ裁判所ノ
 上席人吟味ノ席ニ於テ本人ニ向ヒ其誓ヲ宣フ可キ事項ヲ告示シ且
 之ヲ試ムルニ演誓ニ係ル所ノ罰目ヲ以テシテ後之ヲ還ヘシ再ヒ吟
 味ノ席ヲ開テ方サニ其誓詞ヲ宣ヘシム意フニ我裁判所ニテモ此手
 續ヲ用ヒテ法律上ニ於テ少モ抵觸スル所有ルヲ無シ

第七百七

現今實際ニ用フル所ノ宣誓ノ體裁ハ甚簡單ニシテ唯宣誓
 ナシテ其手ヲ掲ケ以テ云々ノ事ノ眞實タルヲ述ヘシムル而已治罪
 第三百十二條見合 意フニ本人ヲシテ各其信奉スル所ノ宗旨ノ定式ニ徇ズテ
 之ヲ行ハシムルニ於テハ其自ラ衷心ニ忌憚祇敬ノ念ヲ發スルヲ更

ニ大ナルヲ得可シ故ニ例ヘバ猶太人ニ係ル時ニ於テハ其レヲシテ
 自ラ猶太宗ノ嚴重ニシテ且錯綜セル儀式ヲ用ヒ以テ通常ノ儀式ニ
 易ラルヲ得セシムルヲ良シトス然ルニ論者皆云フ立法者彼ノ經典
 ニ依テ誓詞ヲ宣フル等ノ如ク總テ特設ノ體裁ヲ以テ強テ之ヲ命ス
 ルヲ肯ソセサル所以ハ他ニ非ス苟モ明神ノ現在スルヲ信執ス
 ルナラハ其奉祭ノ儀式ハ何レヲ論セス皆唯通常普行ノ規則ヲ用テ
 誓ヲ宣ヘシムルヲ以テ良シトスレハナリト又云フ彼ノ「カツケル」人
 米利堅合邦及ヒ和蘭ニ行ノ若キハ素ヨリ經典ノ文義ヲ墨守シテ乃
 ハルハ宗派ヲ奉スル者ナリ一切明神ノ名ヲ唱ヘテ誓フヲ禁スルヲ故此輩ハ既ニ裁判所ニ
 於テモ唯其衷情ニ反求シテ誓詞ヲ宣フルヲ許セリト此レ誠ニ然
 リ故ニ我輩ノ意モ固ヨリ此種ノ人ヲシテ強テ明神ノ名ヲ要シ以テ
 自己ノ宗旨ニ背戻セシメント欲スルニ非ス故ニ此輩ノ如キハ宜ク

他ノ儀式ヲ以テ神誓ノ式ニ易フルヲ得セ令ム可キナリ若シ夫ノ其
餘ノ者ニ至テハ各其宗旨ニ依テ公然許ス所ノ儀式有ルヲ以テ即チ
裁判所ノ誓ニ於テモ矢張其志願ニ任セテ之ヲ用フルヲ得セヨムル
ニ如カス

〔第七百八〕凡ソ宣誓ハ判決ノ爲メノ宣誓タルニ於テハ皆雙方本人ノ
私談ニ因テ成ル是故ニ本人苟モ承諾スルキハ裁判官是非トモ之ヲ
允許セサルヲ得ス但シ双方ノ者ヨリ豫メ其宣誓セントスルノ意ヲ
申出サルニ於テハ裁判所固ヨリ之ヲ検査シ以テ其誓ヲ要求シタル
者ノ果シテ適當者タルヲ審定スルノ權有リ○又一方ノ者既ニ自ら
誓ヲ爲スチ肯ンセス亦其相手方ニ向ケテ之ヲ要求スルヲ無フシテ
其者適當者タルニ於テハ裁判所必ス此者ヲ以テ負訴訟ト爲サハル
ヲ得ス○又前ニ云ヘル所ノ事項ヲ區別ス可カラサルノ主意ハ宣誓

ノ事ニ係テモ全ク自認ノ場合ト同様ナリト心得可シ

〔第七百九〕若シ本人其誓ヲ宣ヘントスルニ際シ病死又ハ災禍ニ因テ
之ヲ宣フルヲ得サルヲ有ルモ實際ニ於テハ動モスレハ既ニ其事ヲ
成シタルト看做スヲ有リ此レ甚法律ノ主意ニ適合セス成ル程一方
ノ者宣誓ヲ相手方ニ要求シテ相手方既ニ之ヲ承引スル旨ヲ陳述シ
タルキハ法律ニ於テ一方ノ者ヲシテ最早其要求ヲ取消スヲ得サ
ラシム 民法第一千三百六十四條 然レモ直ニ此ヲ以テ其相手方己テニ其誓ヲ宣ヘ
タリト看做スヲハ有ル間敷キ事タリ他無シ設シ相手方ヲシテ現ニ
實地ニ臨マシメシナラハ或ハ其衷情ニ忌悔スル所有テ其誓ヲ成ス
能ハサリシカナ計ル可カラサレハナリ○此ニ由テ觀レハ唯其宣誓
ヲ承引シタル丈ニテハ未タ以テ成就シタルト看做ス可カラス但シ
右ノ場合ニ於テ本人既ニ其宣誓ヲ承引シテ後其相手方却テ詐術ヲ

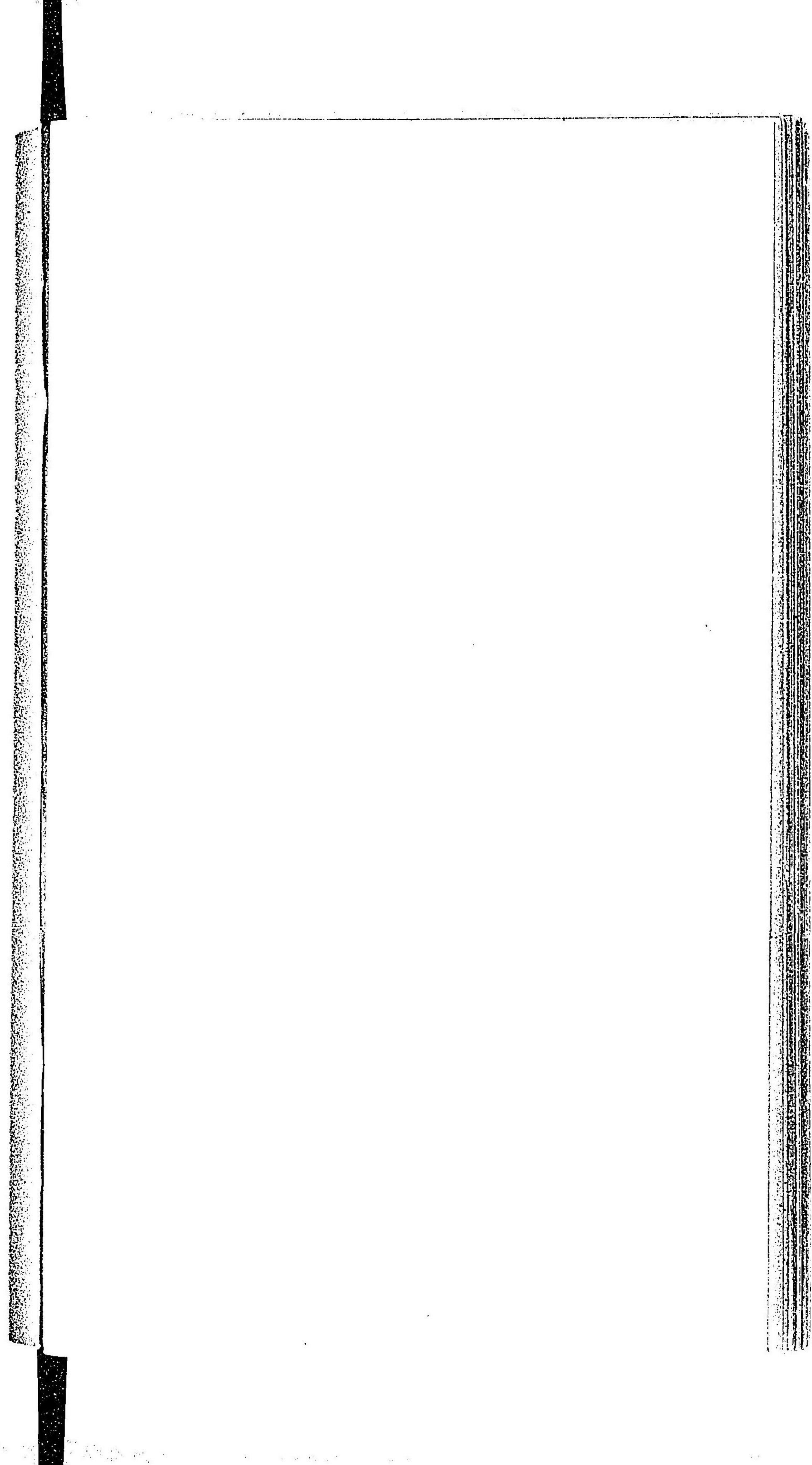
21-197

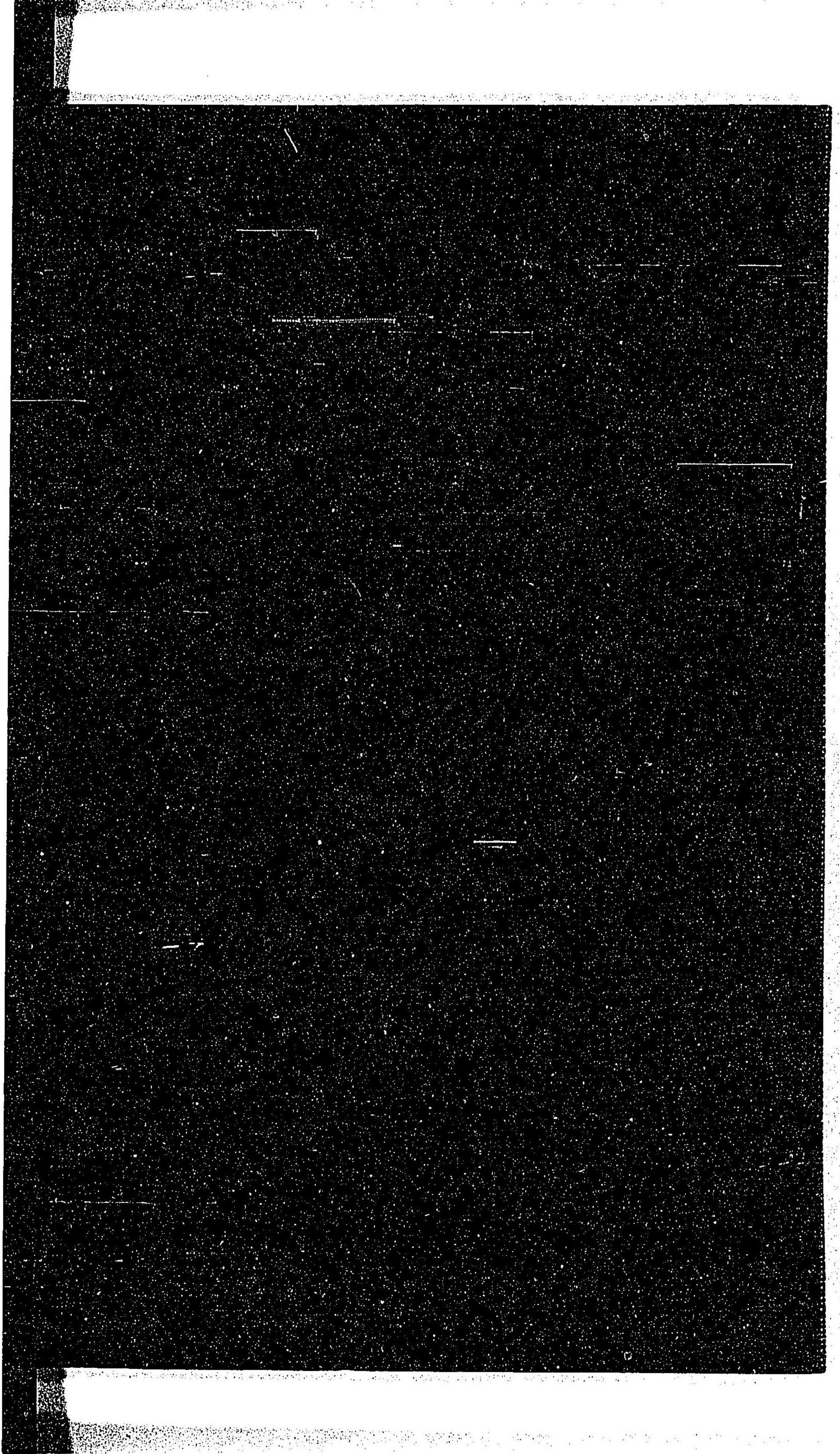
エフエム - 13

○四五

用テ故テニ其執行ヲ遅延セシメタルノ跡顯著ナルキハ格別ナリト
ス民法第八百七十八條

[Faint, illegible text, likely bleed-through from the reverse side of the page]





21

197